社団法人 米沢有為会々誌

まほろば　加藤今朝雄

復刊第61号　平成23年9月

登録商標第1457084号

米沢牛販売店

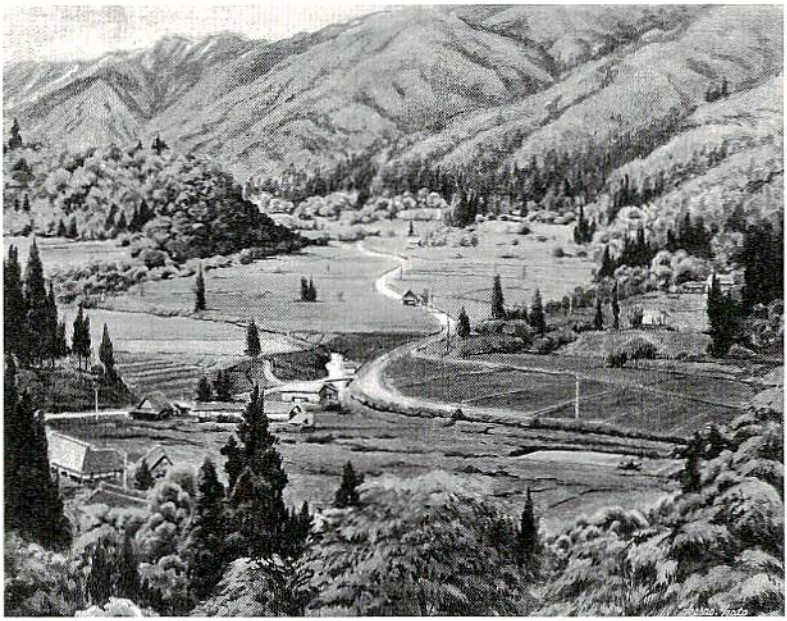
日本橋　　日　山

日本橋　日山本店	中央区日本橋人形町２－５－１	TEL０３（３６６６）５２５７
すき焼き割烹　日山（予約が必要です）	中央区日本橋人形町２－５－１	TEL０３（３６６６）２９０１
日山　横浜店	横浜市西区南幸１－５－１　相鉄ジョイナス内Ｂ１	TEL０４５（３２１）６６４９
日山　亀戸店	江東区亀戸５－１－１　亀戸駅ビルアトレ内Ｂ１	TEL０３（３６３８）１１２９

米沢牛銘柄推進協議会　　米沢牛出荷組合
山形おきたま農業協同組合

社団法人 米沢有為会々誌

復刊第61号



ま ほ ろ ば　加藤 今朝雄
〔平成16年度 米沢水彩画会展 奨励賞〕

加藤　今朝雄

［画　歴］

昭和二年三月十六日
　米沢市簗沢に生まれる
昭和二十年三月
　米沢興譲館高等学校（夜間）卒業
昭和二十一年十二月三十一日
　三沢東部国民学校奉職
昭和二十三年三月
　山形師範特設研究科卒業
昭和六十二年三月　教職を退職
平成二十二年九月
　加藤今朝雄画集発行
平成二十三年一月五日　逝去

［画　略］

日本水彩画展　九回入選
山形総合美術展　十三回入賞・入選
米沢緑光会
山形県水彩画会展
米沢水彩画展
えくぼ展
内藤秀囚水彩画
　等、各種絵画展に入賞・入選

目　次

御挨拶　名誉会長　上杉　邦憲 …… 4
会長あいさつ　会　長　須貝　英雄 …… 6
本部活動報告
第123回 定時総会 …… 8
本部各部門の主要活動報告 …… 14
本部主要委員会の活動報告 …… 20
「私の志」23年度奨学生の作文 …… 22
寄宿舎、奨学制度利用者一覧 …… 25
米沢有為会「文化大学」 …… 26
支部だより　東京支部 …… 30
米沢支部 …… 32
仙台支部 …… 37
京都支部 …… 40
北海道支部 …… 42
興譲館寮だより　東京興譲館 …… 44
仙台興譲館 …… 47
我妻榮記念館だより …… 50
特別寄稿(1) 民法の巨峰・我妻　栄先生 …… 53
置賜市町だより　米沢市 …… 59
長井市 …… 65
南陽市 …… 70
高畠町 …… 74
川西町 …… 76
小国町 …… 80
白鷹町 …… 83
飯豊町 …… 86
特集：会誌首号全掲載（昭和24年版） …… 89
特別寄稿(2) 伊東忠太のトルコ旅行と米沢有為会 …… 108
トピックス …… 115
1「天地人像」建立、2 前田慶次400回忌供養祭
会員の広場 …… 118
米沢有為会設立120周年記念事業協賛者名簿 …… 122
米沢有為会設立120周年記念チャリティふるさと展協賛者名簿 …… 127
東日本大震災義援金応募者名簿 …… 128
役員名簿（平成23年９月） …… 130
賛助会員名簿 …… 139
編集後記 …… 140
本部・各支部事務所等所在地 …… 141

御挨拶

名誉会長　上杉邦憲

有為会会誌第六十一号発刊に寄せて一言御挨拶を述べさせて戴きます。

東日本大震災から間もなく半年が経とうとしています。有為会関連では、仙台興譲館はじめ仙台支部の皆様や米沢においても人的被害が無かったのは不幸中の幸いでしたが、我妻記念館の損傷などの直接的被害だけでなく、畜産、農業への風評被害もあり、復興への道のりも容易ではないと思います。心よりお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復興をお祈りしております。

先日、震災発生直後に四十時間かけて被災地に入って以来、ほぼ四ヶ月近くボランティア活動を続けてきた友人と会う機会がありました。奈良県生まれで阪神大震災の被災者でもある彼が言うには、被災地や避難所での東北人の礼儀正しさ、忍耐強さは関西人にとっては驚きであり、心打たれることがしばしばだった、ということでした。

その時思い出したのは、「日本人という病」（河合隼雄著）という本に書かれた（それは阪神大

震災後のことについてでしたが）「震災直後はあまりにショックが大きいと、自分を守るためにそれを感じないようにという本能が働くことがある。しかし時間が経つとともに巨大な悲しみに襲われる。従って、むしろ今の方が最も辛い時期かもしれない。しかし遠く離れた地に住む人達からは被災者への共感が薄れていき、そこに心理的な壁が出来てしまう」という文でした。

忍耐強いといわれる東北の被災者が、今まさにこのような状況に置かれているのではないかと思う時、私たちに何が出来るかを考えざるを得ません。「頑張ろう日本」の掛け声もいいのですが、「頑張れ」と言うより「明けない夜は無い」「止まない雨は無い」という言葉の方が被災者を元気付けるには良かったと先の友人が言っていましたが、被災者の悲しみに真摯に向き合うことによって、心理的な壁ではなく絆を築くことが出来るのではないでしょうか。

勿論精神的支援だけでなく物的支援が重要であることは言を俟ちません。現在有為会では、被災地の復興と被災者への支援のお役に立つことを願って義捐金募集を行っていますが、会員の皆様からの篤いご支援を得ることが出来れば、郷土との絆を繋ぐ意味からも素晴らしいことだと思います。

末筆ながら、有為会の益々の発展と会員皆様のご健勝・弥栄を祈念して御挨拶と致します。

会長あいさつ

会長　須貝英雄

本年六月二十五日開催の総会ならびに同月三十日開催の理事会において、下條前会長の後を受けて新たに会長に就任した須貝です。下條前会長の約八年間にわたる貢献に感謝の意を表するとともに、会長としての新たな任務の重さを考えると身の引き締まる思いでいっぱいです。

当米沢有為会は、皆さんもご存じのように、明治二十二年に伊東忠太先生をはじめとした六名の有志が創立して以来、多くの先輩諸氏により連綿と受け継がれ、一昨年百二十周年を迎えることができました。激動の世代を乗り越えてきたその歴史の重さに改めて凛とさせられる思いです。

当会本来の目的である、「育英事業その他の学術および文化の振興などに関する事業を行う」ことの精神に沿って日々活動を展開中ですが、その中でも特に、現在、公益社団法人の認定をめざした活動を鋭意推進中です。私たちの努力が認められ、幸い公益社団法人に認定された後も、新たな定款に沿って公益法人にふさわしい活動実績を残す必要があること等多くの課題もあります。東日本大震災をはじめとして、私たちを取り巻く環境は社会的にも経済的にも厳しいものがありますが、その中にあってもこれらの諸課題を着実にこなしながら新たな米沢有為会の発展のため、会員皆様および役員皆様方のご協力をお願いする次第です。

本部活動報告

定時総会及び付帯催事に関する報告

一、定時総会の報告

㈳米沢有為会の第一二三回定時総会は、平成二十三年六月二十五日(土)十四時～十五時十五分、ホテルサンルート米沢で開催されました。

開会に当たり、去る三月十一日に発生した東日本大震災の被災者に対し黙祷により哀悼の意を表しました。その後、下條泰生会長及び副会長の安部三十郎米沢市長より挨拶がありました。

続いて定款第一四条第二項の規定により会長が議長となり、開会を宣言して直ちに議事に入りました。

第一号議案　平成二十二年度事業・業務報告の件

配布の米沢有為会会報（以下「議案書」という。）記載の「平成二十二年度事業・業務報告」に沿って平山英三総務部長より説明及び報告があり、採決の結果全会一致で可決されました。

昨年との主な違いは、震災によって、東京、米沢間の交通が途絶えたことにより、奨学生の面接と東京興譲館の入寮面接を米沢支部に依頼して行ったこと、仙台興譲館の入寮面接を四月半ばに行ったこと、奨学生決定の理事会を三月に行い三月中に奨学生採否の連絡を行ったことなどです。なお、奨学生の追加募集を行いましたが応募はありませんでした。

第二号議案　平成二十二年度決算及び監査報告の件

議案書記載の「平成二十二年度決算報告書」に沿って、鈴木信之財務担当理事より説明及び報告があり、また、西澤榮一監事より監査報告があり、採決の結果全会一致で可決されました。

第三号議案　平成二十三年度事業・業務計画(案)の件

議案書記載の「平成二十三年度事業・業務計画(案)」

について平山総務部長から全般の説明があり、採決の結果、賛成多数で可決されました。

第四号議案　平成二十三年度収支予算(案)

議案書記載の「平成二十三年度収支予算(案)」に沿って鈴木信之財務担当理事より説明があり、採決の結果、賛成多数で可決されました。

第五号議案　公益認定申請の件

平山総務部長から公益認定準備委員会のこれまでの検討経緯と議案書記載の「定款の変更の案」、「公益社団法人米沢有為会会員規程(案)」及び「公益社団法人米沢有為会総会運営規則(案)」の説明があり、採決の結果、本案は定款四六条に定める定款の変更に必要な四分の三以上の賛成多数で可決されました。

なお、新定款附則第二項に記載する代表理事である会長及び副会長は、第六号議案の一で選任された理事の互選で選ばれる会長及び副会長で第六条の二で選任された新定款による理事でもあるものとすることを確認の上、議決しました。

第六号議案　役員選任の件

平山総務部長から議案書配布後、一名の候補者から推薦辞退の申し出があったことが報告され、この一名を除く候補者に付き個別に採決したところ、いずれも議決権行使書に一～二名の反対があったのみで賛成多数で可決されました。

〈現行定款に基づく役員の改選（任期は平成二十三年六月三十日から二年間、ただし、公益認定され移行すればそれまで)〉

理事　安部三十郎、安部英夫、石原俊一、梅津幸保、大滝則忠、貝沼孝二、加藤国雄、甲　國信、上村勘二、菅野榮三、菅野憲幸、小山　泰、佐藤　毅、柴田　孝、須貝英雄、鈴木幸一、鈴木信之、情野文男、高橋　勉、種村信次、手塚　修、中川紘一、沼澤研一、平山英三、米野宗禎、御供政敏

（以上二六名）

監事　伊藤秀太郎、中條良文、西澤榮一、本多和彦（以上四名）

〈新定款に基づく役員の選任（新定款が公益認定された後、登記により任期が開始する。）〉

理事　梅津幸保、貝沼孝二、加藤国雄、甲　國信、小山泰、佐藤　毅、須貝英雄、鈴木信之、種村信次、手塚　修、沼澤研一、平山英三、米野宗禎（以上十三名）

監事　伊藤秀太郎、西澤　榮一（以上二名）

第七号議案　議案決議効力発生の件

議案各号の総会議決についての行政機関への申請、登記の申請の際に書類の訂正を求められた場合、本総会議決の趣旨の範囲内で訂正することを理事会に委任する旨の議案を承認しました。

会務報告

（一）議案書記載の参考資料「一二〇周年事業収支報告書」につき中川紘一事務局長から説明があり了承されました。

（二）東日本大震災義援金の応募状況（途中経過）が報告され、応募者六十名、応募金額五〇五、〇〇〇円（六月二十二日現在）でした。

（三）甲國信仙台支部長から大地震による仙台興譲館寮の建物及び寮生に被害がなかったこと、並びに支部会員の被災状況の詳細は調査中だが、人命にかかわる被災は無かったことが報告されました。

すべての議事が終了した後、退任理事を代表して下條泰生会長より挨拶がありました。また、改選された理事、監事が紹介され、代表して須貝英雄副会長より挨拶があり、閉会しました。

二、功労賞、特別顕彰表彰式

本年度の産業功労、特別顕彰として次の方々に決定、それぞれ表彰状と記念品が授与されました。

なお、今年度の教育功労については該当はありませんでした。

○産業功労賞

米沢ビジネスネットワークオフィス 殿

持続発展が可能な地域社会を構築することを目指し、米沢地域の情報化戦略策定と地域価値の創出を目的として平成十三年十月に設立された。

米沢地域の産業界や山形大学工学部だけでなく、地域行政、金融機関、地元医師会とも連携し、新しい視点に立脚した地域産学官連携ネットワークを構築し活動を実施している。具体的な活動としては、定期的な産学官交流会やワークショップの開催、他地域（会津若松、東京都荒川区等）の企業と米沢のものづくり企業との連携活動、企業経営者、技術者向けの各種講演会及び研修事業、米沢工業高校専攻科へ支援等を実施している。

このような、一団体としての地域に根ざした取り組みは他地域では行われていない先進的なものであり、米沢市の工業振興においても多大な貢献を果たしている。

㈱田んぼ花の里李山 殿

平成十四年任意団体「田んぼ花の里李山」を組織し、「米の生産から脱却しそれに代わる新たな作物を模索、且つ地域の生計を立てていく事」を課題として活動を始め、平成二十一年に株式会社として法人化した。

活動としてまず荒れた休耕田を再び活かすべく、付加価値性の高い花卉類の栽培に着手した結果、周年生産体制を確立した他、高齢化した地域の人々の活性化へと繋がった。

食の多様化・健康志向という近年の消費者ニーズに対してはその変化を柔軟に捉え、米粉麺の販売をいち早く実践し、その付加価値を高めることによって米の消費拡大に大きく貢献した。現在では市内全小中学校の給食で利用される等、多方面へと可能性を広げている。

また、県特産品ながらも米沢では周知されていなかった啓翁桜を数年前から栽培し、祭りや卒業式シーズンの学校等のイベント、公共施設等での展示・販売を行った結果、現在では市民への周知拡大、季節の風物詩として無くてはならない存在にまで価値を高めるとともに、生

産者の意欲を大きく向上させた。

○特別顕彰

山木伝説（米沢市立第四中学校三年）殿

第三十一回　東北中学校陸上競技大会
　　共通４００Ｍ　優勝
第三十七回　全国中学校陸上競技大会
　　男子４００Ｍ　優勝

大久保琳太郎（米沢市立第四中学校二年）殿

第四十二回　東北中学校水泳競技大会
　　男子１００Ｍ・２００Ｍ平泳ぎ　優勝
第五十回　全国中学校水泳競技大会
　　男子１００Ｍ平泳ぎ　二位
第三十三回　ＪＯＣジュニアオリンピックカップ
　　夏季水泳競技大会
　　13～14歳男子50Ｍ・１００Ｍ平泳ぎ　優勝

斎藤　佑介（長井市立長井北中学校二年）殿

平成二十一年度山形県中学校総合体育大会
ソフトテニス競技　個人優勝
平成二十二年度山形県中学校新人体育大会
　　ソフトテニス決勝大会　団体優勝
第五回ソフトテニスジュニアジャパンカップ
　　Ｕ－14　ダブルス男子　優勝

○本部総会　講演会

講師・山形大学教授　柴田　孝氏

リーダーは現実と向き合って

定期総会に引き続き講演会が行われた。講師は山形大学教授（産学連携）柴田孝氏。演題は「震災後、豊かな置賜づくり」～大変だけど大丈夫～。

「これまで大きく変わったのは明治維新と終戦の二回しかない。今回の震災で何がわかったかというと雲が晴れて見えてきただけ。今は二十年後をどう見るかだ。失敗の原因は現実から目をそらすことと硬直化にある。モノが飽和状態の今は衰退していくのみ。リーダーは現実と向かい合い理解する力が必要だ。生き残れる企業は時代の変化に対応している。置賜が活性化するにはソフトを分析し、弱みを把握すること。リーダーの力量が試されていく」。

本部各部門の主要活動報告

○総務部

平成二十二年度の総務部は、副会長の指導の下、適時総務部会を開きながら今後の検討や分担を決め、財務担当理事及び事務局と緊密に連携しながら仕事を進めてきました。

役員選考委員会の設置が提案され、公益法人改革の方向に沿ったものでもあることから役員選考規程が制定されて、役員選考委員会が発足しました。その概要は別途報告されていますのでご覧下さい。

引き続き公益法人移行の認証申請に向けての検討が進められ、その検討の一部は「定款の変更の案」として第一二三回定時総会に提案され、結実しました。今後認定申請に向けて更に努力していきます。

今年度は次年度奨学生を決定する理事会を前倒しして前年度中に採用の可否を通知できるようにいたしました。

また、三月十一日の東日本大震災については、仙台興譲館寮と我妻榮記念館の安否確認、会員の安否と被災状況の確認がなかなか出来ず、今後の反省点となりました。一二〇周年事業で興譲館寮の改修を行ったことが幸いし二つの興譲館寮には大きな損害はありませんでしたが、我妻榮記念館は老朽化が進んでいることもあり損傷がひどく八月末にようやく復旧できました。その復旧費には多額のご寄付があったことをご報告いたします。

この大震災への対応として奨学生の追加募集を致しましたが応募はありませんでした。また交通途絶のため、奨学生と東京興譲館舎生の面接を米沢支部にお願いして行いました。

理事会の際に義援金を出し合おうとの話が出ましたが、広く募集してはどうかとの提案があり、米沢有為会として広く義援金を募集することになりました。その結果は別途報告されていますのでご覧下さい。

○教育部

平成二十三年度奨学金貸費生選考の報告

平成二十三年度の奨学金貸費生の募集については、例年どおりの募集要項によって置賜三市五町内の高校から推薦して頂きましたが、選考については例年とは全く異なる方法によりました。

それは、三月二十六日の選考日直前の三・十一東日本

大震災による交通機関の不通、被災者避難所のため面接会場の確保の不能、通信機関の不通等々、大幅にその方法の変更を余儀なくされました。

ようやく確保した面接会場が極端にせまい小部屋で、応募者の控室もとれないなどの状況のため、面接は高橋勉教育部長、上村勘二教育部理事、手塚修本部理事が行い、鈴木隆米沢支部事務局員が概要説明等を行いました。

面接等の結果について、三月二十七日の本部理事会に報告されて審議し、次の五名が平成二十三年度奨学生として決定しました。（氏名は五十音順）

遠藤　泰治
東京工業大学大学院イノベーションマネージメント研究科入学・北海道大学法学部卒・米沢市中央出身

高橋　朋也
東北学院大学文学部英文学科入学・高畠高卒・米沢市堀川町出身

鷹森　翔太
山形県立保健医療大学保健医療学部看護学科入学・米沢興譲館高卒・米沢市万世町出身

増田　高範
電気通信大学情報理工学部総合情報学科入学・函館ラサール高卒・米沢市下花沢出身

松嵜　祐樹
早稲田大学創造理工学部経営システム工学科入学・米沢興譲館高卒・米沢市城西出身

二十二年度高等学校卒業生表彰（二十三年二月表彰）

郷土の人材育英支援事業の一環として米沢・置賜地区の高等学校の当年度卒業生で学業、部活動、生徒会活動等で、特に優れた活動した生徒を各高等学校長より推薦をいただいて表彰しております。

今年度の高等学校卒業生表彰者は次のとおりです。

武　真祈子　米沢興譲館高等学校（小国町）
遠藤　淳史　米沢商業高等学校（米沢市）
佐々木愛信　米沢工業高等学校（川西町）
伊藤　秀哉　米沢東高等学校（米沢市）
山本　芽依　米沢中央高等学校（米沢市）
島貫　裕子　九里学園高等学校（川西町）
蒲生　一輝　南陽高等学校（長井市）
中川　燈　長井高等学校（白鷹町）
安久津結菜　長井工業高等学校（白鷹町）

小林　優太　置賜農業高等学校（川西町）
遠藤ゆかり　高畠高等学校（高畠町）
菊地　康紘　荒砥高等学校（白鷹町）
島貫　成美　小国高等学校（小国町）

本事業は、当初米沢市内の数校から推薦をいただいておりましたが、数年前から次第に推薦校が増え昨年度から置賜地区内の高等学校全校から推薦をいただいて表彰しています。

○文化広報部

文化広報部は通常の会誌編集とホームページの更新をしています。本部活動の主な事業に記録をまとめて会誌六十一号に編集します。本部のホームページについてはできるだけスムースに情報が伝わるよう米沢工業高校専攻科と連携して更新に努めています。リンクしている東京支部のホームページについては担当の今井さんに精力的に更新をしていただいております。おかげさまで郷土の情報がいち早く見られるので大変重宝しています。

今号で取り上げたトピックスや寄稿は大変興味深いものがあると思います。

特に、トルコ在住の美術史家ジラルデッリ青木美由紀さんから特別寄稿をいただいた「イスタンブルの三人の日本人　山田寅次郎　伊東忠太　大谷光瑞」展については明治三十七、三十八年当時の様子が手に取るようにわかるものです。

又、昨年発見された、昭和二十四年発行の米沢有為会会誌首号（復刊会誌一号は昭和二十七年）は戦後の混乱の時期の本部、各支部の様子がわかる資料として貴重なこともあり、複写版として載せましたのでお楽しみください。

最後に下條泰生前会長の知人で日本ジャーナリスト懇話会副会長の中名生正昭氏の寄稿は我妻榮先生の業績の中で、原子力災害被害を補償する「原子力損害の賠償に関する法律」の誕生（昭和三十六年）に尽力されたことが紹介されています。

今年三月十一日の東日本大震災を改めて直視し、被災者の安全で安心できる生活を保障されるよう願うものです。

有為会しおりが不足しているとの支部からの情報で、急拠現在のしおりを手直して二十三年・二十四年版として一、〇〇〇部発行しました。会員勧誘にご活用ください。新法人スタートに向けリニューアルの予定です。

○婦人部

当該年度における婦人部活動は、残念ながら目だったものはなかった。

本部としての婦人部は、有為会全体を俯瞰統括し、全体の会員が活動に参加できる計画と実施が望まれよう。しかし、地理的、時間的制約があり、組織にも個人にも無視できないほどの経済的負担が生ずるわけで、この矛盾にはずっと悩み続けてきた。畢竟、東京支部主体の活動になってしまったのは当面やむを得ないことであった。

平成十九年一月に、婦人部活動の一環として発足した「俳句会・漆の実」は、今般五周年を迎え、自選合同句集「漆の実撰集・第一輯」を上梓した。十名の作者が、各十八句ずつ出句した簡素な句集である。この冊子は、有為会各支部に送呈され、在米沢の各新聞社、東京の一部の俳壇出版社等にも呈上された。「句会・漆の実」の基本理念は、この同好会を通じて、有為会既会員の結束と、俳句に関心ある方の新規加入を目的とし、その新規加入の方々が有為会の崇高なる精神に共鳴し、また米沢地方ファンとなって頂ければ、いささかの会員増に尽力できると考えた。

なお、この会の主宰である鈴木淳一氏（会員）は、温厚なうちにも鋭い論評と、指導力に定評があるが、このたび長年の俳壇の所属結社を全て辞し、今後は「句会・漆の実」に俳句生命を注ぐ意向を示されており、これが、漆の実句会のレベルアップにつながれば、新規会員獲得にも貢献できると確信する。

（婦人部長　小山　泰）

○企画部

施設管理の近況

今回の大震災で東京・仙台興譲館寄宿舎はお陰様で、舎生も建物共に無事でした。

仙台興譲館は震度六にもびくともしない堅牢なつくりですし、東京興譲館は一二〇周年記念事業として、耐震補強を中心とした防災機能の充実や居住環境の向上を図りましたので、安全・安心な施設となっています。

ただ、東京興譲館は築四十五年を経た建物で、全てを新規に改修したわけではありませんので、予算の関係で先送りした部分も多く残っています。

とりあえず、平成二十二年度は屋上防水工事、二十三年度はトイレ汚水管取替え工事等を実行しましたが、今後は、仙台興譲館を含めて、長期修繕計画を立案し、現

在の有為会としての積み立ては十分か、舎生のニーズに合致しているのか等を総合的に、新しい組織で再構築していきたいと考えています。

○組織部

平成二十二年度組織強化（会員増強）の成果

平成二十一年度（創設百二十周年記念の年）まで、三次にわたる会員倍増運動を推進し、多くの新会員を迎えることが出来ました。

平成二十二年度は、特別な新会員勧誘活動としないで、日常の活動での取組みとして進めました。各支部、会員各位の取組みとご協力により、多数の新会員の入会がありました。

その成果は新入会員七十九名、退会会員は五十五名、二十四名の会員増です。年度末の個人会員数は千三百五名となりました（平成二十二年度新入会員勧誘の結果表のとおり）。

当会の事業運営の財政基盤は会員の会費です。新会員の勧誘活動は今後も継続されます。

今年度も、日常の活動の中で、地道に継続的に有為会あげて取組みを続ける事にしています。

会員増強運動の基本は、会員各位の交友をベースとしたマンツーマンの勧誘が最も効果的です。なお、互いに未納会員にならない気配りが大切です。

各支部、会員皆様のなお一層のご協力をお願い致します。

（前組織部長　開沼啓）

5月7日理事会（東京巣鴨 成光苑）

平成22年度 新入会員勧誘の結果表

平成23年３月末日現在　組織部集計

		第３次倍増運動終了時 平成22年３月	○平成22年度増加会員数 平成22年４月～23年３月末				備考
			入会	退会	差引	会員数	
東京支部	通常会員	339	29	26	3	342	
	特別会員	116	0	0	0	116	
	個人会員計	**455**	**29**	**26**	**3**	**458**	
	賛助会員	9	0	0	0	9	
	計	464	29	26	3	467	
米沢支部	通常会員	590	40	24	16	606	
	特別会員	73	0	2	△2	71	
	個人会員計	**663**	**40**	**26**	**14**	**677**	
	賛助会員	14	2	0	2	16	
	計	677	42	26	16	693	
仙台支部	通常会員	35	3	0	3	38	
	特別会員	50	3	2	1	51	
	個人会員計	**85**	**6**	**2**	**4**	**89**	
	賛助会員	5	0	0	0	5	
	計	90	6	2	4	94	
京都支部	通常会員	22	3	0	3	25	
	特別会員	8	0	0	0	8	
	個人会員計	**30**	**3**	**0**	**3**	**33**	
	賛助会員	0	0	0	0	0	
	計	30	3	0	3	33	
北海道支部	通常会員	19	0	1	△1	18	
	特別会員	4	1	0	1	5	
	個人会員計	**23**	**1**	**1**	**0**	**23**	
	賛助会員	0	0	0	0	0	
	計	23	1	1	0	23	
阪神・地方	通常会員	25	0	0	0	25	
	特別会員	0	0	0	0	0	
	個人会員計	**25**	**0**	**0**	**0**	**25**	
	賛助会員	0	0	0	0	0	
	計	25	0	0	0	25	
全体合計	通常会員	1,030	75	51	24	1,054	
	特別会員	251	4	4	0	251	
	個人会員計	**1,281**	**79**	**55**	**24**	**1,305**	
	賛助会員	28	2	0	2	30	
	計	**1,309**	**81**	**55**	**26**	**1,335**	

〔註〕○欄は各支部からの調査表による

本部主要委員会の活動報告

○公益法人移行認定申請準備

公益認定準備委員会は、新たな公益法人制度のもとで公益社団法人として活動するために必要な検討を行ってきました。会員制度、社員総会、理事会等の組織を中心に見直しを行い、また、公益認定基準に適合する事業内容の見直し（公益事業比率五〇％の確保）、事務、財務の総点検を行ってきました。その結果を公益社団法人制度に適合する新定款に取りまとめ、二十三年度第一回理事会を経て、今次総会に新しい定款の変更の案と総会議決の必要な規則、規程の新設を提案し、承認を頂きました。また、公益法人移行申請に必要な新定款による役員を役員選考委員会に依頼して選考していただき、その候補者を今時総会で議決いただきました。

今後は、この新定款に則した諸規定を整備し、財務内容を精査して申請書を作成し、公益認定を受けられるように手続きを進めていきます。

○役員選考委員会

一、平成二十二年十月二十四日（日）の理事会で役員選考規程が制定されました。この規程に基づき同日、委員が選任され、役員選考委員会が発足しました。委員は梅津幸保、大滝則忠、鈴木幸一、鈴木信之、情野文男、平山英三、米野宗禎（五十音順）の各氏で、その役割は、①総会に推薦する理事及び監事の候補者を選考し、理事会に提案すること、②理事の中から、会長及び副会長の候補者を選考し、理事会に推薦することの二つです。

二、役員選考委員は十一月八日（月）に第一回の会議を開き、互選で情野文男氏を委員長に選出するとともに、五回にわたる会議開催とメールによる意見交換等により、委ねられた業務の遂行と交渉等を行いました。途中経過は適宜理事会に報告しました。

三、このように役員選考について開かれた手続きがスタートしたことと役員選考規程全文を本部ホームページに掲載し、あわせて、支部会報及び支部総会や各種会合等の機会を通して伝えてもらって、周知を図りました。

四、広く人材を求めるために「候補者の推薦」を求めました。会長、理事、監事および相談役に推薦を依頼し、二五名の方から返信があり、延べ一〇〇名、重複を除

き三七名の方（うち女性三名）の推薦を受けました。

五、選考過程と結果はつぎの通りです。

（一）『理事及び監事候補者の選考』について

選考委員会としては、推薦のあった上記三七名の方を中心に検討を重ねました。これらの方以外の会員についての理事就任の可能性の検討、選考基準の明確化、一部の方についての意向確認、必要があれば説得等を行った結果、現行定款の規定による役員（理事三〇名、監事四名）と公益法人移行後の新定款に基づく役員（理事一五名、監事二名）を理事会に推薦しました。

理事会はこれを受けて協議し、本人から辞退の申し出のあった方を除く候補者を総会に提案しました。

（二）『理事候補者の中からの会長及び副会長の候補者選考』について

理事候補者の中から推薦のあった複数の方を慎重に考慮した結果、会長に須貝英雄氏を、副会長に安部三十郎氏（新制度移行まで）と平山英三氏を推薦しました。なお、平山委員は副会長候補者選考の対象となった段階から選考に参加していません。

（参考）選考委員会が考慮した選考基準

一　理事会に出席できる事

二　理事としての役割が分担できる事

三　会員の構成を代表するものである事（言い換えれば「男女の別、出身高校、出身地域、所属支部」等の観点から見てバランスに配慮したものである事）

四　人格・識見に優れている事

（役員選考委員会事務局記）

5月20日評議員会（東京興譲館）

○新会長、副会長の選出

第一二三回総会後最初の理事会が平成二十三年六月三十日(木)東京文化会館(上野)において開催され、会長に須貝英雄理事、副会長に安部三十郎理事及び平山英三理事を推薦する役員選考委員会の提案がありました。推薦を受けた理事が退席の上審議した結果、賛成多数により役員選考委員会の原案通り会長、副会長を決定しました。

また、新定款附則第二項に記載する公益法人移行時の代表理事二名は会長須貝英雄理事及び副会長平山英三理事がなることを確認しました。

○下條泰生前会長の名誉会員就任

平成二十三年八月二十六日の第三回理事会に於いて、下條前会長が名誉会員に推薦され、協議の結果、名誉会員になっていただくことが決まりました。その際、名誉会員就任の基準を明らかにすべきだとの意見が出、今後、具体化していくこととなりました。

『私の志』——二十三年度奨学生の作文

増田高範

昨今の情報機器、特にパソコンについて私は改善したいと思う点があります。それはそれらの機器が初心者にとって使いづらい物であるという事です。パソコンとインターネットの普及によって上手にそれらを使えば容易に情報を手に入れられるようになりました。しかしそれらの機器を上手に使いこなせない人との間で情報の隔差が生じてしまいました。技術というものは一部の人達の物であってはいけません。私はそのような隔差を解消したいと思います。それは今現在行われているようなタッチパネル化などの手段ではなく、機器を使用する際の苦手意識を取り払う、果てはその類の機器を使用していると使用者に感じさせない様なモノを作りたいと思っています。そうする事によって皆に平等に科学技術の恩恵が行き渡り、便利で快適な生活の一助になると信じているからです。

高橋朋也

私は中学の頃から英語が好きになり、高校でも英語を中心とした学習に取り組み、第一希望の東北学院大学の文学部・英文学科に合格することができました。高校では英検に挑戦して二級を取得することができました。大学ではさらに上を目指して、今まで挑戦したことがないＴＯＥＩＣなどにも積極的に取り組んで視野を広げ、生の英語に触れる為にもぜひ留学をしてみたいと思っています。

今、英語力が求められる会社も増えて、英語の必要性はとても高くなっていると思います。英語だけではなく、これからは日本と密接に関係している中国語の勉強もしたいと思っています。四年間の学生生活で英語力をしっかりと身に付けて、卒業したら米沢に戻り、それを十分にいかすことが出来る仕事に就きたいと思います。

松嵜祐樹

私は将来、起業したいと考えています。どの分野でいつ起業するのかなど、具体的なことはまだ決まっておらず漠然としていますが、大学で経営工学を学ぶことで明確にしていきたいと思います。

私は人をまとめることが好きなので、人の下ではなく上に立って仕事をしたいと考えています。だからこそ、リスクが大きい起業中でもベンチャービジネスに挑戦したいのです。これに成功すれば、大きな達成感を得ることができ、また仮に失敗したとしてもそこに至るまでの過程は、私の人生をより充実したものにしてくれると思っています。

またこの際、米沢興譲館高校での三年間で学んだ興譲の精神を、常に心に留めておきたいです。私利私欲の追求ではなく、社会全体に広く目を向け、驕りて力を恃むことなく、世のため人のため、特に今回の大地震で大変な災害を被った地元東北のために、己の誠を尽くせる人間になりたいと思います。

鷹森翔太

私が看護師を志したきっかけは二つあります。

一つ目は、今は亡き祖母が病気で入院していたときに、祖母の病気の回復のために身体面と精神面の両面からサポートし、常に患者の目線に立って接する看護師の姿に感銘を受けたからです。

二つ目は、自分自身が入院し手術を受けることになったときに、まだ幼く手術を受けることが恐かった自分を励まし、勇気づけて下さった看護師の方々に強い憧れを抱いたからです。

また、今現在日本では看護師の人数が不足しています。特に男性の看護師は少なく、力仕事の多い看護の現場では必要とされてきています。だから自分は大学で看護学をしっかりと学び、この目で見てきた看護師の方々のように、患者を身体、精神の両面からサポートし、患者から頼りにされ、信用されるような立派な看護師を目指したいと思います。

遠藤泰治

私は日本のチェンジリーダーになりたい。日本をより魅力的な国にして行きたい。私の強みである「危機でも諦めない気力」をこのような形で社会に提供したい。

この強みに目覚めたのは高校の部活動（吹奏楽）での経験だった。同期の部のまとめ役が高校三年の大会直前になってその役目を放棄してしまったのだ。

結果、部は一時バラバラの状態になってしまった。しかし私は諦めたくなかった。最後の大会で完全燃焼したかった。中途半端な取り組みでは嫌だった。

私は役職を押しのけ前に立ち、学生指揮者として、夢を語りながら部を引っ張った。

最後の結果こそ思うように行かなかったが、大会へ向けた部の一体感には得もいえぬ気持ち良さがあった。そして途中中々の結果も出すことが出来た。

これから大学院生活を経て世に出るにあたり、この経験から得た強みをより一層磨き、今の混迷の日本社会の中でもチェンジリーダーを目指して行きたい。

平成23年４月現在

置賜地区等高等学校卒業生の寄宿舎、奨学制度利用者10年間推移表

（総務部調べ）

	H14年			H15年			H16年			H17年			H18年			H19年			H20年			H21年			H22年			H23年			合計(名)		
	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費	東京興譲館	仙台興譲館	奨学金貸費
米沢興譲館高校	5	3	1	4	1	2	3	3	5	5	1	3	4	2	3	1	1	4	2	2	1	3	3	3	2	1	3	2		3	31	17	28
米沢東高校	2		1			2	1					1	1											1	1				1		5	1	5
米沢工業高校											1							1													0	1	1
米沢商業高校			1												1							1									1	0	2
九里学園高校											1											1		1							1	1	1
米沢中央高校							2	1	1				1			1	2		1					1		1					5	4	2
長井高校		2								1			1				1		1	1	1	3	1	2							6	5	3
長井工業高校							1								1												1				1	0	2
荒砥高校																															0	0	0
南陽高校		3	1		2			1								1												1			2	6	1
高畠高校																												1		1	1	0	1
小国高校																															0	0	0
置賜農業高校	1																														1	0	0
山形東	1									1		1	1							1				1							3	1	2
山形中央										1																					1	0	0
日大山形																			1	1											1	1	0
山形工業																					1										0	0	1
その他							1									1						1			2					1	5	0	1
計（名）	9	8	4	4	3	4	8	5	6	8	3	5	8	2	5	4	4	5	5	5	3	9	4	9	5	2	4	4	1	5	64	37	50

米沢有為会『文化大学』の開催

米沢有為会では昨年度、『文化大学』をスタートさせた。担当は東京支部長米野宗禎で年に二、三回を予定している。第一回は副会長で米沢市長の安部三十郎氏の講演でした。第一回文化大学の案内文から趣旨と概要を拾ってみます。

〈案内文〉

今、世界はもとより日本はグローバル社会の中にあって、各分野で新たな価値を創造し〝チャレンジ〟が求められています。

こうした状況の中にあって、米沢有為会のさらなる発展と継続を図ることを願い、恒常的に『文化講演会』を「米沢有為会　文化大学」（下條泰生学長）の名称で位置づけ、また広く公開し郷土出身者の学生たちが四年間、常時居住する地域社会（調布市）住民（市民）とのコミュニケーションづくりと東京興譲館の地域貢献を図り、同時に大災害の時に備え、寮生の安心と安全確保の視点からも交流を図るものです。（後略）

〈第一回講演概要〉

演題―若人に期待すること、そして私の役割

講師―副会長　安部三十郎米沢市長

『文化大学』第一回講座が、十一月二十八日、東京興譲館で開催され、地元入間町一丁目自治会の方々も含め、学生、会員等約五十人が聴講した。下條学長から「学生の志を高める場とするとともに、地元の方々とのつながりを深め、さらには日本発展に寄与したい。」との開講の辞、地元の調布市生活文化スポーツ部塚越部長の「若い力を地域の活力アップに期待したい」との来賓挨拶に引き続き安部三十郎米沢市長より最初の講義が行われた。

冒頭「本日は奇しくも、上杉景勝公が会津より綱木峠を越え米沢に入城された日です。」という市長ならではのイントロに始まり、自作の紙芝居を駆使し熱のこもった話が続いた。

伊達政宗から始まり、さらに上杉時代を通じての、先人の努力奮闘から、米沢

の精神的風土を説かれ、明治になってからの米沢高等工業高校での人造絹糸開発の逸話など、米沢の先進性も強調されるとともに、米沢からノーベル賞受賞者を輩出する夢を掲げるなど学生達にも感銘を与えた。

さらに、有機ＥＬ産業の中心となる展望、周囲の山々や田圃を生かし多くの観光客に来て頂く計画、四角のビルではない美しい新図書館を建て市民の文化活動を高揚する構想など、よりよい米沢を発展させ次世代に引き継いでいくという市長としてのビジョンを熱く語られたのも、聴衆の胸に響いた。

安部市長は、東京興譲館のＯＢでもあり、学生時代の思い出の中で、地元の方々との餅つき大会や芋煮会などで交流があったことに触れ、今後とも寮生と地元の方々との絆が深まることに期待を示した。

地元自治会の高橋兼松会長からは「かつてのように交流ができ、災害時などの助け合いにつながれば」との期待が寄せられた。

講義終了後、参加者全員が参加し懇親会が催された。市長持参の米沢の地酒や寮母さんお手製の料理も振舞われ、和やかな中に学生達と地元自治会の方々の絆を深める機会ともなった。

〈第二回講演概要〉

演題　―はやぶさに学べ！がんばれ日本！

講師　―上杉邦憲名誉会長

米沢有為会第二回文化大学が平成二十三年七月十七日、東京興譲館において開催されました。

今回は「はやぶさに学べ！がんばれ日本！」の演題で上杉名誉会長に講演をお願いしました。

午後二時三十分開演、暑い盛りにも拘わらず、当会会員、舎生のほかにも、上杉のお殿様にお会いできると情報が広まり、地元入間町の方々が多数来られて、用意した椅子が足りないほどの盛況でした。また、調布市からは花角美智子スポーツ文化部長が出席されましたが、偶然にも、米沢のご出身、出席していた会員と同学年、何十年ぶりの旧交を温める場面もありました。

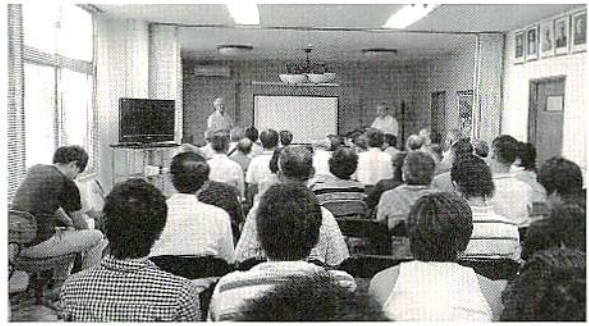
定刻、文化大学世話人、米野東京支部長が司会を務め、高橋兼松入間町一丁目自治会長、須貝英雄新会長からご挨拶を頂きました。

司会者から、「はやぶさ」の小惑星探査計画の仕掛け人は、上杉先生であったとの紹介に続き、講演に移りました。

講演は、プロジェクターを使い、写真、図形などを多用して、素人には難しい内容を分かり易くするご工夫が

あって、ご出席に皆様方は最後まで興味深く聞いておられました。

昨年の第六十号「会誌」に名誉会長が「おおすみからはやぶさまで」という特別寄稿が掲載されましたが、講義に先立ち読み返し、直接お話しをお聞きすると、はやぶさ成功までの名誉会長、関係者の様々なご苦労が良く分かりました。



一九六九年末、アポロ飛行士が月面に降り立った頃、わが国は一九五五年三月、糸川教授の「ペンシルロケット」の実験以来十数年経過していましたが、当時の日本宇宙工学は人工衛星打ち上げの失敗が続き、ようやく翌年の一九七〇年二月、二十四kgの「おおすみ」が五回目にして打ち上げが成功したというレベルでした。

ちょうどその頃、ドクターコース終了間もない名誉会長が宇宙工学をご自分の生涯の職場と決められたと思いますが、その時には彼我の力の差をどのように感じておられたでしょうか。

奉職後二十年、名誉会長は研究員メンバーの中堅を荷っておられた頃、八十年後半には「さきがけ」「すいせい」がハレー彗星の探査、七〇年には「ひてん」による月周回とハードランディングに成功し、わが国は徐々に宇宙探査の実力を蓄え、アメリカに急接近してゆきます。アメリカ、ディスカバリー計画への参加打診は日本研究者達の自信であり、アメリカにとっては対等の競争相手が出来たことになりました。

一九九六年四月、MUSES－C計画（小惑星サンプルリターン計画）が開始。

名誉会長は研究員というより、予算獲得の準備に奔走する時間がこれほど増えた時期はなかったのではないでしょうか。計画はアメリカも未だ手がけたことの無い小惑星からのサンプルリターン、実行には多くの予断できない、未解決問題があっても審査の場では「可能」と言うしかない、その時の心境が「成せば成る…」だったのですね。

二〇〇三年五月九日、「はやぶさ」打ち上げ。

計画実行のための準備の七年間、数々の予想を超えた難問が発生し、後で考えると「奇跡」としか言いようのない「解決策」が現れて、いまこの発射の現場で、将に万感胸に迫る一時を迎えられたのではなかったでしょうか。

二〇〇六年三月　ご退職

二〇一〇年六月十三日　オーストラリア　ウーメラ砂漠で「はやぶさ」のカプセル回収立会

帰って来たもの、迎えるもの、相方、涙の帰還、分かります。

それにしても、「はやぶさ」は地球帰還まで、関係者はもとより、日本国民を心配させましたね、イトカワ着陸後の行方不明事件と搭載エンジン全ての機能不全の時は、計画失敗も覚悟されたのではないでしょうか。精進する人間に与えられる「奇跡」なのか？いずれにしろ解決に当られたチームの方々の努力と叡智に敬意を表します。

MUSES－C計画立案は日本の宇宙工学にとって、宇宙航法・遠隔操作、ロケットはもとよりイオンエンジン・着陸機等、多数のソフト・ハード両方の関係者の方々の創意を実現させ、そしてそれは次代に引き継ぐべき技術を、自らのものにするという機会を与えることを意図した、計画だったのでしょうか。適切な目標はその計画の成功と同じくらい大事なことだと思いました。

息の長いプロジェクトはその成果を自分の目で確かめられないことが多々あるものですが、創成期の日本の宇宙工学に身を投じ、アメリカとほぼ対等になった「すがた」を確かめられた名誉会長の幸運をお慶びしました。

「はやぶさ」の命名は「狙った獲物をとる姿」又は糸川教授が設計に関係した戦闘機「隼」に依るものだとは聞いておりますが、鷹山公の「鷹」と何か繋がっているのではないか、という想いがあるのです。私の深読みか、今回は疑問が晴れぬままとなりました。

最後に、米沢有為会文化大学学長下條前会長から講師へのお礼のことばがあり、午前中、杉並で上演された米沢市役所主催市民ミュージカル「フェイス」に付言され、「決してあきらめない」という精神が結果をもたらすことを強調された。奇しくも、昨夜、「なでしこジャパン」が最後のロスタイムで同点とし、PK戦を制して女子W杯サッカーで優勝しましたが、監督・選手の気持ちが「ネバー ギブアップ」と報じられました。米沢ではそれを「成せば成る…」と言い習わして来ました。

本当に「演題」の通りの「はやぶさに学べ！がんばれ日本！」「成せば成る…」の一日でした。

支部だより

東京支部

東京支部の、平成二十二年度の活動を、実行日順に報告致します。

二十二年四月五日　監事による平成二十一年度監査　東京興譲館
会計収支計算書等、適法・正確を監事承認

二十二年五月九日　第一回理事会　東京興譲館
平成二十一年度事業・決算報告、平成二十二年度事業計画・予算承認
平成二十二年度定期総会議題、役員・評議員改選の候補者案の審議・承認

二十二年五月二十三日　平成二十二年度評議員会及び定期総会　スクワール麹町
総会議案の審議・承認
総会後に恒例の新寄宿舎生(五名)と新奨学生(五名)の歓迎会開催

二十二年六月二十二日　第二回理事会　東京興譲館
米野宗禎支部長、鈴木信之・沼澤研一両副支部長の選任
「執行部門の組織・人事(案)」の決定
園遊会準備委員会の設置及び委員長は菅野憲幸理事に決定

二十二年九月十八日　第三回理事会　東京興譲館
情野前支部長、鈴木・石原前副支部長の相談役推薦を決定
本部からの要請を受け、「米沢有為会文化大学構想」の実現を支部として協力することを決定

二十二年十月三十一日　平成二十二年度園遊会　小石川遊楽園　涵徳亭

二十二年十二月四日　第四回理事会　東京興譲館
平成二十三年新年会兼予餞会の計画
平成二十二年度園遊会収支報告

二十三年一月二十九日　新年会及び卒業学生の予餞会　スクワール麹町
会員の皆様と新年を寿ぎ、卒業の寄宿舎生(五名)と奨学生(四名)へ、上杉邦憲名誉会長、下條会長と大関寄宿舎OB会長から餞を頂いた。

平成二十三年度　東京支部の課題

① 支部会員加入促進活動（二十三年四月～）

会員の高齢化による退会が増えている。若い方の入会を勧める。

② 恒例行事の実行委員にも新しい方に参加してもらい世代断層を防止する。

③ 「公益社団法人米沢有為会」に成った場合の変わる事、変わらない事を明確に会員に伝える。

東京支部会員数（平成二十三年三月末現在）

個人会員　四五八名

（通常会員　三四二名・特別会員　一一六名）

賛助会員　七社（関係協力企業　二社）

訃報会員　ご生前のご協力に感謝申し上げて、ご冥福をお祈り致します。

（　）内は、命月と出身地

片桐邦夫様（二十二年一月）

鑪信政様（二十二年九月　米沢市）

中川政彦様（二十二年九月）

淀勇夫様（二十二年十二月　川西町吉島）

波多野亨様（二十三年六月）

〈予餞会〉

出席者は寮生を含め八七名の盛大な会となりました。催事担当菅野理事の司会で進められ、米野支部長の挨拶の後、上杉邦憲名誉会長よりご祝辞を頂きました。

上杉様は今年の皇居で行われた新春歌会始において名誉ある『読師』を拝命されその時のご様子、その後の関係者慰労会で天皇、皇后両陛下からお褒めのお言葉があったことと、皇后陛下が、米沢の「草木染め」を知っておられてお話しが弾んだことなどをご披露頂きました。

東京興譲館沼澤研一館長から今年卒業する六名の学生の紹介がありました。

舎生OB会会長の大関修敬様から卒業生に対し激励の言葉を頂き、米野支部長から卒業生へ記念品を贈呈し、卒業舎生代表の船山智徳君から謝辞が述べられました。

非常に賑やかな会となりました。（中川紘一　記）

米沢支部

平成二十三年度の現在までの米沢支部活動状況を報告します。

○**四月十一日**　総会にむけて副支部長と各部長で構成する支部運営会議を開催し、支部の運営に関する協議を行った。

○**四月二十六日**　教育・産業功労者等検討会議　併せて賞状文原案作成の分担依頼をした。

○**五月十日**　米沢支部監査

○**五月十七日**　支部総会案内状の校正作業

【第一回理事会】

○**五月十七日**　午後二時から米沢市役所庁議室において開催した。

内容は、平成二十二年度米沢支部事業報告及び決算報告を承認し、平成二十三年度事業計画及び予算案を決定した。又、この理事会において教育産業功労賞表彰の検討結果を報告し了承を得た。本部表彰該当者については会長に報告し、決定を受けることになる。

今年度は役員改選の時期にあたり理事二十六名、評議員二十五名、監事三名の各候補が原案通り議決された。

○五月十九日　支部総会案内状発送作業

○六月二日　総務部・組織部合同会議を開催し、支部総会・本部総会の分担と打合せ

○六月十日　本部総会の案内状発送作業

【総　会】

○六月十一日(土)

午後三時　ホテルサンルート米沢

安部三十郎支部長挨拶の後、議事に入る。二十二年度支部庶務報告及び決算が承認され、二十三年度事業計画案及び予算案が審議され、原案通り議決した。

庶務報告の中で、支部会員数の状況が説明された。

役員の改選については理事二十六名の内、手塚宮雄、野本弘の両氏が新任、評議員二十五名の内、中條淳子、本間精、石田和弘の三氏が新任され、監事は三名の内、舟山豊弘が新任された。

続いて支部の表彰式に移り次の皆さんが受賞した。

〈教育功労賞〉

○米沢市立第三中学校国語科

米沢第三中学校に勤務する国語科の教員であり、生徒の作文、読書感想文やエッセイ等の指導にあたり、全国入賞三点を始め、すぐれた成果を上げている。特に、平成二十二年度は我妻榮児童文化賞及び市児童文化奨励賞を計三名が受賞するにいたった。日常の授業の指導を始め、本市の国語力の向上に大きく寄与し、県内外に大きく発信した功績は大なるものである。

〈産業功労賞〉今年度支部表彰はなし

〈特別顕彰〉

○高橋治輝（米沢市立松川小六年）

平成二十二年度山形県小学生陸上競技大会男子走り幅跳びに優勝し全国大会にも出場

○町田佑介（米沢市立西部小四年）

平成二十二年度山形県選抜学童水泳記録会四年以下50M平泳ぎに優勝

○熊谷哲志（米沢市立西部小六年）

平成二十二年度米沢市小学生水泳記録会オープン男子50Mバタフライに大会新記録で優勝し、山形県選抜学

童水泳記録会五・六年50Mバタフライに優勝

○**米沢市立西部小学校リレーチーム**
平成二十二年度山形県選抜学童水泳記録会男子２００Ｍリレーに優勝

○**鈴木大河**（米沢市立第一中学校三年）
第四十七回東北中学校スキー競技大会回転競技第二位、第四十八回全国中学校スキー大会回転競技六位入賞

○**安部由貴・安部優衣子**（米沢市立第二中学校三年）
平成二十二年度東北中学校バドミントン競技大会女子ダブルス第三位

○**梅津春香**（米沢市立第二中学校一年）
第三十一回東北中学校陸上競技大会一年女子１５００Ｍ第二位

○**田村美佐保**（米沢市立第三中学校二年）
第二十七回伝統的工芸品月間作文コンクール全国賞㈶伝統的工芸品産業振興協会会長賞受賞

○**神尾英花**（米沢市立第三中学校一年）
平成二十二年度小さな親切作文コンクール全国審査優秀賞受賞

○**田中　瑛**（米沢市立第三中学校三年）
国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト二〇一一審査員特別賞受賞

○**情野匡紀**（米沢市立第三中学校二年）
第四十七回東北中学校スキー競技大会スペシャルジャンプ四位　同ノルディックコンバインド四位
第四十八回全国中学校スキー競技大会ノルディックコンバインド九位　同スペシャルジャンプ十五位

○**長沼大智**（米沢市立第四中学校二年）
第三十一回東北中学校陸上競技大会男子二・三年１５００Ｍ優勝　第四十一回ジュニアオリンピック陸上競技大会少年男子１５００Ｍ第三位

○**中澤歩里**（米沢市立第五中学校三年）
山形県総合スキー大会スラローム優勝　第四十七回東北中学校スキー競技大会スラローム第三位　第四十八回全国中学校スキー競技大会スラローム第十六位

○**近田隼人**（米沢市立第五中学校三年）
第四十七回東北中学校スキー競技大会ノルディックコンバインド第五位　第四十八回全国中学校スキー競技大会ノルディックコンバインド第十二位

○**高橋弘武**（南陽高校三年）
第二十九回全国高等学校ライフル射撃競技選抜大会Ａ

ＲＳ６０ＪＭ第六位

○**青木涼平**（南陽高校三年）

第二十九回全国高等学校ライフル射撃競技選抜大会Ｂ

ＲＳ６０ＪＭ第八位

○**高橋玲那**（南陽高校三年）

第二十九回全国高等学校ライフル射撃競技選抜大会Ｂ

ＲＳ４０ＪＭ第八位　千葉国体出場

○**南陽高校男子ソフトボール部**

第三十六回東北高等学校男子ソフトボール選手権大会

優勝　第五回東北高等学校男子ソフトボール選抜大会

第三位　第三十六回東北総合体育大会ソフトボール少

年男子準優勝

以上それぞれ表彰した後、安部三十郎支部長のあいさつ、受賞者のあいさつと続き全員で記念撮影をして表彰式を終了した。

［懇親会］

受賞者を交えて懇親会に移り、本会の理事、評議員、監事、教育委員、一般会員で和やかな懇親会となった。

○**六月二十四日**　下條会長・須貝副会長・平山総務部長

市内マスコミ挨拶まわり同行。

○六月二十五日　有為会本部総会　ホテルサンルート米沢

○七月十二日　支部運営会議　秋の会員研修交流会や支部だよりについて協議。

○七月二十日　教育部会開催　今年度新規会員の勧誘について協議。

○七月二十一日　米沢有為会所有の山林視察　本多副支部長・加藤組織部長そして鈴木常務理事の三名で大江町現地を視察後、西川町の西村山地方森林組合を訪問した。

○七月二十三日　支部だより編集会議

○八月六日　支部だより発送作業

今後の行事予定

○九月中旬　総務部・組織部合同会議開催。役員会、交流研修会の運営について協議予定

○十月一日　午後三時　ホテルサンルート米沢

・米沢支部理事評議員合同会議

今年度の事業内容や各部の構成などを改めて説明。又、理事・評議員の改選により選任された新任者の紹介予定。

新理事　手塚宮雄氏・野本　弘氏

新評議員　中條淳子氏・本間　精氏・石田和弘氏

新監事　舟山豊弘氏

・支部研修会（講演会）　午後三時三十分

講師に岩手県中核観光コーディネーター・三陸鉄道総合企画室長の草野　悟氏を招いて、今回の東日本大震災における三陸地方の被害と復興支援の状況を講演していただく予定。

・会員交流会　午後四時三十分

（常務理事　鈴木幸一　記）

仙台支部

本誌の仙台支部だよりは、一昨年、昨年と私が担当しましたが、殆ど同じ内容で、昨年原稿を送ったときには、また来年も同じようなことを書くことになるだろうとマンネリに飽いた気分でおりました。しかし、三月十一日の大震災を経た今では、来年はまた平凡な報告ができることを願っています。

春も間近の三月十一日に発生したM九の大地震は、東北の沿岸部に未曾有の津波被害を与え、加えて原発事故まで引き起こしました。私自身直接の被害はなかったものの、友人、知人の中には、家族や親戚が津波に被災した方がいて、中には死者も出ていることが次第に分かってきました。被害の大きさを実感しています。多くの会員の方も同様ではないでしょうか。

震災後の支部会員の状況：大震災発生後一週間ほどして、電話が使えるようになって仙台興譲館館長の御供さんと連絡がとれ、寮生も寮の建物も無事だったこと、三名ほどが寮に残っているだけで、大半は米沢からの迎えの車等ですみやかに帰省したこと、寮母の小野寺さんは一関の自宅で被災したが無事だったことなど、寮に関する状況がわかり、ひとまず安心しました。

宮城、岩手、福島の三県に居住するおよそ六十名の支部会員の安否が気になっていましたが、震災後の混乱で調べる余力がなく、電話で安否と被害の様子を尋ねたのは本震発生以来ほぼ一月後、四月七日の大きな余震の後になりました。約九割の方と連絡がとれ、皆さんが無事だったことがわかって安堵しました。津波被害のあった多賀城、亘理、相馬などに住んでいる会員も無事でした。皆さんは、まずは命に別状のなかったことを喜び、被害については控えめに話しておられる感じがしました。家屋の倒壊、津波による流失がなかったのは不幸中の幸いでしたが、あれだけの大地震が、しかも二度ありましたから、屋根瓦が落ちたり、土台が損傷したり、壁に亀裂が入ったりしたお宅が数軒出ていることがわかりました。なお、この時点ではわかりませんでしたが、その後賛助会員の建装工業の社員に津波に被災された方がいることがわかりました。

私の電話での聞き取りでは、おおまかな被害状況が分かっただけでしたが、その後建築のプロである支部事務局の御供さんが詳しい被害調査を行なってくれました。

調査対象の約六十名のおよそ半数からの回答があり、大規模半壊一名、半壊が十名強、残り大半が家屋の一部損壊と家財への被害で、全く被害のなかった方は少数でした。私が四月に電話で調べた時よりも被害は拡大していますが、これは私の聞き取り以降に市や保険会社の調査を受けたお宅が多かったためと思われます。被害額も大きく、わかっているだけでも修理に数百万の費用がかかっている方が数名おられます。保険に加入しておられなかった方には、行政からの支援が行き届くことを願います。

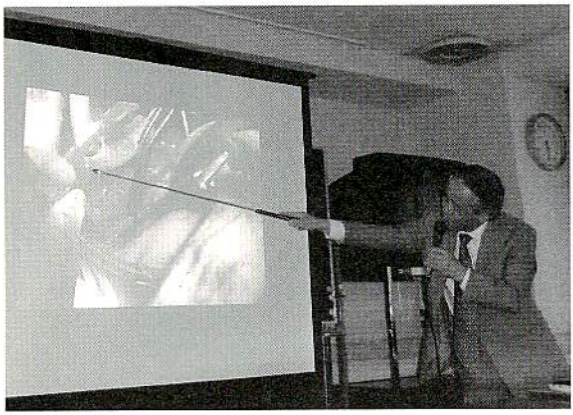
支部の活動：今春の仙台寮の入寮選考は、大震災により例年の一月遅れで四月十六日に行なわれ、二名の入寮を決定しました。五月の連休明けに新学期が始まり、十四日には新入生歓迎会が寮生会主催で開催され、会員九名が加わって寮生との交歓を行ないました。

六月十一日の仙台ビジネスホテルに於ける支部総会には、多くの支部会員に出席して元気な姿を見せて頂きたかったのですが、いつも出席されている何人かの方々が震災対応の仕事で忙しくて欠席され、例年より若干少なめの二十名強の参加となりました。今年は役員改選の年でしたが、支部長はじめ役員に大きな変更はありませ

仙台支部総会懇親会

ん。ただ、興譲館寮の副館長を一名増やして二名とし、新副館長に長澤健一氏を選びました。この増員は、緊急時における寮生のケアを考慮したもので、この度の大震災時に、寮に泊まり込んで寮生を安心させてくれた長澤氏にこの役をお願いしたものです。

総会に続いて支部講演会に入りました。この講演会は昨年から始めたもので、講師は支部会員の田林晄一先生（飯豊町出身、東北厚生年金病院院長、日本胸部外科学会理事長、東北大学名誉教授）で、「心不全の治療－薬物的治療から移植医療まで」と題して講演いただきました。心不全の原因、薬物治療、人工心臓の話等、最先端の医療の話はどれも興味深いものでしたが、圧巻は東北大学における最初の心臓移植手術のビデオでした。流れるように進む移植作業に聴衆は引き込まれ、一時間の講演は強烈なインパクトを与えて終了しました。



2011年6月11日　支部講演会

講演会の後は懇親会に移り、震災以来たまったストレスを大いに発散して今年度の支部最大のイベントは終了しました。支部の残るもう一つの親睦行事である芋煮会は十月八日に予定されています。昨年は生憎雨がぱらつき、例年会場としている寮近くの広瀬河原ではなく寮の食堂で行ないましたが、今年は多くの参加者を得て秋晴れの広瀬河原で開催したいものと思っています。

最後になりますが、このたびの大震災に際しましては、被災地に居住する仙台支部所属の会員に対し、有為会からは今年度会費の免除措置と下條会長より丁重な見舞い状とをいただきました。厚くお礼申し上げます。

（仙台支部長　甲　國信　記）

京都支部

■平成二十三年度京都支部総会および懇親会

有為会京都支部総会は六月十二日　烏丸通りを挟んだ京都御所の西側　京都平安ホテルで開催いたました。出席者は十七名。

相談役の元支部長の新野昌生氏は、九十余歳で今年から出席を断念するとのこと。前支部長の小野島亀一氏もやはり高齢を理由に退会したいとのことでした。

★総会は　両公遥拝　誓紙奏上　菅野支部長の挨拶と報告があり、四人の新会員の紹介がありました。

川井　亮一氏　（米沢工業高校出身）
長沢　　智氏　（米沢商業高校出身）
佐藤　勝彦氏　（米沢工業高校出身）
伊藤　　薫氏　（興譲館高校出身）

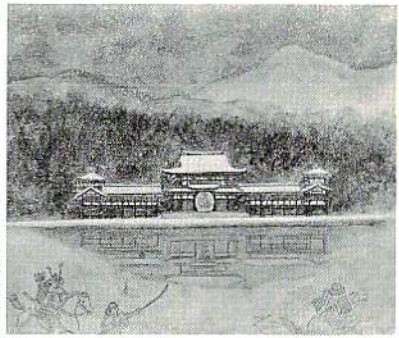
新会員になられた方の有為会へのご理解と支部あげての会員増への努力の成果であり、最大の朗報です。

★来賓の京都山形県人会々長の松本顕龍氏から「自然と人間のかかわり　京都人の美意識や宗教」について多くの示唆に富んだ講演があり深い感銘を受けました。

★また、会場には鎮魂とガンバレ東北を祈念した奥州（平泉）藤原氏の栄華を偲ぶ「北の祈り〝雪の無量光院〟」の絵や「やすらぎ」の写真が展示されました。

★鷹山公と黒井忠寄が今まで越後に流れていた飯豊山の水を山頂近くに穴堰を掘り、多くの困難にもめげず完工し、米沢地方を潤した事績の説明があり「なせば成る何事も…」との意を強くしました。

★東北地方の被災者には黙祷を捧げ、集まった募金は京都新聞社に寄託します。



▲平泉〝北の祈り〟

◀やすらぎ

★懇親の宴は平安ホテル自慢の京菜の膳に舌鼓を打ちました。余興には定番のカラオケがあり、マイクを話し難いひともおり、盛況でした。

■活性化運動（魅力ある会へ笛太鼓を鳴らしても人踊らずの現実をいかにして改善するかが問題）

もっと多くの会員が参加し「オモシロカッタ」とそれなりの満足が得られるものでなければ活性化に繋がりません。

★今年はカラオケなど全員が楽しめるものを催し、伝統の講話も行い、好評を得ました。

★お花見やお茶のみ感覚の小イベントは未実施です。

★県人会の芋煮会・パーテイなど他団体の行事「きずな号外」および「電話」で積極的に参加をうながし、成果を上げました（これらが新人の会員増につながった…？カモ）。

■京都支部便り「きずな」発刊

高齢のため総会参加や会誌読破もままならず、「きずな」も細くなりがちな支部会員に、本部および支部の施策説明や行事参加要請など、最新の情報を「簡明かつ迅速に提供するため、米澤有為会 京都支部だより〝きずな〟および〝きずな号外〟」を発刊しました。

まったくの手作りで拙ない紙面ですが、皆様のご教導ならびに会員の寄稿などにより、充実化をはかりますのでよろしくお願い申し上げます。

（高橋雅雄　主記）

◀京都支部総会

北海道支部

三月十一日の東北大震災から半年余り過ぎたというのに、復興への足取りは遅々としています。被災された仙台支部の会員の皆様に、心からお見舞い申し上げますとともに、一日も早く地域の日常が回復されるようお祈りします。また、震災や原発事故による避難者の受け入れ、支援等に力を尽くされている故郷の皆様に敬意を表します。

この一年間、北海道支部はいつものような活動を行いました。昨年九月の最終日曜日に例年のように、芋煮会を札幌市北部の体験農場などがある「サッポロさとらんど」の炊事広場で催しました。この芋煮会は米沢工業高校ＯＢの鶴城工親会北海道支部が長く開催していて、その後、有為会支部を加えてもらって共催し、米沢・置賜出身者が集う場になっています。

里芋二十キロや牛肉はもちろん故郷からの直送。広場にシートを敷き、煮込み用の大鍋四つを設営し、芋むきなど食材の下ごしらえも手早く進めて、煮込みに取りかかります。並べたテーブルの上には、米沢の地酒、ナス漬けなどが載って食欲をそそります。

突然の雨で傘を差しながら談笑した芋煮会

ところが、いざ開宴というころ、心配していた雨がポツリポツリと降り出してきました。雨脚は次第に強まって、参加者は傘を差したり、ヤッケを着、帽子をかぶったりしながら芋煮をいただきました。この広場に会場を移して七年になりますが、これまでは毎年、晴天に恵まれていたので珍しい体験でした。シートの上に雨が広がって、足元から腰まで濡れてしまう状態でしたが、間もなく日差しが戻り、故郷のご馳走を腹いっぱい食べ、仲間と語り合って過ごしました。今年は九月二十五日の開催です。

一方、支部総会は昨年十一月二十三日、札幌の入浴施設で開催しました。温泉につかってゆったりしてから総会・懇親会に移り、楽しく談笑するのが恒例となっています。参加費は実費負担ですが、この親睦交流が支部活性化に欠かせないことから、支部から若干の補助をして開催してきました。しかし、現在でも支部会計は余裕ゼロの運営。公益社団法人化に伴う財政見直しで会費の二分の一支部配分がなくなれば、事務連絡もままならなくなる恐れがあり、今年から安価な会場への変更などを検討せざるを得ない状態です。

（支部長　安部　英夫　記）

酒をくみながら交流した支部総会

興譲館寮だより

東京興譲館

菊地邦貴

秋まだ遠く、厳しい残暑が続いています。この酷暑の中体調に気をつけ、万全の状態で秋の訪れを待ちたいものです。今年の三月、東日本大震災により日本は多大な被害を受けました。震源地からだいぶ遠い東京興譲館も大きく揺れましたが、去年の耐震工事のおかげで大きな被害もなく、耐震工事のありがたさを深く感じるとともに自然災害の恐ろしさを再確認させる出来事でした。そんななか六名が退寮し、四名の新入舎生が入寮しました。震災の影響で落ち込む空気を変え、例年以上に新しい仲間とともに前進するという一体感を固めました。総勢二十名と人数は少ないものの、満室の時のような明るく楽しい雰囲気となっています。寮生活は今までの実家暮らしや一人暮らしと大きく違い、自分の生活行動が大きく他者に影響を与えます。新入生には寮生活でしか得られない楽しさ、先輩との上下関係、集団生活の心構えなど多くのことを学んでほしいものです。

学生寮は、学科や学年などが異なる学生同士が寝食を共にすることにより自らの成長を図り、寮生自身による自主的で規律ある寮運営を行っていくという意味をもっています。東京興譲館は学生自身が興譲館寮のことを真剣に考え、相談し意見を出し合い、この寮をより素晴らしいものにしようと頑張っています。最近では節電対策などの生活上の無駄や怠慢を見直し、少しずつ改善しています。節電に関しては早速電気代の減少が数値として確認することができ、寮生も自分たちの努力を実感しさらなる努力を重ねています。

和やかな雰囲気の中にも寮生には共同生活を通して、社会が求める社会性・自主性が自然に身についていくと考えています。しかし、団体生活には守らなければならない規則や果たさなければならない役割があり、一人暮らしのような気ままな生活はできません。寮生活を通して、人格を磨き、規律正しい生活を送ることは、自己を見つめ直す絶好の機会であり、得がたい体験です。

このような環境で生活できるのは米沢有為会を始め、様々な人々の支援があってこそ成り立っています。寮生

はこれを自覚し立派な社会人になるために精進を怠ってはなりません。感謝の気持ちを忘れず、各自が様々な支援、助けにたいしてどう応え、行動するべきか常に考え、頑張っていきたいと思います。

最後に寮生の紹介をします。

○四年生

山田　伸〔法政大学工学部電子情科〕（米沢興譲館高校）

菊地　邦貫〔日本大学文理学部心理学科〕（米沢興譲館高校）

後藤健太郎〔東京学芸大学教育学部B類英語学科〕（米沢興譲館高校）

中村　竜也〔国士舘大学法学部法律学科〕（米沢中央高校）

樋口　駿〔東京大学理科一類〕（長井高校）

船山　弘樹〔立教大学理学部数学科〕（米沢興譲館高校）

松木龍太郎〔慶応義塾大学文学部人文社会学科〕（長井高校）

○三年生

相田　弘樹〔明治大学〕（九里高校）

佐藤　拓弥〔高千穂大学商学部商学科〕（米沢商業高校）

島津　良輔〔東洋大学法学部企業法学科〕（長井高校）

玉橋　一馬〔東京理科大学理学部化学科〕（米沢興譲館高校）

元木　康長〔法政大学法学部法律学科〕（長井高校）

○二年生

島貫　翔伍〔明治大学商学部商学科〕（八千代高校）

高橋　心〔電気通信大学情報理工学部知能機械工学科〕（米沢興譲館高校）

富樫　史博〔日本大学文理学部地球システム学科〕（基督教独立学園）

山下　智昭〔中央大学商学部会計学科〕（米沢興譲館高校）

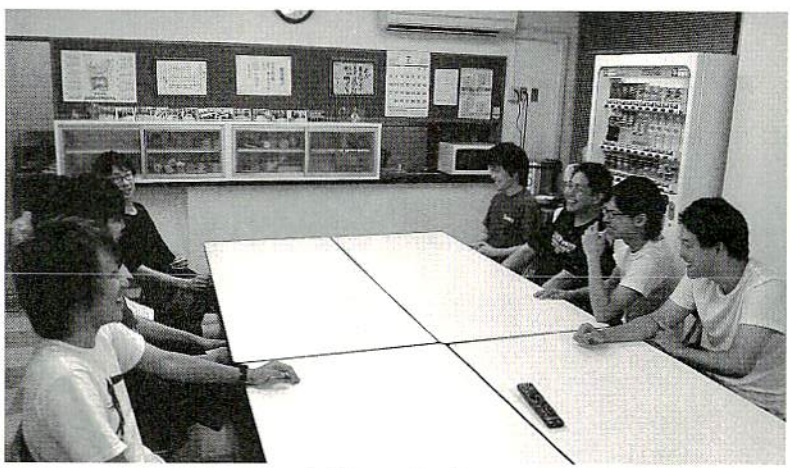
○一年生

鈴木　亮〔東京農業大学短期大学栄養学科〕
（南陽高校）

松嵜　祐樹〔早稲田大学創造理工学部経営システム学科〕
（米沢興譲館高校）

本田健太郎〔東京農業大学国際食料情報学部食料経済学科〕
（高畠高校）

宮坂　圭〔中央大学商学部経営学科〕
（米沢興譲館高校）



生徒間の団欒の様子

仙台興讓館

安部　玄樹

例年稀に見るうだるような猛暑続きとなった夏も過ぎ去り、初秋の季節となりました。秋色は次第に濃くなり過ごしやすい日が多くなり、暑さにうなされて過ごしていた体や気持ちを引締め直し、日々の生活を送っていきたいものです。

さて、仙台興讓館では今春、二名の寮生が卒寮となり、その穴を埋めるように二人の新入舎生が入寮し、総勢十二名でのスタートとなりました。また、昨年アメリカへと留学していた島貫洋平も今夏、仙台興讓館寮に戻ってきたため、現在は総勢十三名で寮生活を送っています。寮生の減少は免れたものの、長年危惧されている寮生の減少は、依然として非常に大きな問題です。寮生の減少傾向の原因としては、我が子を寮に入れなければ大学に通わせられないというほど逼迫した家庭が昔と比べて減少したことや、個人主義の台頭からか、寮での共同生活によって自由を制限されることは、前時代的であるという考え方をする若者が非常に増えてきていることが挙げられます。しかし私は、共同生活により制限されるものよりも、共同生活によって得られるものの方が遥かに大きいものだと考えます。同年代の仲間や先輩たちと同じ釜の飯を食い、将来を真剣に語り合い、また、後輩は先輩から今までの経験談を教えてもらったりもしながら、お互いを刺激しあい、一生涯ものの絆を深めてきました。それは、同じ屋根の下で苦楽を共にしなければ、築いていけるものでは無かったでしょう。また、風呂や廊下・食堂の掃除や寮の大掃除、ゴミ出し、夜の鍵の点検、月一回開かれるリーダー会議、季節の節目に開かれる寮生総会の出席など、寮生に課される義務は数多くありますが、それらをそれぞれが担うことにより、我々には責任感や協調性が生まれ、それは我々が社会に旅立っていく上でも非常に大きな糧になるのではないでしょうか。

前年度の終盤、未だ記憶に新しい三月十一日に起こった大地震は、東北や関東、日本中の人々に非常に大きな恐怖を与え、私たち寮生も本当に大きな衝撃を受けました。しかし私は、この大地震の時にこそ、自分が仙台興讓館寮生で良かったと、心の底から、今までで最も強く感じました。地震が発生した際、私たちは全員食堂に集合し、その時にあった食糧を持ち寄ったり懐中電灯を

持ってきたりして今後に備えました。地震発生後すぐに電気は使えなくなり、数十分後にはガスも使えなくなってしまいました。しかしそんな中でも寮生達の表情には、恐怖の色は全く浮かんではおらず、それどころか笑顔すら浮かべていたようにも思います。それは、信頼し合える仲間がいて、何が起こっても皆がいれば協力して乗り越えていけるという確信があったからです。持ち寄った食糧や、スーパーやコンビニの大行列に並んで手に入れた食糧を互いに分け合いながら、誰も体調を崩したりすることもなく無事に生活することができ、地震から数日後、寮生の保護者から迎えの車が到着し、寮生の多くは実家に帰ることが出来ました。寮に残った者も数名いましたが、食糧を分け合い、食事当番を分担したりしながら、平穏無事に暮らしたようです。私がもし一人暮らしをしていたら、地震にどう対処していいかも分からず、誰と連絡を取ることもできず、一人で途方に暮れて寂しさと不安感に打ちひしがれていたのだろうかと思うと、本当にぞっとします。どんな時でも寮には仲間がいるという安心感、やはりそれが寮の共同生活というものの何よりの強みではないでしょうか。

このようなかけがえの無いものを得られる場である寮生活を送らせていただけることに対して、我々寮生一同は真摯な感謝の態度を持ち続けるべきであると、私は感じています。我々に毎日栄養のある美味しい食事を提供してくださり、寮生活で我々に改善するべき所があれば逐一指摘してくださる寮母の小野寺さん、いつも寮のことを気にかけてくださり、行事にも毎回いらっしゃっていただき、寮全般のサポートをしてくださる御供館長、滝口副館長、甲支部長、私たちの寮生活を支え続けてくださっている米沢有為会の皆様には、本当に心からの感謝の気持ちを申し上げたいと思います。我々を支えてくださる皆様の気持ちに背くことがないよう、社会に大きく貢献できる人間を目指して邁進し、皆様から受けた御恩を還元していきたいと、強く願っております。これからも何卒よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、寮生の紹介をさせていただきます。

○専門学校

塩田　元　［東京ＩＴ会計専門学校仙台校会計学科会計士コース］
（山形大学人文学部人間文化学科）
（山形東高校）

○大学院生

島森　拓土　〔東北大学大学院理学研究科〕（米沢興譲館高校）

○大学四年生

塩田　紳　〔東北大学法学部法学科〕（山形東高校）

島貫　洋平　〔東北大学人文社会科学科〕（長井高校）

高橋　玄　〔東北福祉大学総合福祉学部社会福祉科〕（日本大学山形高校）

宮坂　匡　〔東北学院大学経済学部〕（米沢中央高校）

○大学三年生

安部　玄樹　〔東北大学法学部法学科〕（米沢興譲館高校）

青木　謙人　〔東北大学工学部材料科学科〕（米沢興譲館高校）

原田　学思　〔東北大学工学部機械知能航空工学科〕（米沢興譲館高校）

佐藤　丈洋　〔東北大学医学部保健学科放射線技能科学専攻〕（長井高校）

○大学二年生

遠藤　季理　〔東北大学経済学部〕（米沢興譲館高校）

太田　嵩人　〔東北工業大学工学部知能エレクトロニクス学科〕（米沢中央高校）

○大学一年生

黒田　啓太　〔東北大学法学部法学科〕（米沢東高校）

今年度の新入寮生歓迎会

我妻榮記念館だより

我妻榮記念館は、民法学者我妻榮先生の生家です。先生は明治三十年鉄砲屋町（現在の中央三丁目）に五人兄弟の長男として生まれ、（姉が二人、妹が二人）十七歳で第一高等学校に入学するまでこの家で過ごされました。

この建物は明治初期に建てられたもので、米沢においてはごく一般的な木造一部二階建で、現在では大変貴重な建物になっています。

大正六年に米沢で大火があり、榮先生の父上の又次郎さん（高等学校の英語の先生）の教え子達が消火活動にかけつけて類焼をまぬがれましたが、我妻家は市内の他の地区へ引越され、大正七年に大友家が買い受けて昭和六十三年まで七十年間住み、県外に転居されました。

そのあと市内の建設業者の手に渡り老巧建築物であることから解体の運命になりましたが、取り壊しになる寸前に我妻榮先生の生家という事がわかり、維持保存の機運が高まり、平成元年米沢有為会創設百周年という節目に際し、我妻榮旧居宅取得が了承されました。

そして、記念館として開館する整備を行い、遺族からの寄贈品を展示し、平成四年六月十九日に「我妻榮記念館」として開館し現在に至っています。

来館された方々は、榮先生の業績に想いをはせ、生家に触れられ感激されています。

初代館長　松野良寅（平成四年六月～十五年五月）
二代館長　今田久夫（平成十四年六月～二十年五月）
三代館長　伊藤和夫（平成二十年六月～二十一年五月）
四代館長　上村勘二（平成二十一年六月～現　在）

○平成二十二年度の運営報告

- 年間開館日
毎週金曜日・日曜日は午後一時～四時、月曜日は午前十時～午後四時まで開館。
年末年始休館で一五〇日開館、他に臨時開館六日。
- 入館者数
三六〇名。
- 記念館の利用
米沢有為会役員会・各部会など一二一名、鉄砲屋町町内会・上杉鷹山公と郷土の先人を顕彰する会・火種塾などの団体利用一九四名。

・補修整備
雪囲い、ウコギ垣根刈り込み、植栽、消毒、剪定、畳裏返し、障子張り替え。
・備品購入
デジタルテレビ。
・印刷・出版
我妻榮記念館だより第十五号、御色紙説明書。
・その他
興譲館高校（自頼奨学財団）の生徒・父兄二十二名の方々に、記念館内外の清掃奉仕をしていただき、終了後、館長の講義がありました。

○平成二十三年度の運営計画

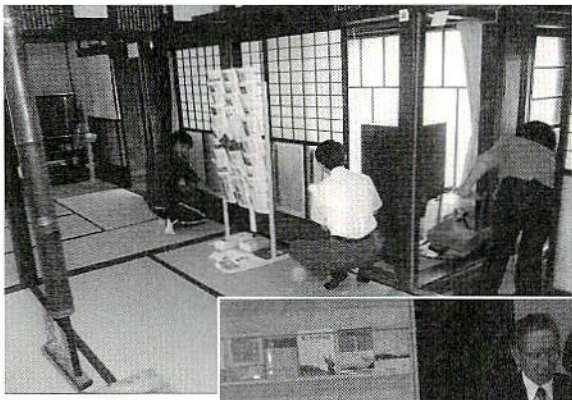
・建物の補修整備
三月十一日に発生した震度五弱の地震により、建物（外壁・トイレ）に破損が生じ、改修工事を行い八月に完成しました。
・各種資料の整備
・各種資料の保存の検討
・利用拡大、広報ＰＲの検討
・記念館だよりの出版（年一回）
・運営委員会の開催（年二回）
・その他必要な事項
・運営事業予算額　二百五十二万円（負担金二百万円、雑収入、繰越金）

○記念館の運営体制

平成四年の開館以来、以下の役職で管理運営を行っています。

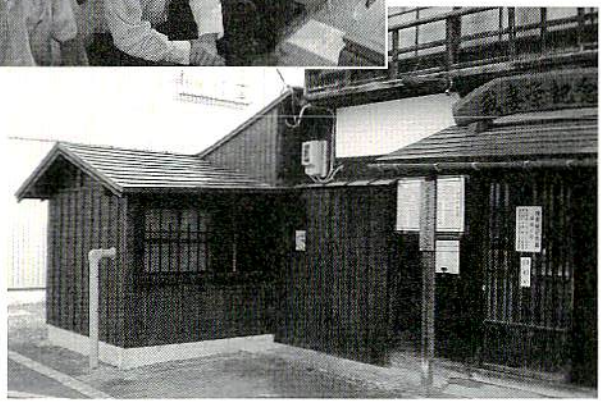
《二十二～二十三年度》

名誉館長　我妻　堯
顧　　問　松野良寅・小関　薫・今田久夫
館　　長　上村勘二
事務局長　鈴木幸一
運営委員　遠藤　拓・安部　敏・五十嵐京子・高橋節子・本多和彦
管 理 人　小林秀一



◀自頼財団奨学生の清掃奉仕

▲◀上村館長の講義



▶東日本大震災で破損のため修復された便所棟

特別寄稿（一）

民法の巨峰・我妻　栄先生

黒磯の書店で見た『民法講義Ⅰ』

中名生　正　昭

もう三十五年も前になる。那須の御用邸近くにささやかな山荘を構えたころのこと、海抜七百メートルの高原から「下界」と称する黒磯の町へ降りて日用品の買い出しをした。黒磯の町にただ一軒の相馬書店というわりと大きな書店に入った時、勘定場の後ろのいい位置に我妻栄著『新訂民法総則（民法講義Ⅰ）』が置かれているのが目についた。

我妻栄著『民法総則』は一九三〇年（昭和五年）に岩波書店から刊行されて以来、長く民法を学ぶ学生の指針となっていた。太平洋戦争後も新訂版が出され、以後も毎年のように増刷されている。しかし、この本が法律を学ぶ学生もいるとは思えない黒磯の町の書店にあることは驚きであった。何か書棚から光を放つようであり、オーバーにいうと、書店の格、黒磯の町まで奥深いものがあるように感じられた。

いうまでもなく我妻栄先生は民法学の巨峰であり、その名からこのような感慨を呼び起こす希有の存在である。

岩波書店から刊行された『民法講義』は総則、物権法、担保物権法、債権総論、債権各論上巻、中巻一、中巻二、下巻一と合計八冊に及び、さらにこれを簡略化した『民法大意』三巻もある。この『民法講義』ほど多くの学生、法曹家に読まれた民法の本はあるまい。まさに不朽の名著といってよい。

四人姉妹に囲まれて育つ

我妻栄（わがつま・さかえ）先生は一八九七年（明治三十年）四月一日、山形県米沢市鉄砲屋町で米沢中学校英語教諭我妻又次郎の長男として生まれた。母つるは興譲小学校の教師だった。女四人の姉妹の真ん中のただ一人の男児として成長した。

母が教師をしている興譲小学校に学んだ時、薫陶を受けた赤井運次郎先生を忘れず、終生、報恩の誠を尽くしたことは郷里ではあまりに有名である。ついで父が教師をしていた米沢中学校（現興譲館高校）に進み、五年間首席を通し、卒業成績は九六点七分という空前の記録を

残し、一九一四年（大正三年）東京の第一高等学校を受験することとなった。

期待された中での一高受験

その前年には母校から十数人も一高を受験しながら一人も合格しなかったので、「秀才我妻ならば」と郷里の期待を一身に浴びた。万一不合格の場合は、父にも申し訳ないし郷里にも帰れないという悲壮な気持ちを抱いた。当時の高等学校の入学試験は六月なので、三月の中学卒業から三か月ある。我妻少年は上京して三か月間、神田の開成中学校の予備校に通った。郷里ナンバーワンの秀才も、目端の利いた東京の中学卒業生の間では気遅れした。なにしろ言葉もよく通じない。これらの少年に伍して一高に入学できるのか、必死に勉強したため三か月間に体重が一貫目もやせたという。同じ時期、一歳年下の周恩来（後の中国総理）が来日して同じ神田に下宿し、一高の受験勉強をしていた。周少年は日本語の習得に遅れをとり、受験に失敗し留学先をフランスに変えたが、我妻少年は首尾よく一高一部丙類に首席で合格した。

級友岸信介と伊豆で正月に受験勉強

我妻先生の一高、東大の同級生には後に内閣総理大臣となる岸信介がいた。大正六年、東京帝国大学法科大学（現法学部）に進み、岸と翌年正月、伊豆の土肥温泉の宿屋明治館に籠って大学一年の学年試験の受験勉強をした。学年試験は六月だが一月ごろから勉強しないと優等はとれないという。一年の学年試験の成績は今後の大学生活、さらには社会へ出て重要な意義を持つ。二人の切磋琢磨で成績は同点で首席二人ということになった。

点数制度が無くなり社会思想にも目覚める

二年の時から点数ではなく、優良可の三段階評価となって熾烈な点数争いはなくなった。これが我妻青年に法律以外にも目を向けさせる余裕を与えた。大正七年という年は米騒動の年で日本の社会思想は急激に展開し、我妻青年は社会思想に関するもの、とくに河上肇の著作は、大小のこらず探し求め友人たちと競い合って読んだ。社会学・社会への関心はこの時培われたものである。

岸信介とは大学三年の時の大正八年、高文（高等文官）

行政科の試験の時も一緒に勉強した。岸は官僚となることを目標としてこの高文を受験したのだが、我妻先生は鳩山秀夫教授の勧めで学者として大学に残るつもりであった。その先生がなぜ高文を受験したのであろうか。

我妻先生の追憶によると、当時、東大に残って教授の道を目指すものは優秀な成績、一番ないし三番で高文を合格しなければならない不文律というか、プライドのようなものがあった。高文で三番以内で合格する、これは一高に一番で入る時、また大学一年の時の猛勉強に次ぐものであったらしい。その結果三番あたりで合格したが、後で聞けば、東大の諸先生は、かならずしもみんな「一番で合格」したのではない実情がわかって苦笑された。

我妻先生の学統

我妻先生は一九二〇年（大正九年）七月東大を卒業、民法学の鳩山秀夫教授のもとで東大法学部助手となり、学問の道に入った。

近代日本の民法学はフランスのボアソナードによって基礎がつくられ、民法起草者の穂積陳重（一八五六～一九二六）、富井政章（一八五八～一九三五）、梅謙次郎（一八六〇～一九一〇）の三人によって体系づけられ、これを受け継いで発展させた民法学者が穂積重遠（一八八三～一九五一）、鳩山秀夫（一八八四～一九四六）、末広厳太郎（一八八八～一九五一）の三人である。

鳩山邸のローストチキン

我妻先生はこの三人の民法学を総合したものといわれる。その中でもとくに親しく学んだのは鳩山秀夫であった。鳩山は法律学者・衆院議長の鳩山和夫の次男で、一歳年上の長男が後に総理大臣となった鳩山一郎である。

音羽御殿といわれる鳩山邸でローストチキンをご馳走になった若き日の先生は「世の中にはこんなうまいものがあるのか」とよろこんだ。

留学で得た社会への目と生涯の伴侶

一九二二年（大正一一年）七月、東大助教授となられ、翌二三年六月からアメリカとヨーロッパに留学された。「日本の法律学はこのままでは駄目だ。もっと広い視野からの思想が必要だ」と強い危機意識を持たれた先生は、この留学に強い期待を抱かれ、アメリカ、ついでヨーロッパでも、幅広く社会学、哲学、心理学などを吸収され、法律学の方法論へ発展させられた。その根底には大学二

年当時の社会思想への関心があったといえる。後年先生のもとで助手となった川島武宜氏（後の教授）に「君は法解釈学に熱中しすぎる。法律の基礎にある社会現象とか思想にも興味を持つべきである。もっと広く法律学以外の本も読め」といわれたと、川島氏は述懐している。

留学により先生はもう一つの大きな幸福を得られた。それは帰国途中の船中で知り合った鈴木緑さん（鈴木米次郎氏四女）と熱烈な恋愛をし、帰国翌年の一九二六年四月に結婚されたことである。一九二七年（昭和二年）三月に三十歳で東大教授、民法担当となった。

関節炎にもめげず多彩な活動

一九三〇年（昭和五年）左足の関節炎にかかり、後に膝も冒されて。松葉杖にたよる生活となったが、その不自由を克服して活発な活動を続けた。

一九四五年（昭和二〇年）一二月から三年間、東大法学部長、一九四六年（昭和二一年）六月から一年間、勅選貴族院議員として日本国憲法の制定に参画、一九四七年（昭和二二年）一二月に日本学士院会員、一九五六年（昭和三一年）から一九七三年まで法務省特別顧問、一九五七年（昭和三二年）三月東大を定年退官されたが、翌年には原子力委員会専門委員となられた。

六〇年（昭和三五年）五月の岸内閣の安保条約強行採決に際しては「岸信介君に与える」の一文で旧友に「政界を退陣し、釣りを楽しもう」と呼び掛けられた。

社会正義と弱者へのまなざし

一九六四年（昭和三九年）一一月三日に文化勲章を受賞され、同時に米沢市名誉市民となられた。

先生の終生の研究テーマは「資本主義の発達にともなう私法の変遷」で、一九五三年（昭和二八年）に発表された『近代法における債権の優越的地位』がその代表的論文だが、その根底には一貫した社会主義と弱者へのまなざしがあり、具体的には戦前の東大セツルメント、戦後の東大法律相談所長としての活動に現れ、憲法問題研究会に加わって平和憲法の擁護にも力を尽くされた。

一九七三年（昭和四八年）一〇月一一日、七十六歳で亡くなられる二日前まで『法学概論』の執筆を続けられ、終始、日本の民法学をリードされていた。

故郷米沢には我妻栄記念館があり、先生の原稿や資料が保存されている。

もう一人の民法の巨峰・中川善之助先生

ここでもう一人、日本の民法学者で我妻先生と双璧ともいうべき中川善之助先生（東京神田生まれ、父祖の地金沢で育つ）について述べたい。

我妻先生が民法の中でも財産法（物権、債権）についての業績が多いのに対して、身分法（親族、相続法）の分野で活躍されたのが中川先生である。

この中川先生と我妻先生とは同じ一八九七年（明治三〇年）に生まれられたことは奇跡のようなものを感じさせられる。東大での学年は早生まれの我妻先生が一年上だが、中川先生は我妻先生もその学統をくむ穂積重遠の高弟である。お二人は東京帝大と東北帝大の助教授として同時期に欧米に留学され、関東大震災にあった東京帝大図書館の図書購入に協力された。東北帝大助教授の中川先生も東大図書復興委員という辞令を受け、我妻先生とベルリンの一室に「東大図書復興委員会」という看板を掲げ、強い円をバックに大量の学術書を購入した。その結果、東大に「ワッハ文庫」などが、東北大にも「フリードリッヒ・シュタイン文庫」が納まったのである。

我妻先生が亡くなられた年の一二月、日本学士院総会で学士院会員を代表し、追悼の言葉を述べられたのも、ほかならぬ中川先生であった。

原子力損害の賠償に関する法律と先生

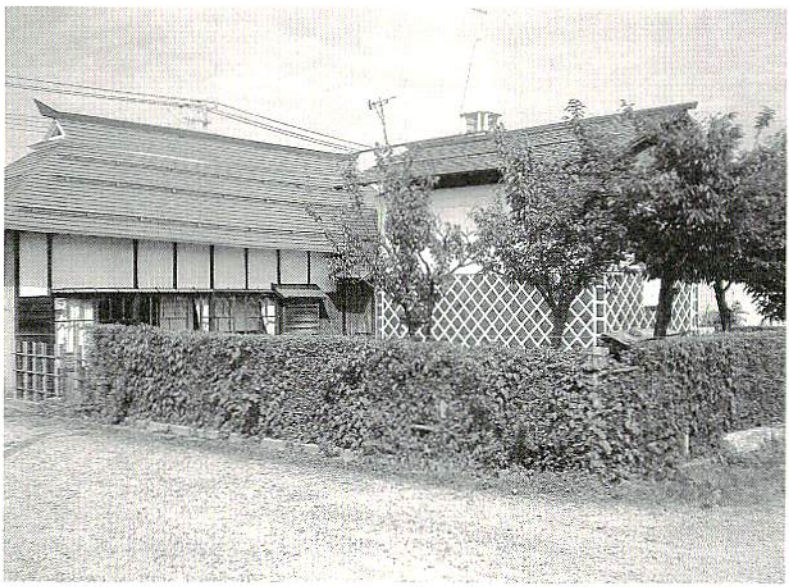
日本の原子力発電がスタートしたのは一九六五年（昭和四〇年）。原子力災害被害を補償する「原子力損害の賠償に関する法律」はすでに一九六〇年（昭和三五年）六月に成立していたが、先生はその誕生にも尽力された。民法の不法行為は事業者の無過失責任を認めないが、原子力損害の賠償に関する法律は事業者の無過失責任と原則的無限責任を認め、容易に賠償ができるようにした。これには民法学者である我妻先生が「鉱業法」の著作を有斐閣から懇望され、鉱業専門家豊島陞（のぼる）氏と共著された時の無過失責任を軸とした鉱業法（昭和三三年出版）を、中年の先生が猛勉強された時の成果が大きく役だった。「天才我妻」は「努力の我妻」でもあった。

しかしこの「賠償に関する法律」も、電力会社の無限賠償の原則から、新設の原子力損害賠償支援機構を通じて結果的には政府が援助することを主眼とした新たな原子力損害賠償支援機構法が成立し、現行の「賠償に関する法律」自体も改正されようとしている。

我妻先生の名著『民法講義』を見かけた栃木県黒磯の町も福島に近く放射線の数値も比較的高いと聞く。我妻先生がご存命ならば、今回の東北の大震災と原発事故、法の行く末をどう思われるであろうか。

【中名生正昭氏】日本ジャーナリスト懇話会副会長

一九二七年、仙台市に生まれる。五十二年東北大学法学部卒、読売新聞社入社、編集局参与、経営計画委員会幹事代表、総合技術開発室長、局長待遇編集委員、この間、三菱重工業と共同開発のロボット新聞輪転機RX、日立製作所と共同開発のニューメディア総合配信システムSUMMITの考案と実用化に成功。著書に『常識のウソ』『歴史を見直す東北からの視点』『アジア史の真実』『奥の細道の謎を読む』『芭蕉の謎蕪村の不思議』『尖閣・竹島・北方四島』など。



我妻　榮記念館の庭園を望む

置賜市町だより

米沢市

東日本大震災に伴う避難者支援について

平成二十三年三月十一日に東日本大震災が発生し、東北は未曾有の被害に見舞われ、さらに追い討ちをかけるように福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染が起こりました。

本市は幸いなことに直接の大きな被害はありませんでしたが、震災後隣県である福島県から多数の方が避難されて来られたため、すみやかに市営体育館、武道館、文化センターを1次避難所として開設し、支援いたしました。

このほか県外の被災地への支援といたしましては、人的支援として陸前高田市、大船渡市、気仙沼市に対し、消防職員を派遣、福島市、南三陸町には水道部の職員と共に給水車を派遣し、山田町には事務職、山元町には建築技師を派遣いたしました。

また、会津若松市、気仙沼市、釜石市に医療チームを派遣しております。

物的支援につきましては、相馬市、亘理町、伊達市、石巻市、仙台市、釜石市に対し食糧、飲料水をはじめ、必要に応じて生活物品を支援してきたところです。

八月二十五日現在で、市内において避難生活されている方は、約一千世帯で約三千四百人になります。特に、放射能汚染を心配して小さな子どもがいる家庭の自主避難者の方が増えてきている状況です。

避難先としては雇用促進住宅、市営住宅等の公的住宅のほか、県の借上げ住宅、旅館、ホテルなど多岐にわたっております。

このような状況の中、本市では避難者への総合的な支援の窓口として、六月から万世コミュニティセンター内の小ホールを利用して「避難者支援センターおいで」を開設いたしました。

主な業務内容として、市内避難者の把握、被災地の行政情報収集と提供、避難者の相談・支援窓口、情報誌の発行・ホームページ開設、避難者間や地区住民との交流に関する企画など、本市に避難されている方々のくつろぎの場として様々な支援活動を行っております。

このたび米沢有為会より義援金を頂戴したところです

が、他にも上杉家とゆかりの愛知県吉良町（現 西尾市）、宮崎県高鍋町からいただいたのをはじめ、地元企業、本市出身の厚志家の方などから多額の義援金を頂戴しています。皆様の暖かい心に感謝申し上げます。

現在心配される放射能汚染につきましては、市内を四〇〇㍍四方に区切り、実際に人が住んでいる箇所八一六区画について空間放射線量調査を実施いたしました。地上一〇〇㎝、五〇㎝、六㎝の、それぞれの高さにおいて、三〇秒毎に測定器の数値を読み取り、これを三回繰り返してその平均値を測定結果としております。全ての区画で、一時間当たり〇・〇四～〇・一九マイクロシーベルトの範囲でした。ちなみに、原発事故が発生する前の山形市における空間放射線量は、一時間当たり〇・〇三七マイクロシーベルトです。（事故以前は県庁所在地でのみ測定）

大震災後の産業の現状

東日本大震災による直接的な被害が少なかった本市ですが、観光産業において風評被害などにより本市を訪れる団体の観光バスツアー客をはじめとする観光客は少なく、温泉旅館や観光施設などの観光産業全体が、厳しい状況となっているところです。

観光入込客数は四月から七月末時点で、前年の五割弱程度に留まっております。

次に観光産業の柱である「米沢牛」に関しては高濃度の放射線を含むエサの稲わら問題で、米沢牛ブランドにも風評被害が及んでおり、食肉販売や旅館・飲食店での料理提供などへ影響が出ております。

米沢牛につきましては、現在全頭検査を実施し、安心・安全な提供に努めておりますが、様々な観光誘客キャンペーンを展開して風評被害を払拭していきます。

そのような中、明るい話題としまして、山形大学工学部キャンパス内に有機エレクトロニクス研究センターが竣工いたしました。有機エレクトロニクスの世界的研究拠点形成を目指し、世界から終結した卓越研究者からなるドリームチームを中心に研究が進められています。

また、このたび有機エレクトロニクスの先進技術開発や実用化に必要となる「有機エレクトロニクスイノベーションセンター」（仮称）が経済産業省の補助事業に採択されました。県の吉村知事は「有機エレクトロニクスの事業化、産業化に向けた取組みを加速させるものと期待している」と述べており、今後、山形大学、県、米沢

市の連携を強化し新たな産業の基盤づくりを進めてまいります。

米沢チャレンジ精神

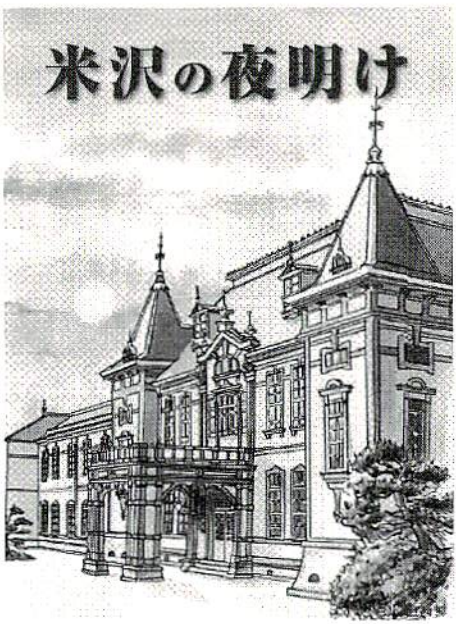
昨年、米沢市制施行一二〇周年と山形大学工学部創立一〇〇周年を記念して上演されました、市民ミュージカル「フェイス」ですが、わが国初の化学繊維（人絹）が米沢で作られ、帝人が生まれる物語は、今年五月には市内の全中学生が観賞しました。人絹ができるまでに挫折から何度も立ち上がる秦教授の姿を観て、米沢の次代を担う子ども達にも感動の輪が広がりました。

七月には帝人株式会社のご好意により、東京のセシオン杉並ホールを会場に2回公演が行われました。二回ともたくさんの方においでいただきましたが、観客には米沢のチャレンジ精神がご理解頂けたことと思います。

また、同じ七月には、米沢市内の小学五年生から中学三年生までの生徒に科学読本「米沢の夜明け」を配布いたしました。米沢市芸術文化協会の協力を得て、約二年にわたって取材や校正を繰り返し、この夏ようやく完成となったものです。

三部構成になっており、「フェイス」でも取り上げました秦逸三教授の「帝人物語」。次々と問題がおきても逆線表（目標の日を決めて、必ずその日に間に合わせるための表）をつくり、「皆でやるべ」を合言葉に世界初のノートパソコンを誕生させた「プロジェクトY」の「ノートパソコン誕生物語」。

そして世界中から注目を集めている次世代の技術であり、山形大学工学部の城戸淳二教授が開発に成功した「有



機ＥＬ誕生秘話」。

どれも米沢を代表する「ものづくり」の話で、このように新しい産業を出現させてきたのが米沢です。

この本の題名は「米沢の夜明け」となっていますが、これまでの米沢が暗かったという意味ではなく、努力次第で明るく輝かしい未来になることを願ったものです。この本を読んだ子ども達が、「ものづくり」に少しでも興味を持ち、「大人になったら米沢で「ものづくり」の仕事をしてみたい」と思っていただけたらと考えています。

〝舘山城は伊達氏の居館跡？〟

～舘山城の全容把握に向けた試掘調査を開始～

天文十七年（一五四八）に家督を継いだ伊達晴宗は、それまでの桑折西山城「福島県桑折町」を破却して本拠を米沢に移しました。その際に拠館としたのが舘山城ではないかと考えられています。

舘山城は、大樽川と小樽川に挟まれた丘陵を縦堀と土塁等で区画した全長三五〇㍍の山城で、周囲に北館及び東館の居館、南側に広場を配置する構造となっています。平成十三年度に調査した北館からは、整然と配置さ

舘山城全景

れた建物群が確認され、家臣団の屋敷群と推測されています。

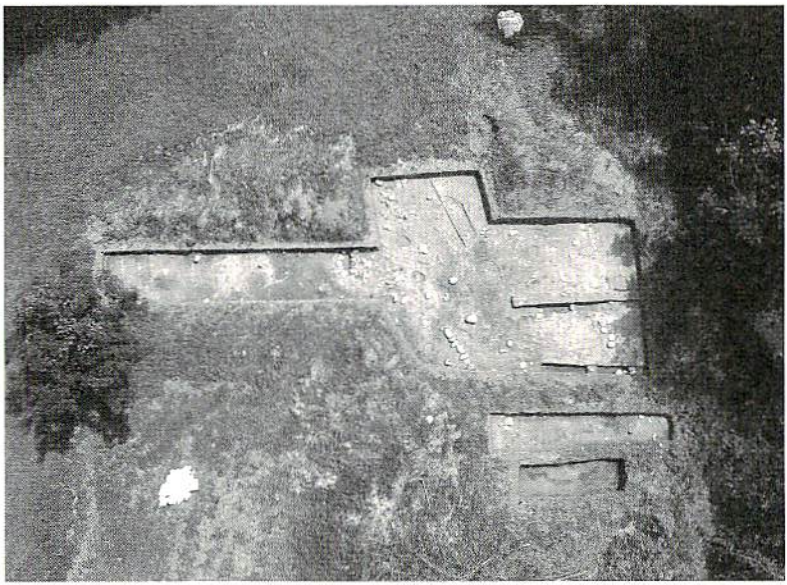
一方、主郭に設置された枡形には桑折西山城の遺構と共通する特徴が見受けられます。

米沢市では舘山城跡の史跡整備の前段となる本格的な調査に平成二十二年から五ヵ年計画で取り組んでいます。

これまでの調査で、平成二十二年度には、南館でテラス状に整地された広場跡を確認しました。

また、平成二十三年度には、東館から庭園の一部とみられる池跡等の遺構や多数の遺物が発見されています。

今後は、山城の主郭部分を中心に北館や廃寺跡の調査を予定しており、将来的には国の史跡指定を受けて地域間交流資源や市民の憩いの場として活用できる史跡公園として整備を行いたいと考えています。



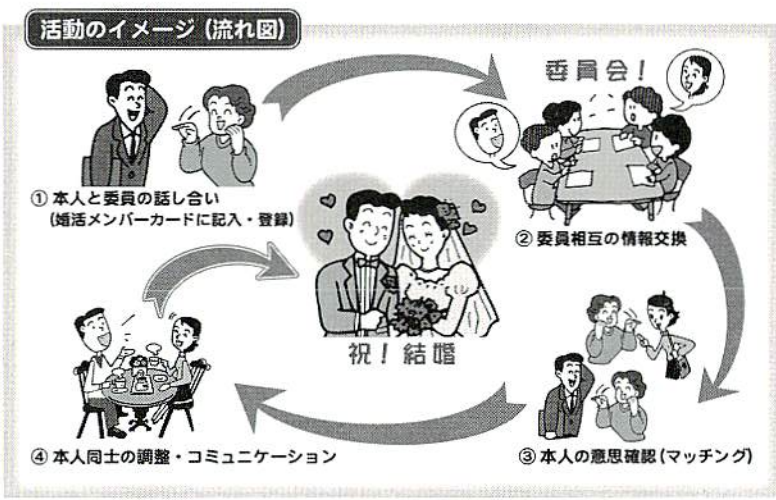
東館の庭園遺構

「出逢いの機会づくり応援委員会」の発足

本市まちづくり総合計画後期重点テーマの一つが、少子化と人口減少問題対策です。その解決策の一つとして成婚に至る支援が必要であると全国でも多様な事業が展開されています。

本市では「未婚男女がどこに住んでいるか」という地域情報を持っているコミュニティセンター管理運営委員会に依頼し、市内十七地区から情報に精通している女性を募り、委員会を組織しました。

この皆様が救世主となり、互いに情報を交換しながら出逢いの場を提供する仕組みです。男女が出逢うきっかけをつくりながら、男磨き・女磨きなどの講座開催、婚活イベントの情報提供を行っていきます。婚姻率の向上にご尽力いただけますよう行政と協働で推進してまいります。



長井市

日本フットパスシンポジウムINながい

（二〇一一年十月一日～二日）

〝水と緑と花のながい〟において、今年十月一日（土）二日（日）に、日本フットパス協会シンポジウム「日本フットパスシンポジウムINながい」を開催します。一日目のシンポジウムではテーマを『かわ～まち、まち～かわへ歩くフットパス』、サブテーマは「地域と連携したフットパスによるまちづくり」です。全国のフットパスによる先進的な取り組みや利活用について、情報の提供・交換・交流を図り、全国に発信していきたいと考えています。二日目は、フットパスルートを歩く体験を実践し、自然豊かな最上川コース、舟運の歴史文化のまちなみコースをはじめ、流域の他市町のコースも設定し、最上川の自然や景観と舟運時代の歴史・文化を満喫していただければと思っています。

そもそも本市のフットパスの取り組みは、平成十三年度に白川と最上川合流点周辺で、子供たちとともに、自然体験活動に取り組んでいる「水辺で遊べるわらし子広場整備促進協議会」が評価され、国土交通省の「水辺の楽校プロジェクト」に登録されたことに遡ります。そして平成十四年度には、山形河川国道事務所と「フットパス」検討会を発足。平成十五年度にフットパス白川コースの整備に着手し、翌年十月に国土交通省所管「観光交流空間づくりモデル事業」に選ばれ、その先導する事業「最上川フットパスながい」において、NPOや市民と行政が一体なって、ル

整備されたフットパスコース

ートの設定やガイドマップの作成、案内サインのデザインと設置、ボランティアガイドなどに取り組んできました。国土交通省山形河川国道事務所の全面的なご支援により、平成十七年六月、最上川沿いのフットパスルートの完成を機に、まちなかの豊かな水路や舟運時代の面影が残るまちなみと歴史的な建造物を楽しむルートをつくり、今日では、ボランティアガイドの案内により、多くの観光客にも好評を得、リピーターも含め、観光交流人口の増加に結びついています。

また、フットパスルートを整備したことにより、市民による取り組みも盛んになってきました。市民の散歩コース、小中学校の野外授業や親子行事、全国つつじマラソンのウォーキングの部、長井まちづくりＮＰＯセンターが主催する「歩くセッション」や「花ウォーク」「旅市」など、ＪＲなどとのタイアップした企画にもなっています。

また、特に長井の冬は四ヶ月の間、雪に閉ざされており、克雪、利雪、楽雪の一環した「雪灯り回廊」のイベントでは、フットパスコースにろうそくを灯して、幻想的な雰囲気に包まれた中を歩く冬のイベントは、今年で九年目を迎えます。

平成十八年六月には、フットパスの取り組みを全国に発信し、フットパスによってまちづくりに取り組んでいる各地域との情報交流を目的に、「全国フットパスシンポジウムINながい」が開催されました。その後、平成二十年度に町田市を中心として、山梨県甲州市、北海道黒松内町と長井市が発起人となり、「日本フットパス協会」が設立し、全国に広がる足がかりとなりました。最上川流域のフットパスにおいても、上流域の川西町、白鷹町、朝日町、大江町、寒河江市や村山市、下流域の庄内町などの地域でも整備が進み、最上川流域全体のネットワーク形成を目指しています。

ぜひ、市内外の皆さんに、長井のまちなかを散策して、〝水と緑と花のながい〟をお楽しみください。

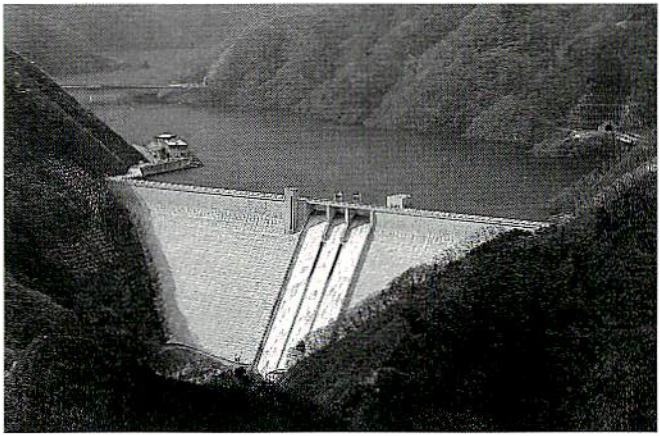
「長井ダム」完成

長井ダムは、洪水調整、河川環境の保全、かんがい用水の供給、水道用水の供給、発電を目的とした堤高百二十五・五ｍ、堤頂の長さ三百八十一ｍ、堤体積約百二十万立方ｍの最上川に合流する置賜野川につくられた東北地方でも有数の大規模な重力式コンクリートダムです。

昭和五十二年に山形県が予備調査に着手、昭和五十九

年には国直轄事業として採択され、平成元年に工事用道路建設、平成十二年には本体工事に着手、平成十四年には長井ダム広報施設「野川まなび館」開館、長井ダムコンクリート初打設、そして平成十八年度には本体コンクリート打設終了、予備調査から三十三年、直轄事業開始から二十六年目の今年三月に完成しました。

長井ダムのダム湖には、「ながい百秋湖」



平成23年３月に完成した「長井ダム」（後方のダム湖は「ながい百秋湖」）

という名前が付けられています。この長井の郷のダム湖畔に佇めば、秋には紅葉が水面に映えて、百（いくつも）の秋の素晴らしい景観を満喫出来るイメージが自ずと生まれてきます。

「長井」に誕生したダム湖が地域の発展に貢献し、その素晴らしい景観は地元だけでなく訪れる多くの人々にも末永く感動を与え愛されるようになって欲しい、との願いが「ながい百秋湖」という名前にこめられています。

また、長井ダム周辺には、カヌーやボートツアーなど湖面利用の拠点となる湖面広場、緑の大切さを提唱する二十一世紀不伐の森を整備しました。

これからのダムは、治水、利水等に加えてダム及び水源地域の豊かな自然、文化等を活用した地域の振興及び、バランスのとれた流域の発展を図ることにより、二十一世紀のグランドデザインの一部として機能することが期待され、今年三月「長井ダム水源地域ビジョン」を国、流域住民、ダム水源地域の自治体等の参加のもと策定しました。「長井の人と地域を元気にする長井ダムと水源地域を活かしたまちづくり」を目指し、「野川まなび館」を推進拠点として、ダムや水源を身近に感じ、親しむことができる活動を計画、実践していきます。

「長井市」新たな野菜「行者菜」の魅力

「行者菜」は、行者にんにくとニラのハーフで、宇都宮大学農学部元助教授藤重宣昭先生のグループが生みの親です。

滋養強壮の基となる「硫化アリル」の含有率が「行者にんにく」よりも高く、この硫化アリルが疲労回復や殺菌効果を有するだけでなく血液中の脂質を減らして生活習慣病を予防すると言われています。

ビタミン類も豊富に含まれており、ビタミンの宝庫と言われる「ニラ」と比べてもビタミンAとビタミンBは十五%、葉酸は二十%も多く含まれています。特に葉酸は貧血および動脈硬化の予防に、そして神経細胞の働きを維持する効果があることから認知症予防にも役立つと注目されています。

昔、修験者が荒修行の際、精力をつけるために食べたといわれる希少な山菜「行者にんにく」を手軽に食べる事が出来るように開発された新しい野菜が『行者菜』です。

行者菜の産地化を目指し

「行者にんにく」の栽培も行っていますが、収穫まで五年を要し、収穫期間も一年のうちの二週間ほどであり、手軽に求めることは出来ませんでした。行者菜は、二年目から収穫が可能となり、収穫期間も長く、両者の良いとこ取りの優れものの野菜です。

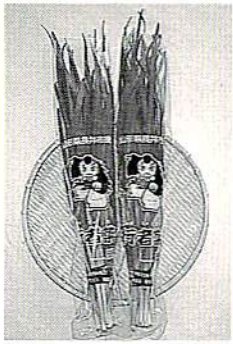
平成十八年より七人の農家で研究会を発足し七㌃からスタートし、栽培技術の研究を行いつつ、販売戦略の模索も行っています。東北芸術工科大学の協力を得ながら、開発しましたロゴマーク（逞しい修験者が見得を切る雄姿）は、正に名前と行者菜のパワーを象徴するものです。

現在は、会員も増え十四名となり、栽培面積も三〇㌃

程となっています。更なる、栽培面積と販路の拡大を図り、行者菜の里として産地化を目指しております。

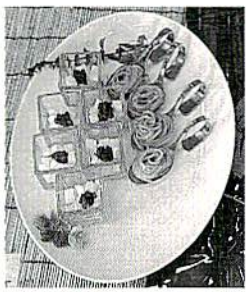
行者菜の魅力満載のレシピ開発

レシピの開発は、市内で料理教室を主宰されている小野先生に協力をいただき、行者菜の特性を生かした主菜、漬物、吸い物、ジュースなどバラエティーに富んだメニューの開発を行い、行者菜の秘めた魅力を探っています。

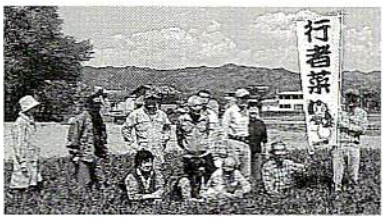


レシピ本では、手軽に作れる「行者菜じゃこチャーハン」、ひき肉とまぜて皮で包んだギョーザ風の「行者菜まんじゅう」、大根、ニンジン、ミョウガ、白ゴマなどを使った浅漬け「五色スタミナ漬」、リンゴやオレンジを加えて飲みやすくした「行者菜ミックスジュース」などを紹介しています。行者菜は、ニンニクのように口臭を心配する必要がなく、夏バテ防止にもってこいの食材で、和、洋、中で誰でも気軽につくれるようなレシピです。本年は、さらに新たなメニューを開発し、目揃い会や行者菜づくしの試食会を行い、行者菜の更なる魅力を創造し、長井市の特産として大切に育んでいます。

翡翠色の餃子



グリーンパスタ



目揃い会

栽培面積はまだ少なく供給は限られていますが、現在県内では山形市以南のお店で販売され、東京銀座のアンテナショップ「山形プラザ」でもお求めになれます。

ふるさとを思い出しながら、山形の新たな魅力にも触れていただければ幸いです。

問合せ等：(HP) gyoujana.com　生産者会事務局　遠藤孝太郎　☎〇二三八－八四－六四四五

南陽市

「確かな未来へ 夢はぐくむまち 南陽」の構築を目指して

東日本大震災が東北地方太平洋側に大きな被害をもたらし、加えて東京電力福島原発の事故による放射能被害が拡大しています。同じ東北に住む私達南陽市民にとっても平成二十三年は様々な課題が突きつけられていますが、被害の少ない本市から「元気」を発信するとともに、東北復活に向けて、出来る限りの協力・支援をしてまいりたいと考えています。

さて、南陽市では、今年度から、この先十年間の将来を見据えた第五次総合計画がスタートしました。まちづくりの目標を「確かな未来へ 夢はぐくむまち 南陽」と掲げ、「教育」「産業」「健康」を戦略の柱として、将来を見すえ、着実でスピーディーな行政運営に努めています。

「教育のまちづくり」が、豊かな人材育成と地域づくりの核に

柱となる第一のテーマは「教育のまちづくり」です。

「教育日本一のまちづくり」を目指している南陽市では、今春、市内の五つの小中学校で耐震による新・増改築工事が終了し、子ども達は安全で新しい校舎での生活をスタートしました。教育環境の整備はもちろんですが、次代を担う国際人育成のためには、中学生のうちから国際的な視野を広げる経験が必要であるとの考えから、初めての試みとなる、「青少年インターナショナルセミナー」を実施しました。市内中学校から九人が参加し、四日間の上海訪問の際に、地元の中学生と交流を重ね、地元の日本企業を訪問するなど、短い滞在期間ではありましたが、彼らにとっては、多くの宝物を手に入れ今後に活きる貴重な体験となりました。

さらに、四年目を迎えた青年教育推進事業では、個性

上海の中学生と交流する南陽市の中学生

あふれる実践活動が生き生きと展開され、地域に元気と活力を生みだすまでに成長しています。九月には、本市を会場に「全国青年まちづくりフォーラム」が開催され、全国から集まった志ある青年たちとの議論や、交流を通じて、互いに刺激を受けながら、一層の活発な活動を誓い合いました。これが起爆剤となり、今後の本市における青年教育、シニア教育、結婚対策、ひいては地域活動にまで、活性化の輪が広がりを見せてくれるものと大きな期待を寄せています。

また、昨年末の第十一回山形ふるさとCM大賞（山形テレビ）において、県内三十五市町村の作品の中から南陽市の「幸せを呼ぶ三羽のうさぎ」が初の大賞に輝きました。このCMは県内はもとより、東北各県でも放映されています。日本三熊野のひとつとして名高い宮内・熊野大社の本殿裏の彫刻の中に三羽のうさぎが隠し彫りされていて、すべて見つけると幸せになるという言い伝えを取り上げたもので、新年早々から県内各地はもとより、多くのお客様においでいただいています。これは自分たちの故郷を見直す契機にもなると同時に、郷土愛を深める結果にもなっています。

「幸せを呼ぶ3羽のうさぎ」を探して

加えて、スポーツ交流や市民一人1スポーツ・1文化の定着を進めて健康体力づくりの推進、公民館を拠点としたシニア世代の教育、婦人教育など「教育のまちづくり」は実に多面にわたります。

このような教育分野での取り組みが、感性豊かで、社会性のある人材育成と地域づくりに結びつき、結果的には南陽市の発展の礎となるものと確信しています。

「南陽ブランドの全国発信で、まちの活性化を進める」

第二のテーマは、「産業のまちづくり」です。

本市では今年度から、組織改革の一環として「ブランド推進課」を新設しました。その目的は、農産物や工業製品などの産業資源だけではなく、赤湯温泉を始め多くの環境資源や人材までを含めた全ての地域資源を活かした『南陽ブランド』の立ち上げを行うものです。経済の活性化を推進するブランド創生を図るため、世界・全国

赤湯駅にオープンした駅の駅「なんよう」と、
ベジ＆ビバのキャラクター

に向けて、人・モノ・観光・情報など、地域まるごと南陽ブランドとして発信しています。今まさに課題になっている東北復興ですが、安全で安心できる「南陽ブランド」を広く発信することは、東北のイメージアップを実現する活動にも結びつくものと考えます。

昨年暮れには、赤湯駅構内に『駅の駅なんよう』を開設し、旅行客などに広く南陽ブランドをPRし、好評を博しています。

三月中旬には、多賀城市のイオンタウンにアンテナショップを新設するための準備を進めていましたが、震災により、場所をイオン仙台中山店に移して、五月に「南陽のんまい市場」を開設。多くの仙台市民に南陽の新鮮な農作物や特産品を販売しています。

さらに、首都圏でのブランド確立を目指し、神田錦町にサテライトオフィスを新設し、定期的に開催される『ちよだ青空市』に、朝穫り野菜はじめ様々な南陽産品の展示販売を行っています。また、ワインや日本酒と南陽の料理を味わう会なども開催し、首都圏の人々への「南陽ブランド」の浸透も進んできました。

サテライトオフィス「ちよだ青空市」

やはり、外部で展開されるアンテナショップや物産市や各種イベントに積極的に参加し、南陽ブランドを幅広い人々に認知してもらうことが、山形県への関心の醸成

や東北の復興・復活にも結びつくのではないかと考えています。

産業の全般では、既存の地元企業や誘致企業のバックアップを行うとともに、雇用の確保に努めています。また、赤湯温泉を始めとした観光産業のさらなる振興を進めるとともに、全国で最も古い歴史と伝統のある「南陽の菊まつり」は今年で九九回目を迎えますので、来年の一〇〇回記念に向けて積極的に話題づくりを行います。

林業もまた、一つの産業として今後の可能性が高く、環境保全の観点からも、国内木材需要拡大の方向にもありますので、五つある企業の森でのイベントで森林に対する市民の意識を高めながら、林業の再生を図っていきます。

企業の森づくり ～イオンの森～

長寿社会、少子化時代を見据えた「笑顔があふれ、活気に満ちたまちづくり」の推進

第三のテーマは、「健康のまちづくり」です。

現在の日本の大きな課題となっているのが、少子高齢化社会の進展であり、これに対して、南陽市では平成十九年に『南陽市・みんなが子育て応援団』を合い言葉に【南陽市子育て支援都市】を宣言し、少子化が進行するなか、人口減少に歯止めをかけ、南陽市の地域全体で積極的に子育てを応援していこうとする決意を表明するなど、各種施策に取り組み、若い子育て世帯を支援してきました。今年はさらに、人口減少の抑制・出生数増加策のひとつとして「子育て応援定住交付金事業」を創設し、子育て世帯の定住化に向けて一段と施策を充実して取り組んでいます。

南陽市は、山形県を顔にたとえると「えくぼ」の位置にあります。多くの事業を通じて、市民が健康的で笑顔に満ち、様々な夢を実現する「夢はぐくむまち 南陽」を目指して市民とともに頑張っていきます。

高畠町

「第五十回　全日本50km競歩高畠大会」

正式大会名：第50回全日本50km競歩高畠大会 兼 第30回オリンピック競技大会（2012年ロンドン）男子競歩種目日本代表選手選考競技会

（2011年10月30日(日) 午前8時スタート）

晩秋の高畠町を会場に行われる全日本競歩「一般男子50km競歩」は、その年の主要国内競歩競技会の最後の大会であるとともに、翌年の主要国際競技会に向けた国内選考競技会として重要な大会に位置します。加えて、競歩の日本代表選手選考競技会としては唯一、参加標準記録がない（制限時間はある）大会のため、出場者も多い傾向です。

大会は、昭和縁結び通りを中心とした市街地コース【スタート・ゴールの折り返し（一部周回）コース（一周2.5km）】で開催され、毎年国内のトップアスリートによる熱戦が繰り広げられます。今大会はオリンピック競技大会、男子競歩種目日本代表選手選考競技会も兼ねており、例年以上の盛り上がりが予想されています。

あわせて開催される高畠競歩では、二〇〇一年来、競歩競技がインターハイ種目となったことにより多くの高校生が記録に挑戦しているほか、町内各中学校では授業の中に競歩が取り入れられたこともあり、中学生の部には町内中学生選手が多数参加しています。

競技種目は下記のとおりです。

◆全日本競歩

・一般男子50km競歩

◆高畠競歩

・一般男子20km競歩
・一般女子20km競歩
・一般女子10km競歩
・高校男子10km競歩
・高校女子5km競歩
・中学男子3km競歩
・中学女子3km競歩

川西町

町内三中学校が閉校
新たに川西中学校が開校

本年三月をもって、川西第一中学校、川西第二中学校、玉庭中学校の町内三中学校が閉校し、四月から三つの中学校が統合した新たな中学校として、「川西中学校」が開校しました。

学校給食がスタート

川西中学校ではすべての生徒、教職員に対応した完全給食がスタートしました。

新設した調理場では、米飯の炊飯機能を整備し、主食とおかずが同一施設で調理でき、常に温かい給食の提供ができるようになりました。

学校給食は、栄養バランスなど生徒の心身の健全な成長、望ましい食習慣を身につけることなどを目的としていますが、それだけではなく給食を通じた地産地消や地域食文化の理解等、さまざまな形で食育の推進を図っていきます。

第四次総合計画後期基本計画 スタート

平成十八年四月にスタートした第四次川西町総合計画は、平成十八年度から平成二十七年度までの十年間の

「基本構想」、五年間ごとの「基本計画（前期・後期）」、三年間を期間として毎年度見直す「実施計画」で構成されています。

前期基本計画が平成二十二年度で終了するにあたり、これまでの成果や結果、社会情勢の変化などを踏まえ、平成二十三年度から平成二十七年度までの後期基本計画を策定しました。

後期基本計画では、町民のみなさんにわかりやすい仕組みづくりが必要であることから、主要プロジェクトを設定しました。プロジェクトは「地域づくり活性化プロジェクト」、「六次産業化推進プロジェクト」、「交流基盤確立プロジェクト」の三つで、庁内で横断的に取り組み、優先的、重点的に実施するものです。

また、この三つの主要プロジェクトは、それぞれ独立して進めるというものではなく、互いに関連性を持ちながら推進していきます。

地域づくり活性化プロジェクト

第四次川西町総合計画は「協働のまちづくり」を基本理念としています。前期五か年では協働体制づくりのため、各地区では地区経営母体の設立、地区計画の策定、そして公民館から交流センター化への取り組み、行政では地区を支援する地域自立支援制度による財政的、人的支援を行ってきました。後期五か年では、前期五か年の経過を踏まえ、さらなる協働体制の充実強化に取り組みます。

地区では自主自立による地区運営を、行政では地区経営への支援を継続して進め、地区と行政との協議・調整組織として地域力と行政力の向上を目指した、川西町地域づく

り連絡協議会を引き続き設置します。

また、人材育成交流基金を設置し、地域の中核となる人材の育成のための青年層の研修や実践活動の支援等に活用していきます。

六次産業化推進プロジェクト

本町の産業の基軸である農業を持続し発展させていくためには、生産のみならず、加工、販売にも取り組む総合産業化が必要です。そのため、この取り組みを展開していく人材の育成を図りながら、各分野において次の施策を行っていきます。

生産分野（第一次産業）では、今後の産地化を図るための戦略的品目の導入研究のほか、生産施設整備等に対する支援を行います。加工分野（第二次産業）では、新たな商品開発や必要となる加工施設整備等に対する支援を行います。販売分野（第三次産業）では、生産、加工を通して製品化された農産物を広く情報発信し、販路拡大を図るための支援、販売するための施設整備等に対する支援を行います。

また、起業支援基金を設置し、起業家の育成支援や起業関係制度資金、コミュニティビジネスの支援等に活用していきます。

交流基盤確立プロジェクト

町内では、町の地域資源を活用した交流事業に取り組みます。地区においても地域間交流が展開され、これらの取り組みの中から、特産品の販路拡大など、経済的交流につながる事例が生まれています。しかし、交流が一過性の事業に留まってしまう例もあり、今後はこれまでの交流実績をもとにしながら、さらなる産業の振興、移住の促進、若者の定住による集落の維持・活性化といった課題に対し、成果を確実に地域に還元する仕組みを構築することが必要です。

このことから、これまでさまざまな主体で取り組んできた交流事業を体系化し、総合的に事業を展開していく

基軸となる組織「やまがた里の暮らし推進機構」を立ち上げ、「やまがた里の暮らし大学校」の開校に着手しました。この大学校の活動により、交流のきっかけづくりから川西町との関係性を築きあげ、交流事業の充実を図っていく中から地域課題への対応方法等を見出し、交流基盤の整備に取り組み、経済効果につなげていこうとするものです。このような取り組みを通して、川西町に移住や定住をする方が増え、地域の活性化が図られることを期待するものです。

また、人材育成交流基金を都市との交流促進に活用していきます。

小国町

都市部の若い力が集落に新しい風
～緑のふるさと協力隊、地域おこし協力隊を導入～

集落の現状

小国町は、町土の約九割を森林が占め、その七割以上がブナを中心とした広葉樹に覆われています。森が作りだす空間は、豊富な水資源や山の幸、川の幸を育み、そこに暮らす人々は、豊かな自然と共生するなかで、多様な生活文化や生活技術をつくりあげ、それを守り続けてきました。

しかし、時代の流れとともに人口の減少や高齢化が進んできており、農林業をはじめとした各種産業や、教育、福祉など、まちづくりのあらゆる面において大きな影響を及ぼしてきています。特に、豊かな自然のなかで、人々が協力し合い支え合いながら生活基盤を維持してきた集落においては、人手が少なくなり、共同作業やお祭りといった地域行事の実施が困難になるなど、一層の深刻化が懸念されています。

都市部の若い力を農山村に

町では、こうした状況に対応した支援策として、農山村に興味のある若者が農山村で生活しながら地域住民とともに地域活動に携わる二つの制度「緑のふるさと協力隊」、「地域おこし協力隊」を活用し、地域づくりを進めてきています。

「緑のふるさと協力隊」は、特定非営利活動法人地球緑化センターが展開している事業で、都市部の若者を一年間農山村に派遣し、その地域においてさまざまな地域おこし活動に取り組むものです。町ではこの仕組みを活用して、昨年度、本年度ともに二名の隊員を受け入れています。

また、「地域おこし協力隊」は、総務省の地域づくり制度で、地方自治体が都市住民を受け入れ、地域おこし協力隊員として委嘱し、一定期間以上、地域活動に取り組むものです。町では本年度初めてこの制度を導入し、一名の隊員を委嘱しています。

地球緑化センターによると、平成六年にスタートした「緑のふるさと協力隊」は、本年度で十八年目を迎え、これまでこの活動に参加した隊員のうち約四割が、活動

稲の種まきを協力（平成22年度 緑のふるさと協力隊）

終了後も農山村に定住しているとのことです。小国町においても、平成二十二年度に受け入れた隊員のうち一名が、引き続き町内に居住することになり、本年度改めて「地域おこし協力隊」として委嘱を受け地域活動に携わっています。

都市部の若い力を農山村に迎え入れることで、町では、農山村の魅力の掘り起こしや、集落活動の維持や支援のあり方を探るとともに、課題解決につなげていこうと考えています。

農作業やお祭り、さまざまな地域活動に参加

本年度受け入れている緑のふるさと協力隊隊員は、小国町の南部に位置する玉川地区と、東部に位置する白沼地区にそれぞれ居住しています。居住地を拠点として、田や畑などで農作業に協力するとともに、観光わらび園などの観光施設の運営補助や、お祭りなどの地域行事に参加し、地域と一体となった活動に取り組んでいます。このほか、高齢者の交流機会として開催している「地域サロン」で、地域に伝わる伝統料理を学んだり、地域の運動会に参加し、子どもたちと一緒に汗を流したりするなど、地域の子どもからお年寄りまで多くの住民と交流

を深めています。

こうした活動を通じて隊員は、都市部にはない農山村の豊かな自然環境や、雄大な自然から得られる恵み、そしてそれを活用する人々の知恵や技術、支えあい助け合う集落の暮らしなどを体験し、都市部では得られない山村の魅力を感じ取っているようです。

また、隊員を受け入れている地域の住民からは、若い二人の活動を通して、失いかけていた地域の文化や、農山村の暮らしぶりを見つめ直すきっかけにもなっており、一定の評価を得ているところです。

集落の活性化と魅力の再認識

この取り組みに期待されることとして、都市部の若者が集落で生活し、住民とふれあい、さまざまな地域行事に携わることが地域住民にとって新しい刺激となり、さらなる集落の維持・活性化が図られることや、隊員（町外の人）だからこそ気付く地域の良さや課題などについて地域が再認識するということがあげられます。また、隊員が情報発信者となり、農山村と都市を結ぶ懸け橋になることも期待されます。

豊かな農山村、そして集落の機能を保全していくためには、地域を見守り続ける多様な支援が求められます。町では、「緑のふるさと協力隊」「地域おこし協力隊」など町外の人々による地域づくりの仕組みを含め、さまざまな取り組みを通じて、集落の安定した生活の維持・確保を図っていきます。

地域サロンに参加する「緑のふるさと協力隊」

白鷹町

産業の総合化を目指して―

～新たな起業創出をバックアップします～

「白鷹町産業センター」のオープンと「白鷹町産業フェア2011」の開催

◆産業センターオープン

近年、産業振興の視点から「町の交流人口の拡大」・「産業の一体的振興」が課題とされ、それに対応する方法の一つとして期待されたことが、各産業団体などの連携による受け皿の整備でした。

昨年、その動きは具体性を帯び、町は農工商観連携と産業の総合化を目的とした「白鷹町産業センター基本構想」を策定。その構想には、既存の白鷹勤労者総合福祉センター（愛称…パワーセンター白鷹）を核として新たな拠点を整備する内容を盛り込み、将来に向けた産業振興の展望を示しました。

具体的には、昨年度の国の地域活性化・きめ細かな臨時交付金を活用し、パワーセンターの事務室を増床する計画で、七月に工事に着手し、十一月十日に完成しました。また、その整備工事と並行して「白鷹町産業センターの設置及び管理に関する条例」を制定（平成二十二年十二月一日公布）しています。

産業センターのオープンに先立ち、昨年十月には「白鷹町産業フェア２０１０」を開催し、農工商観の連携を目指した動きが始まっています。

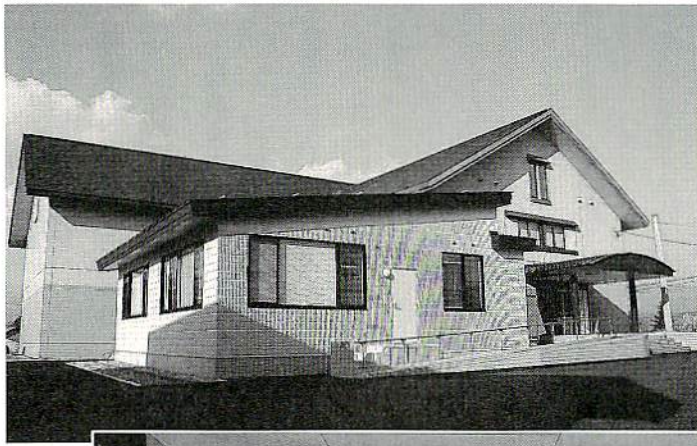
新たに整備した事務室には、商工会、観光協会、西置賜漁業協同組合の事務局が入り、十二月一日から業務を開始しました。

今後は、入居団体と町内の農業、酪農業、林業などの団体が連携を深め、農と食を起点とした農工商観連携による産業の総合化、新たな交流を生み出すまちづくりを進めています。

◎産業センターのご利用方法

産業センターの愛称はこれまでと同じ「パワーセンター白鷹」です。研修室や多目的ホールなどを使用することができますので、ぜひご来館ください。

■申　込　指定管理者／白鷹町アルカディア財団（☎八六―〇〇〇一）



◀産業センター外観

▶関係者によるテープカット（12月1日）

◀明るい雰囲気の事務室内

◆「白鷹町産業フェア2011」

実質、産業センターがオープンしてから初めての産業フェアが、「農工商観の連携を探る」をテーマにJA白鷹グリーンセンターを会場として、十一月三日から六日にわたって開催されます。

白鷹町の農林業、工業、商業、観光業などを再認識し、その良さを町内外に発信するとともに、産業間の連携を深めることを目的としています。

期間中は、各産業の製品や工程における機械等の展示やさまざまなイベントを予定しております。また、町産の農産物、加工食品、新そば等が販売されます。

「見て、聞いて、触れて、そして味わって」町の産業を体感していただければと思います。

▶俵上げ大会

◀地元職人によるミニハウスの建築

飯豊町

町民が主役となって〝にぎわい再現!!〟

○昭和のにぎわいをテーマに「復刻版！椿劇場」を開催

椿劇場は、昭和三十年代まで椿地区に実在した映画や演劇、漫才、浪花節まで幅広い芸能を楽しむことができた娯楽施設です。多くの町民がそこに集い、笑いと涙をともにしながら交流を深める場所でした。その当時のにぎわいを、平成に復活させようと昨年九月二十日に椿地区内で「復刻版！椿劇場」が開催されました。

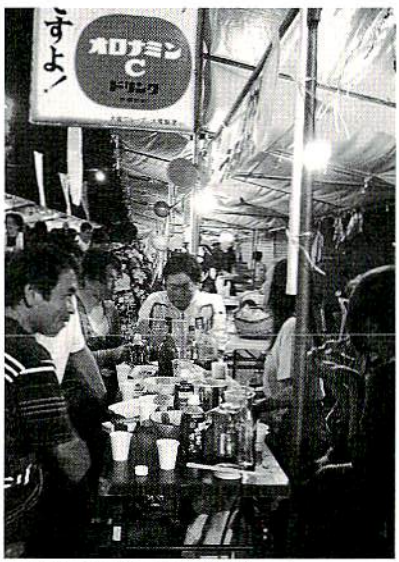
「椿地区から次々と商店が消えていく中、このイベントの話を聞き、地域に元気がでるならぜひ協力したいと役員みんなが賛成した」と椿区民会の佐原正会長は話します。

「椿劇場」には、にぎわい再現プロジェクト委員会も共催として参加。午後二時の開始に合わせ、高橋勝委員長（添川）がお客様に来場のお礼を述べるとともに「昭和のにぎわいをみんなで楽しみましょう」とオープニングを宣言。

長沼清次さん（椿）のご厚意により、所有する空き地を会場に利用し、特設ステージを設け、一日限りの椿劇場が復活しました。

会場には町中にあった懐かしい看板や日用雑貨、昭和の往年の名車も展示。当時を懐かしむ人たちや自動車ファンなどが詰め掛け、写真を撮ったり、青春時代の思い出話に花を咲かせていました。

舞台上では小白川神社こども獅子の獅子舞、置賜農業高等学校演劇部のコントと舞踊などが披露され、会場は



町中の路地に露店が連なった
「復刻版！椿劇場・いいでの夜市」

拍手に包まれました。そして日が暮れると椿劇場は映画館に。三〇〇インチの巨大スクリーンには、アニメ「ちびまる子ちゃん」と石原裕次郎主演の「嵐を呼ぶ男」が上映され、子どもから大人まで野外での映画を楽しみました。

今回のイベントで特に〝にぎわい〟を印象付けたのは「いいでの夜市」でした。町内の個人や商店など十二団体が出店。夜市は夜の九時まで続き、出店の軽食や飲み物などを買い求める人たちで客足は途絶えることはありませんでした。白椿リサイクル会が販売した昔のおやつ「うる米だんご」にいたっては、お客様から「懐かしい」と声が上がり、販売開始からわずか一時間ほどで売り切れ。お客様の対応に追われながらも、

懐かしい日用品が展示され、会場はレトロな雰囲気に

出店者からは「イベントは大成功だ。住民の力で盛り上げようという活気が、お客様にも伝わっているのだと思う」と話してくださいました。

露店からの威勢のよい掛け声と、人々の笑い声に包まれ、初めてなのにどこか懐かしい〝にぎわい〟がこの日再現されました。

○現代版井戸端のにぎわいへ「にぎわい茶房」店舗拡大中

平成二十二年十二月に三店舗で事業をスタートさせた「にぎわい茶房」は、今年度に入り新たに十三店舗が加わって、町内に広がりをみせています。

にぎわい茶房の目的は、誰もが気軽に立ち寄って町の話題を聞いたり話したりできる場を作ること。町が目指す〝にぎわい再現〟の取り組みの一つ。

現在参加しているのは、飲食店や小売店、民宿など。「にぎわい茶房協力店」として店舗の中や外の一部を提供し、訪れたお客さまへ無料のお茶と普段のメニューに一品加えた「にぎわいメニュー」を出して、おもてなしをしてもらいます。その運営には、利用者の実績に応じて、町から協力料を支払う仕組みです。

「町から、やってみませんか、とのお誘いを受け、町

が元気になるならばと引き受けました」と、事業スタート時から参加している香月・喫茶「木精（こだま）」（椿）の味田美代子さんは、そのいきさつを話します。

協力店の多くに共通する悩みは、「本業の傍らで参加している」こと。飲食店や小売店では、本業の商売をおそろかにすることはできず、にぎわい茶房のお客さまに十分に応えられないこともあると言います。

農家民宿「ごえもん」（白川）を経営する鈴木みちさんも、「にぎわい茶房の看板を玄関に掲げていても、民宿や家のことで留守にすることもあります。喫茶店のようには、なかなかいかないのが現状です」と肩をすぼめます。

にぎわい茶房は、地域にとって子どもからお年寄りまで情報交換の場です

そんな事情を抱えながらも、それぞれの協力店は工夫を凝らしながらにぎわい茶房を運営していらっしゃいます。

中には成果として「お客さまとの会話が増えた」との声も。前述の味田さんは、「にぎわい茶房を始めてからお客さまに声を掛けやすくなりました。『お茶でもどうですか』と声を掛け、この事業のことを説明しています。町外の方とは話が弾み、町の観光を紹介することもあります」。

また、菓子の丸屋（萩生）の樋口文子さんは、「おかげさまで、地域の人たちもお茶飲みに来店してくださいます。子どもからお年寄りまで地域の情報を交換できるので、ありがたいですね」とにぎわい茶房に参加した効果を話します。

にぎわい茶房が現代版の井戸端となるのか。町の試みは緒に就いたばかりです。

なかつがわ農家民宿が提供している「にぎわいメニュー」の1例。飾らない素朴さがお客さまから人気

昭和二十四年七月

社團法人

米澤有爲會會誌

米澤有爲會の再建

米澤有爲會の復興成る!!

此の朗報を全國各地に居住せらるゝ鄉黨の方々に御傳へするに至つたことは何といふ喜ばしい事であらう。思へばあの戰爭末期の悲慘な狀況、各主要都市大爆破、死傷續出、工場、事務所、住宅燒失、疎開移轉、各人は自己の生命を維持するのがやつとの事で親類の間でさへ交通、通信も途絶へたといふ有樣、其の間有爲會も亦種々の憂き目に遭遇し、東京、仙台の二興讓館も遂に爆破燒失するに至つた。終戰後も困難な事情が續いた。此の非常時下に在つては有爲會の目的とする事業の遂行は殆んど出來なくなつたのは當然の事であろう。たゞ其の間に在つても東京では學徒の宿舍だけは何とか維持して行き度いと始めは遠藤氏の住宅を、後には永井氏の住宅を假りの興讓館として曲りなりにも續けていつたのが先づ出來得る限りの努力であつたが此の假りの寄寄舍も遂に閉鎖の已むなきに至つた。其の間理事諸君の骨折苦勞は容易の事ではなかつたのである。

敗戰後各方面混亂のさ中に再建日本の芽ばえは隨所に興り來つた。そしてそれぞれ實を結びつゝある。恰も戰災の焦土に蒔いた麥が青々と生ひ育つて相當の收獲がある樣に。しかし一面には日々の新聞は思ひもよらぬ樣な罪惡の種々相を報じ兇暴な殺人、集團强盜から汽車、電車の乘り降りに至るまで人間のあさましさを露骨に表はした世相、主食の配給さへ不充分な敗戰國の已むを得ぬ現象とは謂へ、道義の國日本などといふ言葉はどこへやら餓鬼の國日本と化し去つた人心の頽廢實に今日より甚しきは無しと歎かざるを得ない次第である。かゝる際こそ一層鄉黨の關係を密にし先づ互に其の消息を明かにし進んでは互に助け合ひつゝ時には懇親の會合でも隨所に開く樣にし度いといふのが會員諸君の總意であると信ずる。此の總意を酌むで再建有爲會の事業はこゝに開始せらるゝに至つたのである。其の第一着手の會員の居住所調査といふ一事でさへ

容易の事では無い。其の他用紙の入手、印刷の催促など人には知れない苦勞を重ねて玆に不充分ながら再建有爲會の第一報を會員諸君に頒ち得るに至つたことは何としても喜ばしい事である。今後會員諸君の御協力に依り着々會報の完成を期して行き度いと願つて居る次第である。

次に喜んで頂き度いのは興讓館寄宿舍の再興である。仙台興讓館は既に新建築が完成して多數の學生諸君を收容して居るし、東京興讓館は現在工事中で此の秋には竣工の豫定である。これ全く有力者各位の多大なる御力の賜物であると深く感謝して居るのである。

又全國各地在住の米澤人は厚き深き鄕黨愛を以て互に助け合ひつゝ共に共に各自の業務に勵み再建日本の爲め努力中である。

かくして本會の事業は順を追ひ着々として實現して行くであらう。會員諸君に於ても御意見は遠慮なく御提出を願い度い。そして共に共に力を協せて鄕黨の福利增進と會員相互の共助懇親を重ねる途とを出來得る限り盡して行き度いと念願して止まない次第である。

米澤有爲會本部報告（總務部）

終戰後第一回の會報を出すに當り戰時中並に戰後本會のたどつてきた經過を大畧御報告申上げる。

一、戰爭の影響

昭和二十年四月十三日東京興讓館を、同七月十日仙台興讓館を戰災により夫々燒失、東京事務所備付けの重要書類の大半も失つてしまつた（札幌興讓館は幸にも罹災を免かれた）又一般基金として所有してゐた滿鐵社債及株券（帳簿價格三萬三千百二十圓）を在外財産として銷却するの余儀なきに至つた。

二、定時總會

戰時中並に戰後定款第二十七條但書により總會を東京に開催していたが昭和二十三年八月十一日久し振りにて米澤市松ヶ岬公園內臨泉閣にて

開催百余名の出席あり非常に盛會であつた。席上多數會員により要望された件は(一)東京及仙台興讓館の再建　(二)會員の獲得特に婦人の入會勸誘であつた。

三、會　員

會員名簿を戰禍により燒失したので各支部にお願いし漸く約千名の住所、氏名が判名したので二十四年末迄には名簿を印刷會員にお分けしたいと準備中である。

四、本部事務所

戰後都内を轉々としたが目下東京都中央區日本橋室町三丁目三番地米澤織物工業株式會社東京支店内に設置してゐる。

但次項記載の通り東京興讓館落成の上は同所に移轉する豫定である。

五、興讓館の再建計畫

(イ)東京興讓館(本部事務所を含む。收容三十名)

西大久保四丁目百七十番地燒跡に新築中、九月上旬落成の豫定

木造瓦葺二階一棟　坪數八十八坪二三

(二)一〇〇、〇〇〇圓)

(ロ)仙台興讓館　角五郎丁燒跡に新築　四月竣工濟(收容二十名)

木造茅葺平屋一棟(瓦葺に改造の豫定)七〇坪

一〇、一〇、六、六、六、六、六疊の七室

(四〇〇、〇〇〇圓、外に所有地五〇〇坪賣却)

(ハ)資金募集計畫

總額二百五十萬圓を大要左記配分により各支部を中心に寄附をお願いしているが未だこの目標達成には中々容易ではない。切に御配慮をお願いする次第である。

東京支部	四五〇、〇〇〇圓	米澤支部	一、五〇〇、〇〇〇圓
山形支部	一〇〇、〇〇〇圓	仙台支部	一〇〇、〇〇〇圓
京都支部	一五〇、〇〇〇圓	阪神支部	一五〇、〇〇〇圓
札幌支部	五〇、〇〇〇圓		
計	二、五〇〇、〇〇〇圓		

募金時期及拂込先

申込期限　昭和二十四年八月末

拂込期限　同　九月末

拂込場所

(1)各支部事務所か

(2)東京都千代田區丸ノ内二ノ五
千代田銀行本店「米澤有爲會」普通預金口
(3)振替貯金口座「東京四九五〇」米澤有爲會
の何れかにお願い致したい。

六、本部役員

會長　結城豊太郎　副會長　香坂　昌康
理事　相田　岩夫　同　宇佐美　洵(總務)
同　加藤　八郎(教育)　同　北村徳太郎(編輯)
同　羽鳥好太郎(產業)　同　本間　敏雄
同　加藤　榮二
監事　小田切武林　監事　高野　大輔

尙毎月第三土曜日午後二時より本部事務所(日本橋米澤織物會社內)に於て定例理事會を開催している　(二四、七、一〇)

米澤だより

例年四ヶ月間雪に閉ぢ込められる米澤の冬も、今年は非常な薄雪で、いつもなら年の明けぬうちに一回屋根の雪下しをせねばならぬ程の積雪になるのに今年は正月にも街路に土が出て自動車が走るという珍らしい年を迎え、大寒になつても氣温は例年より高く積雪は三十センチ位、六十年來の薄雪だと云われております。家庭でも職場でも燃料は大助りですが、一月廿七日から米澤市御成山で開催の豫定だつた縣下スキー選手權大會は遂に雪不足のため二月三日から六日までに延期されました。――以下米澤の近況を記して見ましよう。(一月廿日、山宮生)

▽待望の福島、米澤間(四三キロ)の鐵道電化工事は着々と進捗し三月完成、四月廿四日運輸省主催の開通祝賀會が米澤で開催されることになつており、四月からは板谷トンネルの煤煙に惱まされることなく旅行することが出來るようになります。米澤市では七百萬圓の豫算で電化開通記念產業復興再建共進會を四月廿五日から十日間、第二中學、第二高校で開催することになり準備中で、全國の特產品を陳列する計畫であります。四月廿八日からは上杉、松岬兩神社春季大祭もあり、櫻花も爛熳と咲き競う季節

なので盛況を呈するものと豫想されております。

▽板谷電化工事と並行して六萬ボルト送電線の工事も進捗し三月完成の豫定で、産業復興の原動力を供給することになつております。

▽永眠された市長岡村武雄氏の後を承けて、昨夏公選第二代の市長として就任の高橋廣吉氏は、財政難の苦しい市政を擔當して米澤再建に努力して居られます。これまで多年産業經濟界に活躍して來られた市長なので、その手腕は市民から期待をかけられております。

▽高橋市長は市の發展は産業の中心をなす纖維工業の隆盛を圖らねばならぬと、關係業者と市纖維産業振興會を組織し、織機の復元、廣幅改造、製品の向上などに着々力を注いでおります。

▽山形縣織物工業協同組合（事務所米澤市大町元同業組合）は昨年末、民主的に機構を改革することになり選擧により理事、監事を改選し、理事長は窪榮義氏、副理事長は田中駒藏氏に決定、近く專務理事を決めることになつております。又製造部委員（米澤十八名、山形二名、長井一名）の選擧も行い新發足しました。

▽金詰りで市内の中小企業は何れも經營に苦心しておりますが、金融の緩和をはかるため業者が銀行支店誘致運動を起し、莊内銀行支店が大町に開設されることになり、支店長は佐藤幸一郎氏に決定、又勸業銀行支店も近く設置に決りました。

▽學制改革により新制中學は一中（元松岬高等小學）の外に二中（現在興讓校に併設、本年松岬神社東方に新築豫定）三中（西部小學校脇に昨年新築）の三校、高等學校は一高（元中學）、二高（元工業）、三高（元商業）、四高（元高女）、女子高校（元九里）、家政高校（元家政）と改稱し、新教育を致しております。工業專門學校は山形大學工學部として新發足する準備中で内容充實に努めつゝあります。私立盲學校は昨年縣移管となり縣立盲聾學校（校長前教育課長松田幸一郎氏）として不幸な人々の教育に當つております。

▽有爲會米澤支部役員は次の通りで、昨年八月十一日の支部總會で改選されたものであります。

（山宮廣章）

米澤支部役員（順序不同）

▽支部長　宇佐美辰五郎

▽副支部長　吉池慶太郎

▽顧問　加藤宮之助、高橋廣吉、大乘寺良一、猪俣政次郎、田中駒藏、赤井運次郎、石丸喜平、金子功太郎、岸孫藏、川越新太郎（以上米澤）伊藤四郎右衛門、濱田五左衛門、相田宮之助（以上南郡）石黒七三郎、高橋辰二、井上庄七、長谷川平五郎（以上東郡）、奥山源内、横山八次、長沼惣右衛門（以上西郡）

▽參事　青柳六一郎、金子才助、駒形脩、新野辰三郎、山下義廣、有壁一雄、木村盤根、高野源五郎、高橋與市、登坂鐵藏、舟山貞齊、近幹之助、伊佐早信、西海枝信隆、千喜良英之助、窪榮義、澤恭助、大沼政吉、佐藤隆三、鈴木龍雄、今井歸一長俊英、飯田貞一、岡博、吉村啓作、行方皓一郎、遠藤武右衛門、堀内恒松（以上米澤）磯部二郎、我妻菊次、伊藤秀雄（以上南郡）石岡孝一小野田豊吉、新藤京太、山田二男、江口六右衛門（以上東郡）齊藤彌助、安部多門、芳賀與七（以上西郡）

▽理事　（總務）須佐吉德、（庶務會計）飯田貞一（通信）山宮廣章、磯貝德夫、奥山政雄、瀧澤信夫、金子安一、林崎孝吉、今井宝介、井上武良、石黒長次、内山才吉、青木茂、鈴木周一、佐藤武夫、吉村啓作、今泉亨吉、瀧澤良藏、山田武雄上村早苗、佐野宮士四郎、伊藤正、佐藤清助、高野俊三、土田静雄、唐澤正雄、近八郎、鈴木榮市、中津川政藏、我妻新平（以上米澤）高橋堅治山本雄次（以上南郡）菊地周作、山口孝一、森甚助、石栗信義（以上東郡）江口庄藏、梅津茂、鈴木忠一、淺部德太郎（以上西郡）

米澤有爲會東京支部總會

久敷中絶之姿となつて居りました東京支部總會は在京會員有志の熱心なる希望と主張とによつて去る十月卅日に總會準備會を開き波多野深造氏を座長に推し協議の結果十一月廿日を以て總會期日と極め支部の會員に此旨通知を發する事に取運びました。愈當十一月廿六日午後二時日本橋室町三ノ三米澤織物工業株式會社東京支店四階に於て正式に同支部總會の成立を見、出席五十余名にて元東京支部長香坂昌康氏を議長に推し東京支部規則の改正、同役員の改選並に東京興讓館再建に關する件を議題として左の

通可決致しました。

一、東京支部規則第一條　評議員十五名を若干名に、第十五條　維持會費年額五圓を五十圓に改正

二、役員の改選（別記之通）

尙評議員の互選により支部長に加勢清雄氏、副支部長に加藤榮二氏を擧げた。次で加勢支部長及加藤副支部長より就任の挨拶あり、加勢支部長香坂氏に代つて議長席に着き興讓館再建其他種々協議懇談の上和氣靄々の裡に午後四時半閉會した。

當日決定の役員左の通り

記

米澤有爲會東京支部長　加勢清雄

副支部長　加藤榮二

評議員

椿榮、上杉隆憲、大國岩太郎、加藤八郎、舟橋清、山森茂四郎、林逸良忠、加藤正男、近藤英次郎、色摩新一、岡田文雄、後藤宇太郎、小林辰雄、鈴木千代翁、加勢忠雄、三段崎俊吾、星野順一、田中敏雄、加藤榮二、加勢清雄、相田岩夫、宇佐美洵、波多野深造、高野大輔、中澤進、山口政男、高橋通利、高野源次郎、安藤榮吉、本間敏雄　（以上三十名）

理事

高橋英二（庶務主任）、藤田士郎（會計主任）、矢作英雄、岩木信孝、小森力雄

東京支部新年會記

戰時中戰後の混亂期の間わが有爲會も中絶の形となり、會員相互の連絡もつけ得なかつたが昨年八月米澤に於て戰後第一回の總會を開催し、以來會員の消息も逐次判明して來り、東京支部も再建準備員を決めて支部確立を計つて來た。

ついで今年一月廿二日を期し支部總會を開催することとなり、當初參集人員も四十名せい〳〵と思ひ會場を米澤織物工業東京支店の會議室を拜借し通知した處、參會者豫想以外に多く當日になつて場所狹少となり、にわかに東洋經濟新報の大ホールに變更の止むなきに至り關係者一同嬉しい悲鳴をあげた次第。

定刻午後二時、司會者支部長加勢清雄氏開會の挨拶を述べ本部香坂副會長の祝詞並に挨拶あり、次に宇佐美總務部長の再建途上の有爲會の活動經緯、就中興讓館再建の計畫の說明あり、終つて懇親會に入り各グループ毎に久濶を敍し各所に懷舊の花が咲いて閉會の定刻も再三延長して尙歡談の名殘はつきな

かつた。更に錦上花を添えて有志の酒肴並に遙々郷里より餅の寄贈等あり一同を感激させた。午後六時過ぎ盛會裡に閉會。

參加者芳名左記

舟橋 清、武田鴻吉、上村格造、長尾景德、目賀田正一、青柳清
相田興市、加藤勇二、星野順一、石澤修一、中島 武、薄木 進
遠藤長德、香坂隆昌、大國岩太郎、宮 信一、高橋岩太郎、山下
欽哉、本間敏雄、岡井二郎、金澤忠一、岡田文雄、波多野深造、
上杉隆雲、色摩新一、石山靜雄、中西忠義、安原登理、北村德太
郎、西野忠次郎、上野幸雄、森谷 浩、田中俊藏、高橋通利、齋
藤 清、山口政男、加勢清雄、加藤榮二、香坂昌康、齊藤 鐳、
小幡常夫、近藤英次郎、舟橋 榮、須貝亀壽雄、加藤八郎、黒金
泰美、丸山英一、宇佐美 洵、高野大輔、杉屋嵐雄、中澤 進、
下村正助、小林一郎、小林辰雄、櫻井凱夫、安藤榮吉、羽鳥好太
郎、栗田秀雄、古藤 麟、島津秀雄、高橋仁一、本間利雄、青柳
六一郎、

學生

高橋 宏、佐藤二朗、我妻迪雄、椿 嘉彦、岡 道雄、藤田士朗
中川謙吉、小森力雄　（以上七二名）

仙台支部だより

戰時中あの狀体から自然支部の活動も休止の有樣でした。然して二〇、七、一〇の大空襲に依つて美麗な森の都仙台の街は灰燼に歸しました。續く敗戰終戰の混亂から支部の運營も手に付かずに居りましたが仙台興讓館の再建問題を機會に本年六月役員會を開き支部陣容の樹て直しと仙台興讓館の復興に邁進する事を決めました。

一方興讓館は九里館長監督の下に空襲まで二十數人の舍生で經營して居つたのですが戰災と共に舍生は四散しました。一時市内長町の舊軍需工場の一部を借り受けて名のみの興讓館の共同生活を始めましたが持主の都合で追はれ又々舍生は居所を失いました。茂を負ふて上仙する郷里の子弟は下宿を得られず苦しみました。戰災前の興讓館生活を懐古し何とかして館の復興を計り同郷水入らずの生活下に學問にいそしみ度いと云ふ在仙學生の熱烈なる希望は涙ぐましいものが有りました。勿論私共先輩も其の必要を痛感し殊に物價狀勢から後れるほど不利なりとして七月仙台興讓館再建の實行案を作成し三原庄太、氏江富雄、新藤學生三名上京して東都最高幹部各位と會見申上げて具申致し其の後米澤に於ける總會の歸途加勢、相田兩先生御寄仙の上現場御檢分を得て愈々實行に取り掛りました。十二月も密くならぬ中に落成せしめ學生を入れて郷土精神米澤魂の其の勉學振りを見るのを樂しみ居る次第であります。

支部の樹て直しと興讓館の再建で今の處先輩と學生協力で寄附の御願やら入會勧誘會費の徴收やらと大變であります。之れが一應濟んで館が出來た上は在仙米澤人全員會同して米澤式に質素ながら嚴肅な落成式を擧げ祝盃をあげて仙台支部の前途米澤人の前途を祝し度いと考へて居ります。

（三原庄太）

仙台興讓館落成記念式

仙台興讓館は地元仙台支部格別の御努力により東京興讓館より一足御先きに見事完成を見四月二十九日上杉神社遙拜式及支部總會を兼ねて落成式を擧行された。

京都支部便り

今次大戰と敗戰に依り米澤有爲會の如き財團法人組織の會が潰滅に瀕するのも洵に止むを得なかつたことでありませう。然るに其後米澤有爲會再興の機運が有志各位の御努力に依り結ばれ、今回新たに雜誌再發刊の運びに至つたことは、洵に御同慶の至りと存じます。

當京都支部は甚だお恥しい次第でありますが、非戰災地であり乍ら昭和十八年一月に、役員の改選が行はれ、昭和十九年四月二十九日の上杉神社遙拜祭の總會を最後として全く立消えの狀態となつてしまひました。

嘗ての全盛時代には當支部の會員も七十余名を算へ、毎年一月には新年會を、四月には上杉神社遙拜祭を、十月には松茸狩等盛大に催し、何時も和氣靄々裡に同鄕人の親睦を厚くして參つたのでありますが、戰爭が苛烈となるに及んで轉職者、疎開者或は應召者が續出した爲め、終戰當時は支部會員も凡そ半減し其の後、復員者、海外引揚者に依り幾分增加して現在では五十余名となつて居ります。

今年春本部より要請がありましたので取敢ず暫定的名簿を作製し本部へ送附致しましたがこれとて不備の點が多々あることを御詫び致します。其の當時現役員が集まり役員改選と終戰後最初の總會開催の議が起り協議しましたが兎角現在の甚だしきインフレの荒波に於ては生活に追はれるお互ひであり且つ當支部の基本金も十圓足らずといふ狀態ではどうにもならず結局暫く時期を待つことゝし役員も昭和十八年以來の其のまゝで現在に至つてゐる次第であります。

次に當支部に於ける最近の動靜につき筆者の知限りに於いて御知らせしたいと思ひます。

先づ當支部の評議員として元老たる靑柳一太郎氏及矢野仁一氏、小山駿二氏、野原三郎氏等は第一線を引退し悠々自適されて居ります。小野茂平氏は相變らず益々元氣旺盛で產業の第一線で采配を振つて居られます。そして今度米澤有爲會の相談役に推薦されました。又神居琳應氏は七十幾歲の高齡で極め

て達者、宇治平等院の住職に在られます。一方大瀧新之助氏、櫻井清秀氏は既に故人となられました。

故小西重直博士が京大在職中は京大教授が五、六名も居りましたが現在では高橋酉藏博士と槇山二郎博士のみです。小泉源一博士も京大を退いて著述の方に專念して居られると聞いて居ります。

次にニューフェースですが滿鐵中央試驗所から昨年春引揚げられ第一工業製藥の技師長兼研究部長の猪口金次郎博士が居られます。それから海軍から京都洋傘の專務となられた和田五郎氏があり、近年藥學博士の學位を得られ京大藥學科の助教授となられた西海技東雄氏があり現在藥學界に氣を吐いて居られます。何れも次の評議員に推薦されるべき方々です。

「國敗れて山河があり」宜哉京都は人家草木總て昔の姿そのまゝであり春秋名所舊蹟を探るに決して失望を感じることはないであろうが、敗戰の影響は全國隨一の物價高の所となり、從つて闇の溫床地ともなり或は犯罪の横行、人情の稀薄等日本人に關する限り歎息を洩さざるものあらんやと言ひ度いのです。只外國人の觀光都市としてのみ現在の京都は殘つたのであると言へませう。

日本再建の第一歩は國民道義の昂揚であります。鄕土を想ひ、自己を反省し、先輩を敬ひ後輩を愛し導き、業を興すこと、これ眞に鷹山公の精神に相通するものがあると考へられます。

此の意味に於て當支部の再興も早急はやらねばならないのでありますが諸種の事情の爲め今日に至つてゐることを深く御詫び申し上げます。尚現役員は次の通りであります。（曾我記）

支部長　小山駿二氏
副支部長　高橋酉藏氏
庶務主任　西海技東雄氏
會計主任　曾我二郎氏

札幌支部近況

更けるに早い北海道の秋九月二十六日早朝、一台の貸切バスが密雲に掩はれた廣漠な石狩平野を、北へ北へと走つて行く。ポプラ並木の黄葉を配景に、

高いサイロの立つ赤屋根の牧舎の、繪のような影色をそこゝに散見し、潮のように廣い石狩川の曲折を右に見ながら、一路行程七里、石狩町に着いた時には冷たい雨となつていた。

米澤人の家族會が、支部長である石狩病院長鈴木信三氏の招待で、本場の鮭獵の見學を兼ね、實に數年振りに催されたのである。

參會する者老幼六十五人、曹洞宗のある寺の本堂に通されて、支部總會を開き、型の如く事務報告から新役員の改選を濟まし、鈴木支部長から鮭獵の概況の說明があつて、雨の小止みの砂路を河口の漁場に案内され、引き網作業を見物する。見る程に多數の漁夫がエンサヤンサのかけ聲に揚げる網の中には踊る三尺の鮮かな銀鱗數十尾、往年の豊獵の面影はないが、何づれも近くの札幌に住みながら、見るのが初めての人達ばかり、珍しがり美しがり、讃歎の聲が期せずして發する。一網二網、揚げられた鮭は傍の工場に運ばれ、腹を裂かれ塩をまかれて、名産本場の「あらまき」となつて送られ、遠く内地の人々に喜ばれるのである。

またも降りしきる秋雨の中を會場に歸れば、準備萬端整い、食膳の上には鮭のひ頭の膾、大きな切身のフライに燒肴、それに名物の石狩三平汁と一切が鮭料理、酒盃を傾け秋の味覺を腹一杯に滿喫して、長い間の耐之生活から解放された思い。久　振りの家族會とて、舊知もあるが新顔も多く、醉顔の中にお國訛りの自己紹介宜しくあつて、自慢の蔭し藝に歡談時を久くして、和氣あいあい、その間に配ばられたのは、支部長の好意になる紅白の大きな甘い大福餅、思うもかけぬ贈物であつた。

何も彼にも珍味ばかり、一同時の過ぐるのを忘れ近野顧問の斡旋による「あらまき」を土産に、また來秋の再遊を待つとの支部長の挨拶を終に、歸途に着いたのは五時半、一日の行樂に歡を盡し、何れも支部長の絶大な好意を感謝しながら、雨の中を札幌驛で解散した。

幸に燦擊の劫火を被ることが少かつた北海道も、二ヶ月に亘る食糧の缺配や、石炭缺乏に依る耐寒の苦惱等、戰後の慘禍の方が大きかつた。そのために

冬期は學業も全く休講となつたので、興讓館寮生等は歸郷もせずに、嚴冬中アルバイトに從事し、學資の大部分を自ら稼がねばならない苦境に陷つた。

それやこれやで支部會も有名無實、本部との聯絡も絶えることゝなつたが、次第に復活の氣運が燃え上り、二十二年九月の總會に遠藤喜四郎支部長辭任の申出があり、時世に適應した新役員には新進氣英の壯年者のみの就任を見、支部長に長老鈴木信三氏を推戴し、會務の復興に努めることゝなり、左の諸氏が當選された。

支部長　鈴木信三
副支部長　鈴木一平
興讓館長　佐藤哲雄
評議員　上泉三郎、長谷川吉郎
安孫子晰、近野學
登坂三夫、上村重信
理事　平賀雅夫、堀江道雄

別に年輩者で會歴に明るい遠藤喜四郎、土佐林義雄の兩氏を顧問に推すことゝなつた。

新支部長鈴木信三氏を迎へて十一月三日、興讓館に於て秋委大會を開いた。粗餐微酒ながら、戰後初めての集會とて歡談暫く、支部員家族の親和を密にすることが出來た。

越えて二十三年五月十六日、北大植物園に於て春委大會を催したが、各自菜園の播種に多忙な折柄とて、集會者も割合に少かつた。その席上秋委大會を石狩に指定するとの支部長の申出があり、今回の石狩行大會となつた次第である。

その總會席上改選された新役員は左の諸氏である

支部長　鈴木信三
副支部長　鈴木一平
興讓館長　佐藤哲雄
評議員　安孫子晰、上村重忠、近野學
登坂三夫、中山信一郎、冲田利夫
上村重信
理事　平賀雅夫、冨岡由夫

更に新に近野康吉及び大橋登吉、佐藤甲八、加藤伊兵衛、山路三郎の五氏を顧問に推すことゝなつた

札幌支部創設當時の會員には小數ながらも、樞要な地位あゝ高官がをられたが、何づれも在官の期が短かつた。その多くは下級官吏や學生であつたが、

爾來二十年、當時の少壯者が夫れ〳〵重要な地位を占めて、各方面に活躍していることゝなつた齊々多士、今は堅實な歩みを續けている。それに戰後の興業界は石炭の王土北海道を目指して、續々事業を企畫しているので、同郷人の來住も多く活躍も一層華々しくなり、支部將來の隆盛は期して待つべきものがある。やがては札幌に限らず、北海道各都市に散在する同郷人を一丸にして、北海道支部となる氣運も、近い將來に見ることであろう。

戰後の食糧事情と交通不便から、自づと學區が制限されることゝなり、郷里から北大に入學志願する者も少くなり、興讓館入舍生も米澤中學出身(●)は至つて少く、郷里出身者の子弟(○)を以てもなお滿すに足らず、經營困難の立場から、支部員の緣故、紹介の學生入舍を當てて、現在左の十名、窮乏の折柄日夜勉學に努めている有樣である。

工學部學生　成田俊雄
法文學部學生　○堀江道雄
醫學部學生　昔農輝夫
工學部學生　○冨岡由夫
農學部學生　○平賀雅夫
醫專生徒　○井上昭男
豫科生徒　菅森利三郎
同　●今井和夫
同　○井上和夫
同　加藤哲朗

なお産業發展に從ひ、今後札幌へ新任、轉任又は出張される方々も多數にあることであろう。住宅拂底の折柄、それらの人達の假の宿舍として、興讓館の空室を提供することも時機に適した措置と思ふ。來札の方々には遠慮なく、御利用を待つものである。

昭和二十四年
米澤有爲會定時總會開催の件

來る八月十四日午後二時本會定時總會を米澤臨泉閣にて開催、終つて懇談會に移りますから何卒多數會員の御出席を希望致します。

東京興讓館便り

一

舊淀橋區 元陸軍射撃場側の二階建の寮からは毎朝三十名近くの學生がそれぞれの學校へとコンクリートの塀の中から出掛けて行つた。それが有爲會寄宿舍東京興讓館であつた。省線電車の騒音からも程遠く、かしましい自動車道路から少し入つた小路は人影も疎に學生生活には絶好の環境にあつた。大部分有爲會有志の寄贈に依る心の糧が、會堂の幅三間四段になつて居る陳列棚に一寸の隙もなくぎつしりと背をそろへ、思ひ思ひにその中から一冊二冊と借り出しては讀みふけつた。小春日和の日曜の午後にはテニスコートではボーン〳〵と戸山ヶ原の空にボールのラケットに彈ねかえる音が和やかに溶け込んで行き時折ドッと觀衆がどよめました。又夜長の秋の深更一時過ぎ迄燈火のもれて居る部室も少くなかつた。併し昭和十八年、十九年と戰爭が苛烈の度を加えるに從ひ出陣學徒〇〇君、通年動員〇〇君の爲にと大書した旗の下興讓館に於ても次々と時ならぬ送別會が開かれた。間もなくテニスコートの半分は都の防火用水プールと姿を變へ又殘りの半分は防空壕、野菜畠に衣裳替した。二十年の初、針生館長は一身上の事情に依り館長の職を辭され、舍生は東京高師の島津先生を新館長に迎えた。新館長の下興讓館の氣風も一變し、漸く苛烈の度を加えた空襲の、勤員の、勤勞奉仕の間隙を良く捉へて舍生は學理の探究に躍動して居た。併し其の年の新學期を迎へた早々の四月十三日の夜戰災は遂に我々の頭上に覆つて來た。當時興讓館に居た舍生は十數名、相憎く其の日は館長は歸省中にて不在であつた。その指揮不統一の中に有りながらも舍生一同は興讓館護持の爲ポンプをつく者、荷物を運び出す者、人にては不可能と思へる程消火に盡力したが强風にあふられて一面から押し寄せる猛火に隣家が包まれた時絶對的威力を持つ或る筋の命令に依つて一同退避を命ぜられ、振り返り〳〵絶へなき未練の瞳を猛火に包まれてゐる興讓館の姿にそゝぎ乍ら劫火の中を縫ひつゝ安全地帶へと避難した。翌朝安全地帶からの歸路には廣漠たる燒野原の中に興讓館のみがポツンと殘つて居る樣な錯覺の自己慰安を等しく胸に抱いて昨夜の敢闘に疲れた身體を興讓館へと運んだ。そこはまだプス〳〵と煙を立てて昨夜の有樣をまざ〳〵と物語つて居た。各自の部室だつたと思われるコンクリート土台の上に興讓館を燒失したと云ふ努力の足らざる自責の念と興讓館を失つた寄邊ない哀愁とに意識を失つた人間の樣に呆然とたたずんで互に一語も發しなかつた。

二

西大久保の興讓館が戰災に逢つてから、館長初め舍生諸君の盡力に依り、殆ど壞滅の危機に瀕しながらも良く空襲下の帝都に踏み止つて、世田谷上馬の遠藤達氏の宅を借り受ける事になつた。不自由ながらも戰時生活が再現したと思ふ間も無く戰爭は悲しむべき結果に終つた。

學生は再び懐しの門をくゞり興讓館も元の明朗さを取戻した。

廿年十一月大小十室の興讓館新生第一歩たる委員改選を行ひ、館長を中心に舍生十七名は今後の興讓館發展への希望を語り合つた。此の間、舍生は勉學の餘暇をさき、リヤカーを引いて芋の買出しをやり、又月一回位歸省して米を運び苦しい食生活を繼つて來た。

晩秋の一日、有爲會理事會が當興讓館で開かれ、理事諸氏に興讓館復舊等に付いて御話をうかゞひ、舍生一同希望に滿ちて勉學にいそしんで來た。

かゝる中に終戰最初の正月も樂しく送り、敗戰當時の絶望狀態より漸く起ち上つて學生の本分に努力しつゝ有つた舍生の頭上に、突然意外な報せが舞込んで來た。それは館長、舍生の力に依つて戰災から守り、漸く今日まで盛り建てゝ來た興讓館の立退きを要

求されたので有る。

現今の住宅難に下宿の當も無く、一同協力して寮を探したが、種々の障碍に依り實現しない内、暑中休暇となり歸省する事となつた。

在米中も舍生會を開いたり、有爲會の諸先輩に御願ひしたりして、種々手をつくしたが無効に終り休みも終り上京して見ると興讓館は既に他人が入つて居り、舍生の荷物は一室に積上げられ寢る場所も無く、玄關室の三疊に五人も寢る樣な狀態で有つた。此の時、以前より色々と御世話下された有爲會員の永井忠兵衛氏が米澤に移轉せられる事になり、御宅を御借し下さる事になつた。

やはり世田谷上馬の一角で八室有り、近くに綠に覆はれた丘が見え學生寮としては絶好の場所で有つた。

十月一日移轉を終り、室不足の爲館長は他に移られる事となり、館の運營は有爲會の指示の下、舍生の自治寮として進む事となつた。總代を中心に庶務、會計委員を置き、此處に三度、興讓館の發足を見るに至つたので有る。

三

舍生はやつと腰を落着けて勉强出來る樣になつた事を感謝し、和氣に滿ちて元氣良く各自の學校へ通つた。前の寮母は止し未だ後釜が見つからなかつたので、尙もずつと心掛け見つかる迄自炊をやる事に成り、大體部屋毎にバタ〳〵團扇を扇ぎながら、雨降の日なんかは傘をさして燃えない薪に涙を流しながらも、ともかく寮が求まつた事を幸とし翌二十二年の四月迄手際の惡い不自由な自炊生活を續けた。

永井氏宅に移轉して間も無く良く晴れた日曜の午から有爲會理事の方々が新興讓館に御參集なされ、之からの方針や生活や館内充實の爲めのお話し合ひをして下され、舍生一同益々心强くし館の繁榮を希つた。

次の年正月には赤潟に一同集つて飲み交し之からの興讓館生活に益々明るさを期待し今年も一緒に勉學する事を語り愉快に雪の中で一日を過した。

四月に前の興讓館の隣組長安部さんの御世話で世帶持ちの寮母を求め之より内食となり、足りない所は各自補ひ食事の方は先づ保證され舍生の負擔が輕くなり尙一層落ちついて勉學出來る樣に成り學生寮の面目を得た。とうしてゐる中に夏休みとなり八月に舍生の最大の恐怖、館の明渡しを亦も要求され一同がつかりし今度こそ存續は困難と考へ下宿深しに頭を惱す事となつた。

二學期に上京し大體が他所に行く所が無くて集つてゐる現在の舍生は、あらゆる方面に手を張つて下宿を求めたが世相の通りチョッとは見つからなかつた。若しあつても新圓成金でもなければ出せそうもない權利金を要求されたり負擔し得ない程の條件つきだつたりして現在行先の確定してゐる者二、三人の他大部分は努力をしつゝも求められず現在に至つてゐる。尙寮母からも行先を求められても自分一人も始末も出來ないでまして學生の力では御世話も出來ず、若し有爲會の方々にお心當りでもと考へ御願ひしてみる積りである。食糧難、生活難停電、住宅難、この現實と鬪ひながら舍生一同、熱と力で勉强しつゝも木枯し吹く今日敗戰、戰爭の犧牲者といふ事をひし〳〵と身に迫り感じて居る。

仙台興讓館便り

（雜誌中絶後最近までの寄宿舍動靜）

「有爲會雜誌中絶後の仙台興讓館の動靜について」請わるゝまゝに小生が書くことにした。書くと言つても自分と館との關係は余りに淺過ぎるため御期待に副ひうるかどうか判らない。自分が館に世話になつた始めは昭和十六年の自分の浪人時代である

その頃の館長は「氏家富雄」先生。支部長は「佐藤信定」閣下であつた。

この年の秋、始めて米が配給制度となり明日の米に窮して先輩の家に頂きに行つた

ことを思ひ出す。年暮れ年改り喧噪の中に小生は山形に行き十九年秋再び館にかへつて來た。

その間、館は大きく變動して居た。氏家館長は朝鮮の中學に御榮轉になれ「伊藤政治」先生が館長になられて居た。テニスコートは畠に變つて居た。戰爭は下り坂になり、道行く人はすれ違ふ人に目が止まらなくなつて居た。

二十年の一月伊藤先生が旭川に御榮轉、代りに「九里尙知」先生が館長になられた。櫻咲く頃、舍生はねむい眼をこすりながら防空壕の改造に畠耕しに苦しみの中に樂しみを見出してゐた。夜毎にくる警報の中に……。七月十日、仙台大空襲の際、館は燒かれてしまつた。館燒失後、約二週間舍生は舍の近隣四軒に分散生活をした。間もなく舍の西隣の高根さんの家を借りることにした。

六疊、四間、八疊二間の家だつたが、二十人の舍生では勉强が出來なかつた。

終戰を知つたのもこの家でである。舍生は唯譯もなく泣き入つた。

苦しい忙しい生活の中に再建へと努力の結果、十月始め長町に寮を見付けた。始めは全部借りるつもりだつたがいざこざの末、寮の二階(部室數十四)のみ借り食事は寮管理人に任かせることになつてしまつた。十月六日移轉の時は喜びに顔をほころばせ二里餘の道を大八車で疲れを知らず荷物を運んだ。

しかし學校に遠いこと、工場地帶の眞中のこと、他人任かせの炊事で自由の利かぬ冷い食生活、一階と二階とに分けたとは言へ他人との同宿、これらは舍生の理想を奪ひ取り次第に幻滅の淵に押しやつた。それに寮管理人の强要もあつて二十一年三月末涙も出ない離散コンパに館を閉ち舍生はバラ〳〵になつてしまつた。

バラ〳〵になつて舍生の逢ふ毎に再建を語り再建を夢見た。偶々、今年の六月、舊興讓館敷地の賣買問題を耳にして驚いた。事情を聞けば尤もと思つたが協議の結果、破談として貰つた。

その後、あの敷地を賣る位なら他所に小さくとも家を買はうと話して居た所、「あの七百坪の中、二百坪、讓つて下さるならばその金で五〇坪の寮を二ケ月位で建てゝあげませう」と言ふ人が現れた。口重い人の曖い言葉であつた。

これを逃してはと思つて支部長さんを通じて東京の本部に便りを出した。氣の早い舍生は下宿をはらつた人もあつた。しかし返事が來ない。理由の如何を問はず無視された事だけは遁ひない。自然その話は解消してしまつた。

この秋、舍生が集つて國見峠に芋煮會をやつた。自分達の居る間になんとかしたいと言ふ。話のある度に市役所に行き縣廳に行き案を樹てゝ見る。

相變らず東京からはなんのこともない。返事位よこしても良さそうにと意味のない腹を立てゝ居る。館の跡は今、館長さんの畠になつて居る。下宿が近い關係から時々行つて御手製のものを御馳走になる「館長さんは務らないが百姓さんは務りそうですね」。こんな惡口も言つて來る。

舍生は一日も早く館が再建され再び相集る日の來ることを心から念願して居る。

(追記)仙台興讓館のことを知つて居る人は、誰でも館を思ひ出す度に炊事の小母さん〃高橋トクゞさんを思ひ出す。小柄な堅氣な小母さんだつた。

その小母さんはこの四月亡くなられました。悲しみと追憶とを共にしたいと思ひこゝに謹しんでお知らせ致します。

札幌興讓館便り

會誌再刊の御盡力を心より感謝致します。當札幌興讓館では雜誌發行當時の先輩は皆卒業され、現在の處新入ばかりの狀態で從つて寄宿舍の動靜も判然としてゐるのは最近の事のみです。

戦爭中札幌は幸ひに空襲もうけず又建物疎開にもあやふく厄をのがれ東京、仙台の興讓館燒失の現在札幌興讓館のみ昔のまゝに殘つてゐるわけです。

戰爭以來交通不便、食糧不足等種々就學不便の爲米澤より來る學生が少く寮生の知人、友人等を入れてどうやら人員を整へ寮を維持して來た樣な狀態です。

昭和二十一年四月以降の寮生の活動をかいつまんで申上げますと先づ二十一年には最初の秋季園遊會を開催すべく先輩上村重信氏、星勝之助氏等の下、寮生一同着々その準備を進めたのですが種々の條件整はず遺憾ながら開催するには至りませんでしたそれ以來これ等の備物の計畫も社會の混亂にまぎれて立消えの形になつてまゐりましたが、今秋十一月三日米澤人有志の方々の御協力を得まして當興讓館に於て米澤人懇親會を開催しました。幸ひ四十名近くの方々の御出席を得終戰以來初めて和氣靄々の裡に故郷の思ひ出話にふけりました。

次に學生の狀態ですが二十一年四月當時上村氏以下九名の學生が居り終戰當時の混亂の裡に學生々活を送つて居りました。今年四月に興讓館中學出身今井和夫君（北大豫科一年）を迎へ清新の氣を振起してゐます。今秋は卒業生多く星氏、佐藤氏、栗田氏兄弟の四人を送り一時閑散たるものがありましたが米澤出身の井上和男（北大豫科一年）、富岡由夫（工學部一年）を迎へ現在七人の人員で和氣靄々寮生活を送つてゐます。

今年は石炭の配給が少く炊事に使ふのみで暖房用石炭皆無の爲寮生一同さむさにふるへてゐます。それでも北海道名產の南瓜に類を黃色にして研學に邁進してゐます。何處も同じでせうが生活費の昂騰に學生の生活も容易ではありません。一日も早く自由に勉强の出來る時代になるやう切望してやみません。

尙最後に興讓館中學からもつと〳〵多數の米澤健兒が北大に入學される樣寮生一同心よりお願ひします。エルムの學園に絶えて久しい米澤魂のお國自慢が飛び出す日を首を長くして待つてゐます。

では粗略ですが最近の寄宿舍の動靜についてのお知らせ此の邊で擱筆致します。

十一月十一日　札幌興讓館委員
平賀雅夫記

編輯雜記

重要國策でなければ紙を使ふのは勿体ないで時を過した内に今度は會の財布の價値減で雜誌を出すのが容易でなくなつた。然し何んと云ふても主原因は編輯者の怠慢の罪、久しく中絶せしめた點、又今日にも發行する樣投稿御願ひしながら遲延した點厚く御詫び申上げる。類燒を免れ東京に在住するの故で編輯など引受けて見たものの戰後の東京の活動の困難にはほとほと困つた。香坂、加藤兩老先輩、相田、宇佐美兩理事の會務勉勵には驚く可きものあり、漸く引きづり廻され怒馬に鞭打ちはするもののどうもならんで手を擧げざるを得ないかと迄考へる。

或る藝術雜誌を主宰する自分が今度の此の會誌―何んと見ても御座なり的―のものを以つて會員にまみへるのは誠に殘念至極であるが是れも時世時勢と我慢して戴きたい。

今度總會で定款改正、時代に合ふ樣會費を更正して戴き更に秋口は希望の東京興讓館落成、本會の神經中樞が出來上るのを待つて新進氣鋭の若き學徒の援助を得て、捲土重來、往年の同郷同人雜誌としての使命を完し諸兄の期待に添はん事を念願致します。就ては尙暫し寛恕あらん事を。

何事を置いても戰後會員の思潮なり消息を御傳へ仕度いと存じましたが今回は殘念ながら其の餘裕ありませんでしたが、秋には名簿發行の段取りになつて居りますから其の折りに努め度く存じます。其れにつけても各種の書類燒失のため目下手を盡して各位の御起居を伺つてますが仲々手順充分と申し兼ねます。會員各位は昭和十六年發行名簿後御變りのあつた御存じの方々の氏名、新舊住所、新舊御職業を極力本會事務所宛御通知被下ば幸甚至極です。（北村記）

昭和二十四年八月五日印刷
昭和二十四年八月十日發行

（非賣品）

東京都中央區日本橋室町三丁目三番地
米澤織物工業株式會社内
編輯兼發行人　北村德太郎

東京都千代田區神田駿河台三ノ七
印刷人　清水長晃

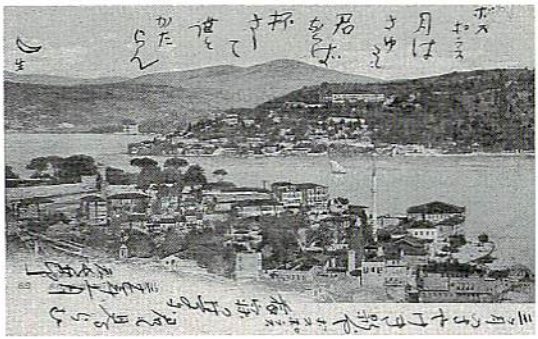
東京都千代田區神田駿河台三ノ七
印刷所　清水印刷所

東京都中央區日本橋室町三丁目
米澤織物工業株式會社内
發行所　社團法人　米澤有爲會

特別寄稿（二）

伊東忠太のトルコ旅行と米沢有為会

美術史家　ジラルデッリ青木美由紀
ボアジチ大学 イスタンブル（トルコ共和国）



ボスポラス　月はさゆるも　君なけば
杯さして　誰とかたらん

三カ月の　さやけき影や　ボスポラス
旅寝の村家に　君も見るらむ

ボスフォラス海峡と月のイメージに、鮮やかに彩られたこのふたつの短歌は、「君」の不在を嘆く。しかしこれは男女の相聞歌ではなく、かつて杯を傾けて語り合い、いまは旅路にある友を思って詠んだ、男同士の友情の歌である。一九〇四（明治三十七）年十一月三日、イスタンブルにいる山田寅次郎（一八六六―一九五七）から、その日ベイルートに入ったばかりの伊東忠太（一八六七―一九五四）にあてた絵葉書に、記されたものである。

米沢有為会の創立メンバーのひとりであり、東京築地本願寺の建築家として有名な伊東忠太は、一九〇二（明治三十五）年から〇五年にかけて、三年三ヶ月におよぶ世界旅行を敢行した。法隆寺建築の起源がギリシアであるとの自説を証明するため、ユーラシア大陸を跨いでの建築調査大旅行だった。正式の留学先は「中国・印度・土耳古」と当時の文書にあるが、東京帝国大学教授になるためには、西洋への留学、「洋行」が不文律だった時代のこと、トルコのあとに欧州と米国を付けたし、世界一周となったのだった。あまり知られていないが、現在『伊東忠太建築文献』の最終巻「見学・紀行」に収められているその見聞は、忠太が旅先から同時進行的に原稿を送った「米沢有為会雑誌」が初出である。[i]

「米沢有為会雑誌」へ原稿を書くかたわら、トルコでの忠太は、当時イスタンブルで貿易商「中村商店」の支配人を務めていた前出の山田寅次郎と、じつに頻繁にやりとりしている。山田寅次郎は、一九世紀末、明治天皇へ差し向けられたオスマン帝国軍艦、エルトゥールル号の海難事故の義援金を持ってトルコへ渡り、十数年間イスタンブルに滞在して日土民間外交の草分けとなった人物である。現在日本建築学会所蔵の伊東忠太野帳によれば、忠太がイスタンブルを離れてオスマン帝国国内を旅行した、一九〇四年七月三十日から十二月十五日のあいだのみでも、忠太から寅次郎へ五十五通の書簡と電報が発送されている。[ii] 最近行われた調査によれば、山田家にも忠太から寅次郎宛ての絵葉書が相当な数保存されていることがわかった。通信は、忠太の帰国後もずっと続き、寅次郎の一時帰国中、大阪で再会したりもしている。忠太のトルコ旅行中、寅次郎は、あらかじめ忠太の旅程を聞いておき、日本からイスタンブルの中村商店に届く伊東忠太宛ての郵便物を、行く先々の英国領事館気付で取り次いでもいる。やりとりされた絵葉書の、「雑誌送る」「雑誌受け取った」というなかに、彼自身の旅行茶話が載った「米沢有為会雑誌」も入っていたに違いない。当時、月刊で発行されていた「米沢有為会雑誌」には、口語体の洒脱な筆致の旅行茶話が、執筆の日付から約二ヶ月遅れで断続的に掲載されている。

忠太の世界旅行は、一九〇二年三月二十九日にはじまる。東京新橋を出発、広島へ向かい、宇品から海路天津へ渡り、そこから至近の北京へ。大同、甘粛、洛陽、西安、成都、重慶、武漢・・・と続く中国内陸の旅ののち、南下して貴陽、昆明、騰沖を経由し、ビルマ（現在のミャンマー連邦共和国）領土に入り、バモー、マンダレー、パガンそして海港都市ヤンゴン。船路カルカッタへ向かい、仏教遺跡からはじめて、インド北部南部の主要都市を丹念にまわる。アフガニスタンを抜けて陸路イスタンブル入りするはずだったが、日露戦争前夜のこと。ヴィザが降りず、仕方なくボンベイから海路イタリアのトリエステへ、ベルリンに医学留学している兄祐彦と待ち合わせ、その後鉄道で東欧経由でイスタンブルに入ったのは、すでに二年以上が過ぎた一九〇四年五月八日のことだった。途中、東欧旅行中に日露戦争が勃発するが、戦争下、ロシアの宿敵オスマン帝国の国内で過ごしたことは、忠太にとって好運だった。当日兄宛に書かれた絵葉書には、「十月までをここを根拠地と居し候」と書かれ

ているが、実際には八ヶ月以上をオスマン帝国で過ごすことになる。一九〇五年一月二十四日にギリシャのピレウス港よりイタリアへ向かう船に乗って以降は、イタリア、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカ合衆国を走るように経由して日本へ帰国した。

忠太の旅程は、興味の度合いや現地の事情により長短がある。おおまかにいえば、中国：一五ヶ月、インドとその周辺：一〇ヶ月、欧州・米国：あわせて五ヶ月である。これをみれば、エジプト・パレスチナを含む当時のオスマン帝国領土内での八ヶ月強の滞在は、かなりの割合を占めている。

イスタンブルに到着した忠太は、ビザンチン時代からのジェノヴァ人の居住区で、当時もいまも外国人が多く居住するガラタ塔近くに早速部屋を借りる。金角湾にかかるガラタ橋を渡って毎日旧市街へ出かけ、この三大陸の首都の建築遺産を研究することになる。後年、本人が告白しているが、さまざまな人種の行き交う混み合ったガラタ橋の上で、スリにやられた事もあったらしい。ベイオウルに店を構える中村商店は、すでにイスタンブルを訪問する日本人たちにとって知られた存在だった。両国がそれぞれに西洋列強と締結せざるを得なかった不平等条約のために、当時じつは日本とオスマン帝国のあいだには正式な国交が開かれていなかった。大阪に本店を構える「中村商店」の次男であり、退役海軍将校の中村健次郎と、その姪と結婚して経営に携わっていた山田寅次郎は、「スルタンの個人的な庇護」という特殊な地位で長期滞在し、貿易事業を展開していたのだった。じつは貿易事業は表の顔で、この特殊な地位は、日露戦争中も絶大な効力を発揮する。対外的には中立の立場をとっていたオスマン帝国で、山田寅次郎らがガラタ塔からロシアのバルチック艦隊のボスフォラス海峡通過状況を監視し、ウィーンの牧野大使に毎日報告の送電をするのにも役立っていた。それをオスマン帝国の上層部が見てみぬふりをしていたというのは、また別の冒険譚。忠太はそれを、同時進行で知っていたはずである。年も一歳違いの三十代半ば、体力も知力も胆力も脂の乗り切った二人が、杯を手に気炎を吐きあう様子は、想像に難くない。二人のあいだに交わされた葉書は、相手を思いやる文面の傍ら、駄洒落の応酬、二人の会話の内容を想像させる戯画など、じつに面白い。伊東忠太野帳に挿まれていたメモをみれば、本業の貿易のかたわら、寅次郎が下宿の世話からスルタン拝謁のための馬車の手配、週末の

遠出の案内人、洗濯屋まで、じつにきめ細かく忠太の世話を焼いていたことがわかる。

忠太と寅次郎の出会いは、イスタンブルだったのだと、多くの人は思っている。しかし最近、忠太のトルコ到着以前にやりとりされた書簡が山田家から見つかり、二人が以前からの知り合いであったことがわかった。群馬の沼田藩の家老の家に生まれ、茶道宗偏流の家元山田家の養子になった寅次郎と、米沢代々の医家の次男として生まれ東京帝国大学で教鞭をとっていた忠太のあいだにどんな接点があったのか。いつ、どこで知り合ったのか。これからの課題だが、その鍵となるかもしれない人物がもうひとりいる。

一九〇五年前後からイスタンブルの中村商店の切り盛りに携わっていたことが知られる、米沢出身の中村榮一なる人物である。姓がおなじことから、大阪の中村商店と何らかのつながりがあるのではと想像されるが、いままでのところ、決定的な決め手はまだ出ていない。米沢市図書館所蔵の郷土出身名士履歴綴　下　所収の本人自筆の履歴書によれば、榮一は一八七八(明治十一)一月二十七日、米沢市福田町一六〇八番地に生まれ、一九一五(大正四)年十二月で終わっている履歴書記載時点での現住所は、大阪府豊能郡岡町桜道三丁目、とある。高橋忠久氏によれば、中村家は代々上杉家の家臣で、司法官中村榮四郎の長男であり、一八九九年十一月、同じ町内で同じく上杉家旧家臣筋にあたる登坂家の次女志げ(重子)と結婚する。

ふたたび自筆の履歴書にもどづけば、トルコへの渡航は一九〇五(明治三十八)年十一月のことで、「中村商店ヲ主宰シテ日土両国間ノ貿易ニ従事スルコト十ヶ年ニ及ブ」。ただし、「其前年三ヶ年間国立スタンブール大学ニ於テ土耳古語及ビ土耳古法制ヲ学ブ」とあり、単純に遡って考えれば、最初の渡航は一九〇二年二十四歳のとき、学生として赴き、一九〇五年に満を持して就業目的で再渡航したと考えられる。一九〇九年四月に「勲四等オスマニエ章」を、一九一一年七月には「勲三等メジデー章」を受けている。

三年間にわたる榮一の私費留学の背景には、さまざまなことが考えられる。

ひとつには、将来的にイスタンブルで貿易実務に携わることを見込んでの訓練である。また、西洋列強の「東方問題」利害の錯綜する要衝の地イスタンブルで、イスタンブル中村商店の本来の持ち主であり退役海軍将校の

中村健次郎の影の任務、すなわち日本を支える諜報活動に役立つことも見込まれていただろう。

忠太のイスタンブル滞在期間が、一九〇四年五月八日―七月二十九日、国内旅行から帰君後は十二月十五日―一月二十日過ぎであることを考えると、榮一と忠太はほぼ確実に、中村商店を媒介として出会っていたに違いない。書簡での親密度を考えると、あるいは、榮一が米沢にいた頃から面識があったかもしれない。そして、忠太がイスタンブルを離れた一九〇五年頃を境に、「米沢有為会雑誌」の会員動静の欄に「土耳古、君士坦堡　中村榮一　Mr. Y. Nakamura C/O K. Nakamura Pera St. Constantinople. Turkey」の文字が見え始めるのは、創立メンバーのひとりで積極的に活動していた忠太から入会を誘われたからだろう。

中村榮一が有為会雑誌に「コンスタンチノープル通信」と題する文章を寄せたのは、一九〇八（明治四十一）年五月二十六日発行の第一八四号である。この年七月には、イスタンブルでスルタン・アブデュルハミット二世の専制に反発し、アジアで初めて発布されたミドハト憲法（一八七八年）の復活を希望するエリート軍人を中心とした「青年トルコ革命」が起こることになるのだが、榮一はその前夜のイスタンブルの様子を、四月一日付でいきいきと伝えている。「本文は伊東忠太先生に送られし書信なれど特に乞ふて掲出せり」と文末に但書があるように、もともと私信として書かれたものであるだけに、懇切な説明や若者らしいぼやきまでもが、二人の親しさを直接読者に知らせてくれる。

話題のひとつとして取り上げているのは、その年十一月に見込まれていたヒジャーズ鉄道開通である。これは、イスラームの近代化を目指すスルタン・アブドゥルハミット二世が、その象徴としてイスタンブルとイスラーム教の聖地メッカを繋がせた鉄道で、諸外国からも注目されていた。忠太は、アフガニスタンからトルコに陸路入れなかった関係上、イスタンブルからのオスマン帝国国内旅行を計画したとき、メッカ、メディナ、そしてバグダッドを含む内陸部を見たいと切望していた。だが厳しい砂漠の旅は、夏は灼熱の暑さに阻まれ、冬はこんどは雪に阻まれて、ついに実現しなかったという恨みがある。オスマン帝国内では、鉄道でアンカラまで行き、キュタフヤ、アフヨン・カラヒサール、アクシェヒール、コンヤなどアナトリア中部からエーゲ海沿岸部に出てベルガマ、エフェス、プリエネ、ミレトス、ディディ

ムを旅行後、イズミルからエジプトゆきの船に乗り、アレクサンドリア、カイロ、上エジプト、パレスチナ、イェルサレム、ヨルダン、シリア、レバノン、アレッポ、アンタクヤ、イスケンデルン、メルシン、アダナ、と東地中海沿岸地方を回った後、エレグリ山脈を越えてコンヤからふたたび鉄道に乗って帰君、というルートをとった忠太だった。帰国後も忠太は、内陸部の旅行ができなかったのを事あるごとに「残念だった」と書いている。それがこんど、鉄道で一気に行けるようになるというのだから、ニュースである。そんな忠太の旅を知っていたからこそ、榮一は、「先生にも茲壹両年の後ち其期を計つて是非御再遊如何に候や」と誘っている。

日土交渉史では山田寅次郎のみが注目されることの多い中村商店の活動だが、「米沢コネクション」が、意外なところでトルコとかかわりをもっているのである。

昨年二〇一〇年は、「トルコにおける日本年」だった。日土の正式国交樹立は、トルコ共和国成立の以後の一九二四年だが、それ以前の交流の歴史のなかで記念碑的な、エルトゥールル号海難事故の一二〇周年を記念してのものである。その行事の一環として、展覧会「新月と太陽：イスタンブルの三人の日本人　山田寅次郎・伊東忠太・大谷光瑞」（イスタンブル研究所、スナ・アンド・イナン・クラチ財団、二〇一〇年十月―二〇一一年二月）が企画された。この展覧会は、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてトルコを訪れたさまざまな著名人のうち、三人に焦点を当てたものである。イスタンブルで貿易商を営み、日土の民間大使の役割を果たした実業家で茶人の山田寅次郎、西本願寺の門主でシルクロード調査の大谷探検隊のパトロンとして知られ、共和国初期のトルコで絹蚕業の事業を立ち上げていたことが近年明らかになった大谷光瑞（一八七六―一九四八）が注目されるのは当然だが、トルコとの関連で伊東忠太が取り上げられることは少なかった。

勲三等メジディ勲章

しかし、この展覧会をきっかけにして、伊東忠太とトルコの意外な関係が浮かび上がってきた。大谷光瑞との建築家とパ

オスマン帝国のスルタンより拝領のメジディ勲章を身につけた伊東忠太の肖像写真。㈳日本建築学会蔵。

れほど親密な関係、さらに、忠太がオスマン帝国スルタンから勲三等メジディ章を授章されていたことが判明したのである。勲章は、もともと米沢市上杉博物館に忠太の他の遺品とともに収蔵されていたもので、カタログには添書のまま「メジデヤ勲章」と記載されてはいたが、博物館側ではどこのものかわからないままだったという。そして、日本建築学会所蔵の忠太の肖像写真のなかに、メジディ勲章をつけたものも見つかった。

イスタンブルをめぐる米沢コネクション、まだまだこれから面白いものが出るのではないかと期待している。

本稿の作成にあたりまして、米沢有為会米沢副支部長の梅津幸保氏ならびに友人の池田さく子氏に大変お世話になりました。また、画像使用に関して、社団法人　日トロンとしての理想的な関係は周知の通りだが、寅次郎とのこ

本建築学会、米沢市上杉博物館、スナ・アンド・イナン・クラチ財団　イスタンブル研究所にご厚意を賜りました。記して謝意を表します。

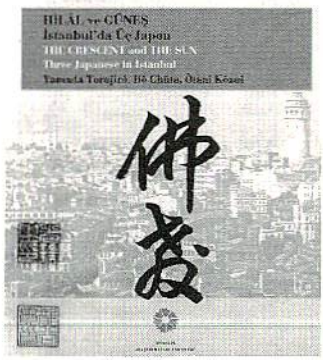
（注）

i　伊東忠太『伊東忠太建築文献』全六巻、東京、龍吟社、昭和十二年

ii　伊東忠太野帳　第九巻　㈳日本建築学会蔵

【図録紹介】この展覧会図録は、上杉博物館にも収蔵されている（トルコ語版）。体裁はタテ22㎝、ヨコ19・5㎝で三九八頁の大冊である。各頁に図版（写真）があり、見ごたえがある。

（梅津）



展覧会
「新月と太陽：イスタンブルの3人の日本人 山田寅次郎・伊東忠太・大谷光瑞」カタログ表紙

スナ・アンド・イナン・クランチ財団　イスタンブル研究所　2010年10月～2月

トピックス 1

「天地人像」建立

去る四月十六日（土）、松岬公園内で「天地人像」（上杉景勝公と直江兼続公 主従像）の除幕式が執り行われました。

当日は、上杉家第十七代ご当主の邦憲様や、『天地人』原作者の火坂雅志様、原型製作者で福島大学教授の新井浩様をはじめとした多数のご来賓ご臨席のもと、厳かな除幕式となりました。

構想から約一年半、市内外の二四団体、一二二法人・事業所、個人三三二名による総額約一九五〇万円の寄付で、威風堂々たる銅像が完成しました。

はじまりはドラマ推進

「天地人」が全国区になるきっかけとなったのは、平成九年に四五名の有志で立ち上げた「直江兼続公をNHK大河ドラマに推進する会」（以下「推進する会」）です。「推進する会」では、山形・新潟・福島三県の連携や、

NHKへの数度にわたる要望活動、市内外へのPR活動などを息長く続けてこられました。

そして、「推進する会」がスタートしてちょうど十年目の平成十九年四月に、平成二十一年のNHK大河ドラマに『天地人』が決定！との朗報がもたらされたのです。

それからのドラマ放送までの動きや、ドラマ放送中の盛り上がりなどについては、まだ皆さんの記憶に新しいところだと思います。

銅像建立がもち上がる

NHK大河ドラマ「天地人」は一年を通じて高視聴率で推移し、上杉景勝公と直江兼続公は一躍全国区の知名度になりました。伝国の杜で行なわれた「天地人博」も

当初の予想を大きく上回る来場者数を記録、市内の天地人ゆかりの名所旧跡も多くの観光客で賑わいました。時まさにリーマンショックの最中、米沢ではこの「天地人」だけが唯一の明るい話題をもたらしてくれたと言っても過言ではありません。

そして何よりも、米沢・上杉に脈々と受け継がれてきた「義」と「愛」の精神を、私たち地元住民に再び灯してくれたものと思います。

そうした地元の「想い」を形にしようと、銅像建立の声があちらこちらから湧きおこり、気運が高まっていきました。

そして、平成二十二年一月、市内十二団体によって「上杉景勝公・直江兼続公主従の銅像建立に係る発起人会」が開催され、銅像建立への動きが一気に具体化したのです。

多くの理解と協力を得て

発起人会は五月に実行委員会に改組し、委員長には小嶋彌左衛門氏（社団法人米沢観光物産協会会長）、副委員長には佐藤良吉氏（米沢商工会議所会頭／後に役員改選により酒井彰氏）と種村信次氏（米沢信用金庫理事長）がそれぞれ就き、発起人十二団体の役員の方々が実行委員を構成するという大陣容となりました。

寄付については、目標額を一七〇〇万円に設定。大河ドラマ「天地人」山形県推進協議会ならびに同米沢市推進協議会から多額の寄付が早々に決まり、大いに弾みがつきました。

製作については、原型製作を福島大学教授の新井浩氏に、鋳造製作を山形鋳物工業団地協同組合にそれぞれ依頼し、快諾をいただきました。台座も地元米沢の事業所がＪＶで取り組んでいただいたものです。最後に据え付けた銘板の題字「天地人」は、原作者である火坂雅志氏の揮毫によるものです。

そして…、いよいよ完成間近かの三月十一日、あの東日本大震災が襲いました。製作現場では鋳造作業の真最中、米沢では建立除幕に向けた最終打ち合わせのまさに最中でした。

除幕式の挙行を危ぶむ声もありましたが、こんな時だからこそ、予定通り行なって、この「天地人像」を復興への象徴にしようということになりました。

この「天地人像」は、米沢の街の礎を築いた二人の偉人を顕彰しているとともに、「義」と「愛」の精神を永久に灯し続ける証とならんことを願いたいと思います。

トピックス 2

前田慶次四百回忌供養祭

戦国武将でかぶき者として有名な前田慶次が、慶長十七年六月四日七十歳前後で米沢堂森で没したと伝えられている。今年が四百回忌という節目の年に当たり、堂森善光寺において盛大な供養祭が挙行された。

六月四日は土曜日とあって、慶次ファンが全国から約一千人が参列した。境内には慶次オリジナルグッズ販売店が並び、本堂には槍やお面などの遺品と「花の慶次」の原画パネルが展示された。昼には「さなぶり餅」が振るまわれた。午後はけーじろうなどのキャラクターとの撮影会と、角田信朗さんの歌披露で盛り上がった。

六月五日は米澤前田慶次の会、米澤直江会による今福匡氏の講演会とパネルディスカッションを開き、慶次の魅力を改めて語り合った。

午後は戦国の杜において、角田信朗さんのサイン会が行われ、多くの角田ファンが並んだ。この日宮坂考古館所蔵の前田慶次の複製甲冑の入魂式が善光寺で行われ、戦国の杜に展示された。

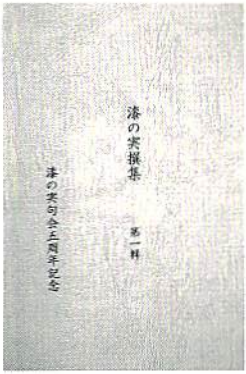
堂森 善光寺での供養祭

会員の広場

「漆の実」俳句会の近況について

鈴木淳一

まずはなんといってもこの六月に全会員による「漆の実撰集」が発刊されたこと。この事は「漆の実」俳句会発足五周年を記念に出版されただけに意義が深い。また五年間を通して、月一回の句会が一回も休会なしで運営されたことも特筆に値する。



嘗て本間元会長より有為会会報に「俳句の広場」等をつくって会員親睦の輪を広げて欲しいと懇望されてより七年。本間さんにも贈呈いたしたところ。（ここまできましたか。よくやってくれた。）と感謝の言葉をいただいた。しかしこれは下條前会長・小山事務局長始め会員諸氏の俳句熱心さとまとまりのよさがつくりあげたものである。

俳人長谷川櫂の句会入門書（講談社現代新書）に句会の心得として次の様に述べている。『俳句を実践するとは俳句は自分で作る。ここが俳句が文芸であり習い事ではないところである。句会が終わったところから自分で俳句を作る時間がはじまる』とある。この言葉を銘としてまた次のステップを目指し進んでいきたいと思う。

最後に今回の「漆の実撰集」第一輯より、私が選んだ秀句を採りあげて近況報告としたい。

漆の実撰集第一輯　秀句抄

○大関蝸牛

終戦日先生だけが泣いていた

逆光を少年が行く秋の海

○加納和子

黒き畝整然と伸び春を待つ

工場の時計四時指す麦の秋

○登坂かりん

アナウンスの訛り冬めく上野駅

敗戦忌風船爆弾を語りし父

◎下條怡生

黄砂来し坂東太郎を超えにけり

嬰の爪少し伸びをりかたつむり

○片山丹波

材木屋賀正の柾目並べをり

鳥渡る半農半漁の村の宿

○小山八州央

花火果てみちのくの灯の低きこと

手の甲に文字記す娘や九月尽

○池田弁之助

合歓の花唱歌が聞こゆ奏楽堂

人造絹絲発祥の地や林檎噛む

○佐伯みやび

この子とは犬のことなり夕涼み

騎手は鞭ぴしぴし鳴らし風薫る

○松坂六義

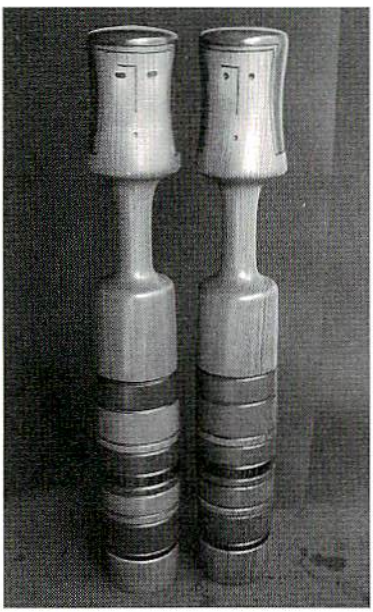
天の川群上踊りの輪の先に

春雷にゴルファー散れば鳥の森

復活開催 置賜選抜工芸展 置賜の作家たち
（会員の作品）

山中三平

道標



山崎世紀

雪の降る町（月見草、藍染）

佐藤嘉一

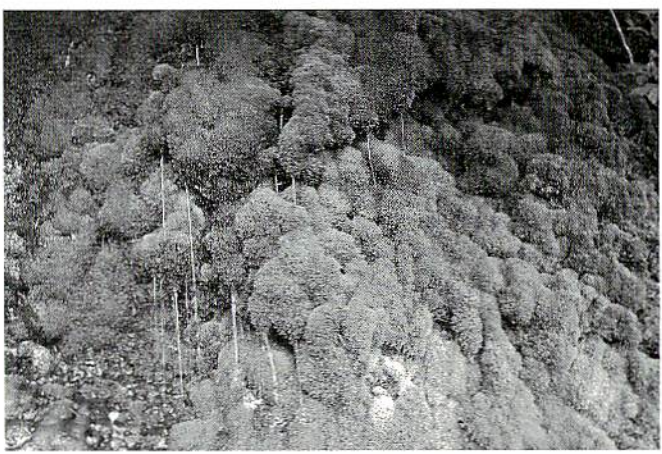
山姥２（面）

総合写真展

（平成23年度 県民芸術祭参加）
（第47回 米沢市民芸術祭参加）

縮　文夫

◀二筋の滝



▲苔の息吹

米沢有為会創立百二十周年記念事業
協賛金応募者ご芳名

応募者数　六〇五名
応募金額　一六、二二六、二七九円

【百万円】

青木　朗
松岸　吉晴

【十万円以上百万円未満】

上杉　邦憲
大石　道夫
大関　修敬
大滝　則忠
加藤　国雄
加納　和子
甲　國信
川合　勝雄
下條　泰生
小関　薫
今田　久夫
佐藤　毅
須貝　英雄
鈴木　良平
須藤　進
情野　文男
中條　仁
中條　良文
沼澤　研一
平山　英三
本田　健夫
宮坂　孝夫

「榛名緑風」
福王寺法林画伯寄贈
東京興譲館寮所蔵

【十万円未満】

相田　實
相田　修一
相田　治孝
相田　侃次
愛知　絢子
青木　隆生
青木　厚一
青木　恵子
青柳　忠良
青柳　秀夫
赤井　淳一
赤木　義信
安孫子健一
安部　幸子
安部壮一郎
安部　孝二
安部金之丞
安部　文男
安部　忠彦
安部　彰一
安部　孝二
安部　光男
安部　英夫
阿部　虎雄
安部　俊明
安部　洋司
安部　光司
雨田　秀人
荒井　隆広
荒井　典子
有路　光雄
安藤　隆夫
安藤　良二
飯沢　竹義
飯沼　俊男
五十嵐　宏
五十嵐謙一
五十嵐敏彦
五十嵐　亨
五十嵐力助
井熊　征一
池田　壽夫
石井　利成
石川　俊一
石田　忠雄
石田　一郎
石田　二郎
石塚　武
石塚　薫
石原　俊一
石山　登敏
磯部　道昭
市川　長文
伊藤　和夫
伊藤　秀靖
伊藤　英三
伊藤秀太郎
伊藤　貞治
伊藤　喜助
伊藤　隆明
稲葉　信隆
稲村　修
井上　榮子
井上　京七
今井　和夫
今井浩之介
今成　幸裕
岩木　信孝
岩間　弘一
上杉　季雄
上杉　虎雄
上野恒太郎
上野　和子
上野　和久
内田　保
内田　洋子
内山　章
梅津　幸保
梅津　正和
売間　公男
江川　栄助
海老名千代
海老名　悟
遠藤　秀樹
遠藤　武彦
遠藤　拓
遠藤　国勝
遠藤　隆敏
遠藤　善之
遠藤　三郎
遠藤　健
遠藤　和博
遠藤　正
遠藤　信幸
遠藤　宏三
大浦　雅宏
大浦　徳昭
大河原　忠
大河原真樹
大木リフォーム
大木徹太郎
大木　文夫
大木　聡
黄木修太郎
大久保邦正
大瀧　達朗
大武　清夫
大武　良治
大竹　敏雄
大友　康之
大友久太郎
大西　秀一
大貫　英一
大野　隆樹
赤木　修
岡崎　修三
小形　義美
小形　義和
岡部　浩子
㈱置賜建設
奥村　政秋
奥山　浩志
小澤　淳一
小野　仁
小野　辰雄
小野　庄士
小野　諭
小幡　常夫
折原　勝男
開沼　啓
貝沼　孝二
加川　巌
柿間　彰
覓　統子
春日　智恵
片桐　勝郎
片倉　俊彦
片倉　良子
勝見　正弘
加藤　啓二
加藤　義彦
加藤正一郎
加藤　裕司
加藤　法弘

加藤　公清
加藤　裕子
加藤　洋子
加藤　雄吉
加藤　正人
加藤　晴一
加藤　常吉
加藤　功
加藤富士雄
加藤　實
金沢　真
金子　芳雄
金子孝治郎
金子　利雄
金子　啓三
金子　静子
金田　隆樹
金田　明
鹿股　秀夫
神尾　康三
神尾　仁

上村　正和
上村　勘二
亀岡　博
蒲生　直樹
川井　幸樹
川越　治
川越　一郎
川崎　史郎
川島印刷
川島　良範
川野　功
川野　裕章
菅野　榮三
菅野　力
菅野　憲幸
菅野欣一郎
菅野　浩司
菊地　隆雄
菊地　茂男
菊地　彰
北郷　勝

北村　恒夫
北村　清彦
木村　栄司
木村　有恒
木村　品子
木村　尚武
木村　昌三
清田　敏子
日下部　明
工藤　正三
工藤為久夫
熊倉　智子
倉石　治子
倉田　和子
黒田　隆
桑原　君子
小池　兼一
小出　道博
小浦今朝雄
五賀　良孝
小口　進

小口征四郎
小嶋彌左衛門
小嶋　邦浩
小嶋　伸一
小島　和雄
小島　泰夫
小関　大揮
小関　昌幸
小関　武
小関　博志
小関　敦
後藤　仁
後藤　芳雄
後藤　義之
後藤　誠
後藤　浩
小林　伸一
小林　栄作
小林　栄
小林　伸也
小森　力雄

小森　邦夫
小山　泰
小山　史
今田　恒夫
今野　多助
近野久左エ門
紺野　耕
近野　洋一
齋藤　彰
斎藤亜基夫
斉藤　榮助
斉藤　祐介
斉藤　岩雄
斎藤　峰彰
斎藤　昭一
齋藤　和博
齋藤　定雄
齋藤　忠男
齋藤　充博
佐伯　和重

佐伯　雅子
酒井　信秀
寒河江啓夫
寒河江幸平
寒河江　晃
寒河江　弘
坂野　三郎
桜井　三男
桜井　真行
笹木　邦明
佐々木辰彦
佐藤　陞三
佐藤　清一
佐藤　憲一
佐藤　和男
佐藤　清二
佐藤　一彦
佐藤　好明
佐藤富士雄
佐藤　邦男
佐藤　政一

佐藤　幸子
佐藤　孝夫
佐藤　憲一
佐藤　敬一
佐藤　英男
佐藤　和博
佐藤　睦
佐藤　繁
佐藤　忠次
佐藤　俊弘
佐藤　紀孝
佐藤　藤助
佐藤　啓
さの医院
澤田美根子
山宮　光雄
山宮　広光
塩田　秀雄
塩野　光助
色摩　貴司
宍戸　貴雄

志田　芳宏
篠崎　龍夫
篠原　守信
篠宮　雅夫
柴田　孝
志摩　健一
島倉　静夫
島津　博徳
島津　邦造
島津　真一
島貫　寿雄
嶋貫　雄次
島貫　正夫
島貫　和浩
島貫　祐輔
島森　浩
下平　忠正
庄司　富男
白石サダ子
白田　悟
白根澤利雄

進藤　甲三
須貝　力
杉山　徹
鈴木　大和
鈴木　脩二
鈴木　浩美
鈴木　信之
鈴木　幸一
鈴木　学
鈴木　正明
鈴木　吉助
鈴木　壽一
鈴木　洋介
鈴木　徳松
鈴木　静夫
鈴木　伸平
鈴木　淳一
鈴木　寿一
鈴木　実
鈴木　孝夫
鈴木　啓一

鈴木　和美
鈴木　睦夫
鈴木　善夫
鈴木　正道
鈴木　成徳
鈴木　治雄
鈴木　宏治
鈴木　貴志
鈴木　利一
鈴木　東朗
須藤　誠一
須藤　眞
精英堂印刷
情野　正
情野　孝夫
関　宗三
関　紀男
関谷　知樹
相馬茂二郎
曽根　伸良
孫田　忠誠

平　丈郎
平　洋一
平　俊也
高木　正助
高瀬　勝
高田　和寿
高梨　善久
高野　譲
高野　康男
高野　欽一
高橋　勉
高橋　学
高橋　芳郎
高橋　昭
高橋　俊龍
高橋健太郎
高橋　廣
高橋　丈夫
高橋　章
高橋　幸紀
高橋　英也

高橋　栄二
高橋源五郎
高橋　節子
高橋　弘
高橋　英機
高森　務
高屋　晴三
滝口　政彦
瀧澤　新
瀧澤　良祐
瀧澤　昭義
武田　篤
武田誠一郎
竹田　明
竹屋　孝志
太宰　治男
鑪　信政
蓼沼　玲子
田中　健治
田中　駒男
田中　久雄

種村　信次
田林　晄一
田邨　憲一
丹野　雄吉
千喜良　誠
塚原　保夫
塚本　祖玄
辻　竹彦
土田　裕一
土屋　克彦
堤　啓一
手塚　修
手塚　宮雄
鉄砲屋町町内会
外田　陽
戸田　敏男
戸田　直博
豊嶋　和弘
内藤　文徳
内藤　政利
永井　忠弘

中川　紘一
中川　政彦
中澤　元一
長沢　健一
中島　正臣
中島　秀一
中條医院
中村　紘一
中村　智和
中村　俊明
中山　清治
那須　譲治
那須　宗一
新野　昌生
新野　香逸
西澤　榮一
仁平　廣子
仁科　盛之
仁科　義英
西村　純
新田　弘昭

二宮　進
沼沢　俊夫
野本　弘
野本　英夫
芳賀　秀樹
羽賀　恵壽
橋本　享子
羽隅　弘宣
長谷川憲治
長谷川啓二
長谷川　智
長谷部英吾
長谷部純一
畠山みつ子
花角　愼一
浜田藤兵衛
濱田五左衛門
林　里子
林　幸男
林　一郎
原　弘一

原　文子
半田　和彦
引地　孝忠
樋口　正宏
平塚　紀男
平吹　隆一
平吹　彌市
平吹　通之
平山　和博
樋渡三保子
深沢　和子
福崎真知子
藤倉　新一
藤田智次郎
藤田浩一郎
藤田　士朗
藤波　康雄
船山　隆寿
船山　完一
舟山　国夫
船山　敏昭

舟山　清
舟山　進
舟山　豊弘
星　一郎
星　泰次郎
保科　恒二
保科　喜重
星野　勝幸
本郷　友信
本多建設
本田　貞夫
本田　勝市
本多　和彦
本間　敏雄
本間　庸
本間　達三
本間　精
前山　健二
槇山　信三
真島　秀和
益満　敏

増村　泰弘
町田　富保
松岸　潔
松坂　康夫
松本　則夫
松本　耕輔
間宮　博
㈱丸　定
丸山　保治
丸山　道孝
三浦　康英
三浦　洵子
三井　修
御供　政敏
皆川　秀雄
皆川　啓一
水無瀬正一
宮崎　努
宮崎　鉄蔵
深山　昭子
宮森　茂

向田　吉広
村石　房男
村岡　孝助
村上　秀利
村山　晃也
村山　純一
村山　浩和
森谷　国弘
矢尾板　操
矢尾板範子
山方　雅晴
山木勇一郎
山岸　瑛
山岸　仁
山口　祥二
山口　尚
山口　文宏
山口　丈志
山口　昇一
山口　弘子
山口　和夫

山田　幸生
山田　栄造
山田　隆弘
山田　尚
山田　雅宏
山本優美子
結城喜三郎
結城　京子
横井　博
横井　正
横沢　三男
横沢　健次
横山　彰人
横山　満
横山　邦雄
吉田美智子
吉田　芳弘
吉村　淳
吉村　啓
淀　勇夫
米　龍太郎

米　浩二
米野　宗禎
米野　真司
我妻　敏
我妻　文夫
我妻　光吉
我妻　薫
我妻　律子
若松工業
和田　芳子
和田美知子
和田　彰造
渡辺　直樹
渡部　昭
渡部　秀丈
渡部　市郎
渡邊　義寛

ふるさとおきたまチャリティ美術展

収益金　二、一二一、一二九円

出展作家名

安孫子光之
薄木昭夫
沖津信也
加鳥重雄
亀岡博
齋藤秀一
清水恵子
高森務
高野和雄
田中寛司
椿辰郎
林久雄
宮下妙子
水野宗
山口富士男
山中三平
渡辺修一
齋藤千代夫

特別出展

作家名

福王寺法林
福王寺一彦
黒澤梧郎

作品寄贈者

ご芳名

福王寺法林
黒澤梧郎夫人

東京支部会員

出展者名

（ご寄贈）

佐藤毅
宍戸俊夫
情野文男
川越一郎
大関修敬
中村龍一
林崎徳四郎

（計　三十名）

ご購入協賛者名

オカムラ印刷㈱
阿部敏雄
横山彰人
下條泰生
加藤国雄
加納和子
柿間彰
関とみ子
岩瀬和子
宮坂孝夫
五十峰やえ子
高橋廣
佐藤毅
佐伯雅子
種村信次
渋谷澄子
勝見哲朗
小山泰
小林栄作
上杉邦憲
情野文男
尻高邦夫
森原隆行
森信男
須貝英雄
水石邦生
水嶋正道
菅野憲幸
青木恵子
倉田和子
村石房男
太田ひろみ
大関修敬
大塚徹
瀧澤新
畠山みつ子
平山英三
米野宗禎
片平善造
鈴木うめよ
鈴木吉助
鈴木信之
鈴木脩二
廣川淑郎

（計　四十四名）

作品販売総額

四、三六五、二五〇円

黒澤梧郎夫人寄贈
東京興譲館寮所蔵

○東日本大震災議援金募集結果

当会が東日本大震災義援金を募集しましたところ、短期間ではありましたが、一一七名の方にご応募いただき、六九七、〇〇〇円が集まりました。お寄せ下さった方々、どうもありがとうございます。

置賜三市五町に避難している被災者の方の人数を七月一日現在で問い合わせましたところ、次のような人数でした。この人数を基礎に按分した金額に当会からの支援金を加えた額を各市役所及び町役場に寄託いたします。

寄託した義援金は各市町の判断で被災者のために自由に使っていただくこととしており、各市町から報告を求めることは考えていませんが、報告があった場合には米沢有為会のホームページに掲載いたします。

ご協力に深く感謝し、御礼申し上げます。

市町名	避難被災者数	按分金額	義援金額
飯豊町	一四九名	三七、六一四円	五〇、〇〇〇円
小国町	六四名	一六、一五六円	五〇、〇〇〇円
川西町	五六名	一四、一三七円	五〇、〇〇〇円
白鷹町	二六名	六、五六四円	五〇、〇〇〇円
高畠町	九〇名	二二、七二〇円	五〇、〇〇〇円
長井市	二二八名	五七、五五七円	六〇、〇〇〇円
南陽市	二一三名	五三、七七一円	六〇、〇〇〇円
米沢市	一、九三五名	四八八、四八一円	五〇〇、〇〇〇円
合計	二、七六一名	六九七、〇〇〇円	八七〇、〇〇〇円

（注：市町名は五十音順です。）

義援金応募者氏名（五十音順）

今井浩之介
青柳秀夫
青山穣
安部光司
安部彰一
安部壮一郎
安藤隆夫
飯沼敏男
石川和男
市川威純
伊藤和夫
伊藤喜助
伊藤秀靖
上野和久
内山章
梅津幸保
遠藤和博
遠藤国勝
大木文夫
大久保幸久
大友久太郎
大友康之
岡部浩子
沖津信也
押尾仁
開沼啓
加藤實
勝見正弘
加藤国雄
加藤公一
加藤義彦
加藤洋子
鹿股秀夫
上村勘二
蒲生重夫
木村政信
黒田貞夫
下條泰生
五雲寺卓
小林伸一
小松繁
小山泰
近藤郁子
近藤洋介事務所
佐藤陞三
佐藤毅
篠田敏男
地主憲一郎
篠崎龍夫
柴田孝
志摩健一
島津那造
須貝力
須貝英雄
鈴木啓一
鈴木公一
鈴木幸一
鈴木淳一
鈴木せい
鈴木信之
情野正
情野文男
高野譲
高橋昭
高橋健太郎
高橋源五郎
高橋洋子
瀧澤新
田中駒男
種村信次
土屋久仁子
堤昌司
手塚修
中川紘一
中條淳子
新野香逸
西澤榮一
仁科盛之
沼澤研一
野本弘
橋本享子
長谷川啓二
長谷部英吾
林常子
林義光
原邦雄
原弘一
半田和彦
平山英三
樋渡三保子
福崎真知子
藤倉禎志
藤田浩一郎
房間敏夫
舟山豊弘
船山敏昭
細谷正弘
本郷貞雄
本郷友信
増村泰弘
村山純一
元木翠
桃川隆明
山口祥二
山田幸生
山本優美子
横沢健次
横沢三男
吉村淳
米野宗禎
我妻文夫
我妻律子

社団法人 米沢有為会役員名簿

平成二十三年九月現在

名誉会長
上杉邦憲

名誉会員
小幡常夫
本間敏雄
下條泰生

会長
（理事）須貝英雄

副会長
（理事）安部三十郎
（理事）平山英三

理事
安部英夫
石原俊一
梅津幸保
大滝則忠
貝沼孝二
加藤国雄
甲國信
上村勘二
菅野榮三
菅野憲幸
小山泰
佐藤毅
柴田孝
鈴木幸一
鈴木信之
情野文男
高橋勉
種村信次
手塚修
中川紘一
沼澤研一
御供政敏
米野宗禎

監事
伊藤秀太郎
中條良文
西澤榮一
本多和彦

評議員
（仙台）安部金之丞
（東京）安部忠彦
（同）安部洋司
（同）飯沼俊男
（米沢）五十嵐京子
（同）井熊征一
（同）江川栄助
（東京）大石道夫
（同）片平善造
（米沢）加藤真琴
（東京）金子晃司
（同）金子孝治郎
（同）川合勝雄
（同）菊地隆雄
（同）佐伯雅子
（同）佐藤憲一
（同）佐藤陞三
（同）佐藤好明
（米沢）柴田正孝
（東京）白根澤利雄
（北海道）須藤進
（仙台）滝口政彦
（京都）谷榮政

（米沢）塚田昌伸
（仙台）塚原保夫
（東京）永井忠弘
（仙台）林　一郎
（東京）平山和博
（同）深沢和子
（同）本郷友信
（同）宮坂孝夫
（同）村石房男
（同）村山浩和
（同）山田幸生

（以上平成二十五年八月満期）

（東京）赤井淳一
（同）安部壮一郎
（同）伊藤隆明
（同）伊藤貞治
（同）今井浩之介
（同）岩瀬和子

（米沢）遠藤善則
（仙台）大武清夫
（東京）川井陽一
（米沢）工藤正三
（仙台）香坂昌紀
（米沢）小林　榮
（同）小林伸一
（京都）齋藤昭一
（東京）佐藤宏吉
（同）佐藤幸子
（米沢）佐藤政一
（同）山宮光雄
（東京）鈴木うめよ
（同）鈴木吉助
（地方）鈴木浩美
（米沢）清野幸男
（仙台）瀬川耕
（東京）瀧澤新

（北海道）田村邦夫
（東京）西村　純
（同）橋本享子
（同）羽隅弘宣
（同）林　里子
（米沢）山木勇一郎
（東京）横山彰人
（同）吉澤雄一
（同）吉田仁志

（以上平成二十四年八月満期）

相談役

遠藤道雄
大関修敬
大友久太郎
加藤常吉
金子利雄
金子芳雄
九里茂三

小関　薫
小関昌幸
小森力雄
佐野清一
鈴木脩二
曽根伸良
高橋　廣
高橋俊龍
高橋幸翁
中條　仁
新野昌生
仁科盛夫
星　一郎
松野良寅
三井　修

理事役務分担

（新法人移行への体制）

○総務部

部長　平山英三
副部長兼施設管理担当　佐藤毅
財務担当　鈴木信之
組織担当　小山泰
同　種村信次
同　石原俊一
同　菅野憲幸
公益移行担当　大滝則忠
事務局長　中川紘一
参事　渡邉忠義
同　樋口正宏

○育英事業部

部長　高橋勉
副部長兼奨学金担当　貝沼孝二
寄宿舎担当　沼澤研一
（東京興譲館担当・館長）　御供政敏
同
（仙台興譲館担当・館長）
奨学金担当参事　村山浩和
同　小野庄士

○地域・教育振興部

部長　手塚修
副部長兼産業振興担当　柴田孝
教育振興担当　鈴木幸一
同　貝沼孝二

○文化広報部

部長　梅津幸保
副部長兼HP担当　加藤国雄
文化広報担当　中川紘一
同　沼澤研一
同　情野文男
同　米野宗禎
参事　山宮光雄
同　小林伸一
同　石田和弘
同　戸田直博
同　宮坂宏
同　今井浩之介
同　宮坂孝夫

○東京支部長

兼文化大学担当　米野宗禎

○米沢支部長

安部三十郎

我妻榮記念館担当

上村勘二

○仙台支部長

甲國信

○京都支部長

菅野榮三

○北海道支部長

安部英夫

○教育委員

伊藤和夫
江川栄助
後藤浩
佐藤嘉一

吉田美智子（理事及監事参加）

○産業振興委員

斎藤友久
佐藤俊弘
淀川泰正（理事及監事参加）

○公益認定申請準備委員

平山英三
大滝則忠
貝沼孝二
加藤国雄
鈴木信之
樋口正宏

○寄宿舎 興譲館長

東京 沼澤研一
同副館長 川合勝雄
仙台 御供政敏
同副館長 滝口政彦
同 長澤健一

○我妻榮記念館

名誉館長 我妻堯
館長 上村勘二
事務局長 鈴木幸一
運営委員 遠藤拓
同 安部敏
同 佐藤英男
同 五十嵐京子
同 高橋節子
同 本多和彦
管理人 小林秀一

東京支部役員

支部長 米野宗禎

副支部長 沼澤研一
鈴木信之

理事

飯沼俊男
伊藤喜助
伊藤秀太郎
伊藤貞治
上野和久
貝沼孝二
加藤国雄
川合勝雄
川井陽一
菅野憲幸
倉田和子
齋藤彰
佐伯雅子
佐藤陞三
鈴木吉助
中川紘一
西澤榮一
羽隅弘宣
樋口正宏
平山英三
平山和博
宮坂孝夫
横山彰人
吉澤雄一
渡邉忠義

監事

赤井淳一
瀧澤新

相談役

本間敏雄
小森力雄
金子芳雄
高橋俊龍
鈴木脩二
情野文男
石原俊一

参事

今井浩之介
太田ひろみ
大友勝廣
神野民夫
紺野耕
近藤郁子
斎藤和博
鈴木うめよ
林里子

評議員

村石房男
吉田仁志
淀勇夫
青木恵子
安部洋司
伊藤隆明
今井浩之介
大石道夫
小口征四郎
川越一郎
五雲寺卓
佐藤孝夫
平晋策
瀧澤昭義
橋本享子
林常子
原田照二
本川裕
村山浩和
山田幸生

（以上平成二十五年五月満期）

安部壮一郎
安部忠彦
岩瀬和子
遠藤信夫
遠藤弘隆
太田ひろみ
大滝則忠
大友勝廣
神野民夫
金藤泰伸
小山泰
紺野耕
佐藤毅
鈴木うめよ
林里子
深沢和子
舟山国夫
水見洋
村石房男
山田雅宏
吉田仁志
米野国雄

（以上平成二十四年五月満期）

米沢支部役員

支部長

（理事）安部三十郎

副支部長

（理事）高橋勉
（理事）梅津幸保
（理事）本多和彦

理事

井熊征一
江川栄助
遠藤善之
小野庄士
上村勘二
加藤真琴
小林伸一
佐藤広明
山宮光雄
柴田孝
柴田正孝
（常務）鈴木幸一
清野幸男
高橋節子
高橋丈夫
種村信次
塚田昌伸

監事

手塚宮雄
手塚修
野本弘
山木勇一郎
吉田美智子
中條良文
舟山豊弘
淀川泰正

評議員

安部敏
石田和弘
稲村修
漆山裕
遠藤善則
加藤功
加藤正人
川野裕章
下條邦彦
小林圭一
佐藤富士雄
島倉静夫
白田悟
庄司芳彦
武田誠一郎
玉上利恭
戸田直博
中條淳子
福崎真知子
本間精
前山健二
松田修
皆川秀雄
山口昇一
渡部秀丈

顧問

遠藤武彦
木村忠三
後藤源
高橋幸翁
武田誠
中川勝
野村研三
横沢三男

相談役

安部行雄
石塚忠夫
上杉虎雄
遠藤英明
大久保利之
大友久太郎
川崎豊
工藤正三

参事

小関　薫
佐野清一
島田康雄
鈴木徳松
曽根伸良
高橋　昭
町田富保
松野良寅
村山正一
伊藤秀一
高橋章
本間浩
宮本秀行
米浩二
赤木義信
鈴木　隆

仙台支部役員

名誉顧問

中條　仁

支部長

（理事）甲　國信

副支部長

（理事）安部金之丞
（理事）塚原保夫

理事

（事務局）御供政敏
大武清夫
加川　巌
亀岡祐一
栗田一巳
香坂昌紀
今野多助
鈴木良平

京都支部役員

監事

遠藤三郎
加藤啓二

顧問

滝口政彦
高橋　宏
田林晄一
廣瀬　純
本田健夫
長澤健一
和田美知子

理事

岩崎　淳
菅野榮三
斉藤昭一
高橋雅雄
谷　榮政
保科喜重
新野昌生

庶務幹事

斉藤昭一
岩崎　淳
保科喜重

副支部長

谷　榮政
高橋雅雄

支部長

菅野榮三

評議員

壳間公男
後藤　誠
高木正助
高橋　章

遠藤健次
小野島亀一
星利三
水科宗興
北郷勝
佐藤恒雄

北海道支部役員

支部長
安部英夫

副支部長
田村邦夫

理事
佐藤俊一
芳賀秀樹

評議員
鈴木吉行

須藤進
関二郎
孫田敏
田中健治
佐藤豊
大峡康治

興譲館寄宿舎OB会

名誉会長
下條泰生

会長
大関修敬

副会長
羽隅弘宣（東京OB）
安部英夫（仙台OB）

芳賀秀樹（札幌OB）

幹事長
佐藤毅

副幹事長
大滝則忠
川合勝雄

幹事
中條仁
原弘一
沼澤研一
山方雅晴
樋口正宏
加藤国雄
高山征一
本多和彦
菅野憲幸
宮坂孝夫

斉藤彰
上野和子
伊藤和夫

会計幹事
貝沼孝二
川井陽一

監事
飯沼俊男
石原俊一

顧問
小幡常夫
木村有恒
小森力雄
金子芳雄
高橋俊龍
小関薫
安部三十郎
今田久夫

板垣義次
鑪信政
今井和夫

東京支部長

加藤国雄

副支部長

菅野憲幸
貝沼孝二

幹事長

宮坂孝夫

幹事

飯沼俊男
舟山国夫
安部洋司
佐藤陞三
平山和博
川合勝雄
島貫正夫

小関敦
鈴木正明
千喜良誠
佐藤憲一

会計幹事

赤井淳一
小野仁

監事

高瀬勝

米沢支部長

本多和彦

仙台支部長

中條仁

副支部長

甲國信
滝口政彦
本田健夫

理事

上野恒太郎
香坂昌紀
今野多助
塚原保夫
船山完一

顧問

瀬川耕

事務局

長澤健一
丹野真敬

奨学生OB・OG会

（平成21年2月28日発足）
かっこ内数字は
奨学金貸与開始年度

会長

加納和子（S30）

副会長

斉藤彰（S37）
村山浩和（S46）
小野庄士（S48）

幹事長

貝沼孝二（S47）

副幹事長

仁科義英（S47）
水見洋（S52）

幹事

遠藤一栄（S46）
渡部順一（H11）

監事

佐藤憲一（S44）

賛助会員名簿

社団法人米沢有為会の主旨に賛同いただき賛助会員としてご支援ご協力をいただいている方々です。

東京支部

（敬称略）

法人名	代表者
日綜産業㈱	小野辰雄
大木リフォーム㈱	設楽保雄
㈱向洋アドシステム	金子晃司
澁谷印刷㈱	野本英夫
マコー技研㈱	東海達夫
古窯	佐藤幸子
舟寿司	深沢和子

（平成二十三年度）

米沢支部

（敬称略）

法人名	代表者
相田建設㈱	相田晃一
遠藤廣	
㈱置賜建設	川野敬典
㈱大清	中村邦夫
㈱小嶋総本店	小嶋彌左衛門
さの医院	佐野隆一
鉄砲屋町町内会	磯清一
中條医院	中條明夫
浜田㈱	浜田純
舟山清	
㈶宮坂考古館	宮坂直樹
㈱丸定	佐藤良吉
米沢中央高等学校同窓会椎の実会	
若松工業㈱	片倉尚
精英堂印刷㈱	鈴木高明
㈱タカハタ電子	安房毅

（平成二十三年九月現在）

仙台支部

（敬称略）

法人名	代表者
㈱大江設計	大江勝雄
仙台環境科学㈱	加藤啓二
日本不動産㈱	栗田一巳
建装工業㈱東北支店	高橋学
㈱東北オフィスマシン	林崎まつ子

（平成二十三年度）

後記

▲三月十一日午後二時四十六分東日本大震災が発生し、未曾有な被害がありました。千年に一度ともいわれる大津波が岩手、宮城、福島をのみ込んでしまいました。併せて福島第一原発が破損し、放射線が放出し、被爆する大惨事となりました。半年たった今も復旧は進んでおりません。被災された多くの皆さんにお見舞いを申し上げますとともに亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

▲例年の上杉まつりは、大震災で新幹線や高速道路が分断されたため中止となり、秋に延期されました。九月十七日、十八日は武締式と上杉行列、川中島合戦、二十三日は時代行列、かぶき者コンテスト、長谷堂の合戦を中心に開催されました。秋の陣と名付けて市民、観光客がお祭り騒ぎを盛大に楽しみました。

▲もう一つ大震災に話です。仙台興譲館寮の直接被害はありませんでした。東京興譲館寮も耐震補強工事を終了したばかりでしたので安心でした。我妻榮記念館ですが、トイレ棟がゆがみましたので修復工事を行いました。東京支部会員の青木朗氏に多額の支援をいただきました。厚くお礼申しあげます。

▲我妻榮記念館の開館にあたり、資料整理等にご尽力いただきました唄孝一先生が亡くなられ、震災で延期されていたお別れ会が九月十一日東京会館で行われ、上村勘二館長が米沢から代表して参列致しました。

▲今期一二三回総会で決定した公益法人を目指しての申請作業に入ります。役員も新法人の体制を見通して配置されました。須貝英雄新会長、平山英三新副会長を中心に理事二十六名、監事四名でスタートしました。なお、新法人の役員も選任され理事十三名、監事二名となります。

▲今号は、特集会誌首号、特別寄稿二編があり予定よりボリュウムがあります。特に昭和二十四年版の首号は戦後の貴重な情報がありますので、複写でそのまま載せました。どうぞご一読ください。

（文化広報部長　梅津幸保）

本部・各支部事務所等所在地

本部
〒一八二－〇〇〇四
東京都調布市入間町一丁目三六番地
東京興譲館内
電・ＦＡＸ（〇三）（三三〇九）三三〇二

東京支部
〒一八二－〇〇〇四
東京都調布市入間町一丁目三六番地
東京興譲館内
電・ＦＡＸ（〇三）（三三〇九）三三〇二

米沢支部
〒九九二－八五〇一
山形県米沢市金池五丁目二ノ二五
米沢市役所内　秘書広報課
電（〇二三八）（二二）五一一一　ＦＡＸ（〇二三八）（二二）五五四一

仙台支部
〒九八〇－〇八〇二
宮城県仙台市青葉区二日町六－一三－四〇二
㈱エムアイティ建築研究所
電（〇二二）（二一五）〇二二六　ＦＡＸ（〇二二）（二一五）〇二五二

京都支部
〒六一二－八〇一一
京都府京都市伏見区桃山町伊庭二一－九
齋藤昭一
電（〇七五）（六〇一）五四六五

北海道支部
〒〇六〇－〇〇六一
北海道札幌市中央区南一条西八丁目　ＴＧ札幌ビル７Ｆ
㈱日建社内　田村邦夫
電（〇一一）（二七一）二五八五

米沢有為会設置施設

東京興譲館　〒182-0004　東京都調布市入間町１－36
電・ＦＡＸ（03）（3309）３３０２

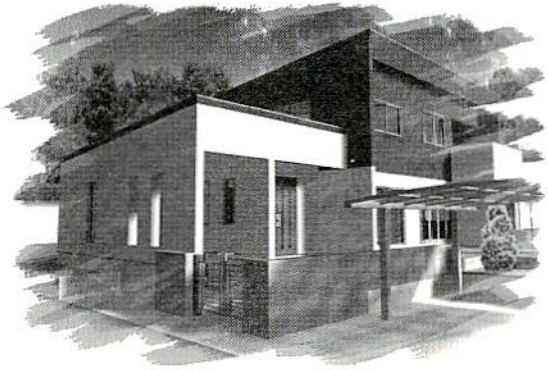
仙台興譲館　〒980-0874　宮城県仙台市青葉区角五郎２－６－21
電（022）（222）４７９０

我妻榮記念館　〒992-0045　山形県米沢市中央３－４－38
電・ＦＡＸ（0238）（24）２２１１

発　行　社団法人　米沢有為会
会長　須　貝　英　雄
編集担当　文化広報部
部長　梅　津　幸　保
発行日　平成二十三年九月二十九日

子育て世代応援住宅

ペパーミント



世界にたったひとつしかない我が家

株式会社 本多建設

お問い合せは今すぐ！ TEL 0238-21-5100
FAX 0238-21-4458 E-mail info@hondahomes.com

〒992-0047 山形県米沢市徳町7-52

WEBで検索！ ホンダホームズ 検索

本多建設ホームページアドレス hondahomes.com

割烹

志ん柳

個室５名様から100名様まで

〒992-0045 米沢市中央一丁目14-4

電　話 0238－21－1234

米沢牛串焼き

玉こんにゃく

米沢ラーメン

全国唯一!!

うこぎソフト

その他いろいろ

上杉城史苑すぐ隣り！

べに花庵

BENIBANAAN

住　　所/〒992-0045 米沢市丸の内1-1-22
電話番号/0238-23-6310
営業時間/9:00から17:00まで 定休日 / なし

漬物はやっぱり 雪国の米沢のが一番

一度あがってみてください!!

創業50年の専門店　窪田の後藤商店

お申し込みは最寄りの取り扱い店または当店まで

自然の味をそのまま手づくり

有限会社 後藤商店

〒992-0003　山形県米沢市窪田町窪田413-3

☎0238-37-5378(代)

FAX 0238-37-6345

http://www.marsho.jp

E-mail: info@marsho.jp

後藤喜彦　東京興譲館寮　平成12年卒

◎宅配便でお届けします。(関東方面630円)

(送料は別途申し受けます)

お支払いは代金引替、郵便振替等で

No.	規　　格	価　格
A	おみ漬(8袋)	3,150円
B	青菜漬(8袋)	3,150円
C	おみ漬・青菜漬詰合(8袋)	3,150円
D	赤かぶ甘酢漬(8袋)	3,150円
E	おみ漬(3袋)青菜漬(3袋)赤かぶ(2袋)	3,150円

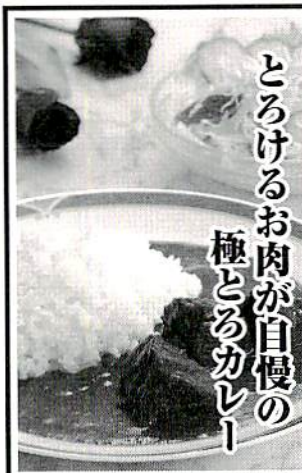
他にミックスにも応じます。

米沢では米沢駅２Ｆアスクでも販売しています。

グルメからお土産まですべて揃う
米沢観光のキーステーション

ごきげん食彩倶楽部
米沢牛をはじめ、物産品が満載!!
●ご希望の方に上杉城史苑商品カタログをお送りいたします。
http://uesugijoshien.jp

上杉城史苑
代表取締役会長 内藤文徳
代表取締役社長 松田理
㈱上杉コーポレーション
〒992-0052 米沢市丸の内一丁目1-22
TEL.0238-23-0700 FAX.0238-21-8252



鯉料理&スローフーズ 鯉の宮坂
米沢牛惣菜 地産創食 宮香本舗 みやこうほんぽ
株式会社 タスクフーズ
山形県米沢市相生町7－130
0120－25－7188
URL http://www.koi-miyasaka.com

地元に愛されて30年。
皆様の「大切」を私たちの「大切」に。

東北警備保障株式会社

山形県公安委員会認定第6号
山形県米沢市アルカディア1丁目808-17
電話　0238-29-0005
FAX　0238-29-0015
URL http://www.next-alert.co.jp

営業品目　・機械警備　・常駐警備　・交通誘導業務
・イベント警備（上杉まつり・花火大会など）
・施設管理（米沢市総合公園　指定管理者など）
・清掃業務（法人契約）

IPを使ったホームセキュリティシステム（最新式）導入！
体験キャンペーン実施中！！

全国新酒鑑評会
三年連続金賞受賞

清酒 東光

上品な吟醸香、溢れる旨み、
心地良い余韻…
技術の粋を結集して醸した
極上の美酒

創業四百十余年
株式会社 小嶋総本店

ご宴会、ご会合は
サンルートにおまかせ下さい

ご予約
お問合せは

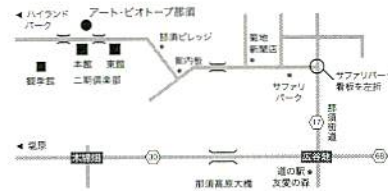
ホテルサンルート米沢

〒992-0039 山形県米沢市門東町3-3-1 共立ビル TEL 0238-22-6655(代)

自然と感性が交わる、創造の小さき庭。
アート・ビオトープ那須

レジデンス　陶芸・ガラススタジオ　ワークショップ

www.artbiotop.jp



〒325-0303
栃木県那須郡那須町高久乙道上 2294-3
TEL：0287-78-7833　FAX：0287-78-6627

サマー・オープン・カレッジ――――いま、ここで考えたいことをあつめた夏の5日間

Schule im Berg　山のシューレ

「山のシューレ」は、那須高原山麓・横沢地区にあるアート・ビオトープ那須で開催されるテンポラリーな学校です。

www.schuleimberg.com

主催＝特定非営利活動法人アート・ビオトープ

Party Space

米沢の中心にあり、郷土感あふれる土地にたたずむ
「 グランド ホクヨウ 」
英国式の厳かな独立型チャペルや、多種多様なパーティー会場があります。
ステンドグラスが特徴的なチャペル、県内でも大変珍しい和テイストの紗紅薗。
レンガ造りで、大きな煖炉が特徴的な邸宅のハウスウェディング風のプロヴァンス。
豪華なシャンデリアが特徴的なブライトイン。
一歩足をふみ入れれば正面に赤い階段がひろがり、様々なテーマ性のある個性的な会場で、
最幸の一日をとびきりロマンティックにお過ごしください。

☎でのお問い合せは(ぼ) **0238-22-1238**

www.grand-hokuyo.com

グランドホクヨウ

山形県米沢市金池2丁目3-7/ TEL:(0238)22-1238/FAX:(0238)21-1067

明治二十二年十二月十四日創刊
昭和二十七年八月二日復刊
平成二十三年九月二十九日発行

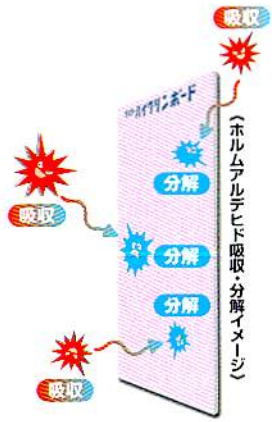
発行　社団法人　米沢有為会
会長　須貝英雄
編集　文化広報部長　梅津幸保
東京都調布市入間町一丁目三十六番地
電話・FAX　〇三―三三〇九―三三〇二

印刷　㈱羽陽印刷
山形県米沢市中央三丁目九―二二
電話　〇二三八―二三―〇四六七

日本全国、ホルムアルデヒド退治の「虎の巻」。

タイガーハイクリンボードはシックハウス症候群の主な原因物質のホルムアルデヒドを吸収・分解するので日本全国、安心家族の「虎の巻」です。

○新築・リフォーム直後や新しい家具などから発生するホルムアルデヒドを短時間で吸収・分解します。
○一定の条件下で厚生労働省指針値のホルムアルデヒド濃度0.08ppmを下回る0.05ppmの数値を実現しました。
○ハイクリンボードの「壁材」や「天井材」は物理的な吸着と異なり、ホルムアルデヒドを化学的に吸収・分解するため再放出されません。
○タバコの煙に含まれているアセトアルデヒドの低減効果も併せ持っています。
○不燃性、施工の容易性など、せっこうボードの数々の優れた性能をそのまま保持しています。



（ホルムアルデヒド吸収・分解イメージ）

タイガー High-Clean Board
ハイクリンボード
ホルムアルデヒド吸収・分解せっこうボード
（財）日本建築センターから「室内空気中の揮発性有機化合物汚染低減建材」として認定されました。（認定番号：BCJ-AIBT-7）

YOSHINO
TIGER BRAND
安全で快適な住空間を創る吉野石膏
［本社］東京都千代田区丸の内3-3-1 新東京ビル 〒100-0005
http://www.yoshino-gypsum.com/
取締役社長　須藤永一郎